

# 静岡大学

## 地域課題解決支援プロジェクト成果報告書

### 第7号

---

#### 目次

成果報告書第7号の刊行にあたって	
地域課題解決支援プロジェクトの概要	3
地域課題一覧	
公開シンポジウム「地域課題に取り組むプラットフォームのあり方を考える」	9
伊豆半島における地域づくりの課題と可能性	
フューチャーセンター×地域 各地の取り組み事例から	
しずおかキッズカフェ	
子ども達の「できる!」を社会の中に～株式会社こども会議(仮)の挑戦～	
パネル・ディスカッション	
静岡大学×和歌山大学研究フォーラム	
「半島地域における交流・協働のためのプラットフォームを考える」	45
伊豆半島ジオパークを軸にした取り組みと今後の展開	
半島地域における高大地域連携による地域発展学習の取り組み	
紀伊半島における鉄道防災教育を中心とした取り組みと今後の展開	
パネル・ディスカッション	
相互的な学びを伴った課題解決支援	

---

静岡大学地域創造教育センター

2022

# 成果報告書第7号の刊行にあたって

静岡大学学長  
日詰 一幸

本学にとって、地域連携・社会貢献活動は、これまでも、またこれからもきわめて重要な果たすべき役割の一つです。平成29年には「地域志向大学」宣言を行いました。こうした方針は、本学のこれまでの歩み・精神を継承し発展させるものであり、地域に根差した大学という本学の方向性をあらためて確認するものです。

平成23年度に学生・教職員が地域社会と協働で取り組む地域活性化活動を支援する「地域連携応援プロジェクト」を開始し、今年度までのべ198件の応募に対し、137件を採択して支援を行ってきました。平成25年度からは、これまで大学との接点がない地域からも広く課題を公募する「地域課題解決支援プロジェクト」を立ち上げ、第1期・第2期の公募で県内各地から計44件の応募をいただき、地域に赴きヒアリングを行って、地域課題データベースを作成・公開しています。興味・関心を持った教職員・学生とのマッチングをはかり、基本的には年度内に成果を出す地域連携応援プロジェクトとは違って、年度をまたいで継続的に諸課題に取り組んでいます。各取り組みの成果も積み上がり、このほど成果報告書第7号を刊行する運びとなりました。

この成果報告書が扱っている地域課題解決支援のあったここ2年間は、コロナ禍に翻弄された2年でもありました。新型コロナウイルスの感染状況は本学の教育・研究活動のあり方を大きく左右しましたが、学外との交流が主となる地域連携・社会貢献活動にも、特に強い影響が及びました。

授業の一環である地域創造学環フィールドワークは、一昨年度末から現在にいたるまで現地に行く回数が激減し、リモートでの交流が主となりました。地域連携応援プロジェクトも当初の計画通り実施されたものは少数となっています。そのような中であっても、地域課題解決支援プロジェクトの選定地域になっている伊豆半島地域では、様々な活動が行われました。

活動の中心となりつつあるのは、令和2年4月に立ち上がった未来社会デザイン機構であり、東部サテライト「三余塾」です。東部サテライトが立地する伊豆市、「2030松崎プロジェクト」を進める松崎町など、様々な課題が山積する伊豆半島地域で活動を展開しながら、共通の課題を有する地域・大学とも連携し、これからの地域のあり方を考えていきます。

これまで刊行した成果報告書でも述べたように、大学の構成員が恒常的に社会連携・地域貢献活動に携わることで、教育・研究のあり方が深化・拡充する、それがまた次なる社会連携につながるといった、教育・研究・社会連携の好循環をつくるのが本学の目指している方向性です。今回の報告書で取り上げた種々の取り組みも地域に根付こうとしているところですが、ご一読の上、ご助言、ご示唆を賜りますよう、よろしくごお願い申し上げます。





## 地域課題解決支援プロジェクトの概要

「地域課題解決支援プロジェクト」は、地域社会が抱える課題を大学が再発見し、大学のもつ様々な資源を活かしながら地域と大学が連携し、対応策をともに考え、協働することによって課題解決を支援する事業です。大学と地域との新たな連携を立ち上げるべく、これまで大学と接点がなかった地域や団体も含め、広く学外から地域課題を公募し、県内全域から27件（準備不足のため辞退された1件を除く）の応募があり、重点的に取り組む課題群をモデル事業として取り組みました。

モデル事業以外の課題についても、提案地域に赴いてヒアリングを行い、地域課題データベースとして学内外に広報し、興味関心をもつ教職員・学生とのマッチングをはかってきました。

第1期の地域課題に取り組む中で、継続的に地域とかわった学生たちの成長がみられました。そこで、これまでの地域課題に引き続き取り組みながら、平成28年度には第2期公募として、継続的に学生を受け入れていただける地域課題の募集を行い、全15件の課題が寄せられました。

寄せられた42件の提案課題については、ウェブサイトにて一般公開中であり、学内では各研究室・学生とのマッチングを進めています。学内外を問わず、各課題にご協力いただける研究室・教職員・学生・その他関係機関の皆様は、当センターまでご連絡ください。担当者がコーディネートをいたします。

- ・ウェブサイト URL： [http://www.lc.shizuoka.ac.jp/areastudies\\_index.html](http://www.lc.shizuoka.ac.jp/areastudies_index.html)
- ・連絡先： TEL 054-238-4817、E-mail： [kaiho@suml.cii.shizuoka.ac.jp](mailto:kaiho@suml.cii.shizuoka.ac.jp)

### 地域課題一覧

#### 《第1期》

No	応募団体/関連団体	現在困っていること（地域課題）について	大学に期待する支援について
1	夢の里みつかわあぐりい（袋井市）	三川地区の課題は、『三川が誇る3つの財産（農業・環境・人）をより合わせ、欲しい、行きたい、住みたい地区を創る』こと。人との絆を大切に、心通い温もりのあるまちづくりに取り組みたい。	①出会いの場の提供をし、結婚する人を増やす方策 ②袋井市地域の活性化方策 ③地産地消の推進のための方策
2	御前崎市役所	御前崎市では過去の人口増加を背景に、原子力関連交付金等により公共施設の整備を進めたが、少子高齢化や人口減少により公共施設のあり方が変化した。公共施設マネジメントへの取組が必要である。	①今後の当市の財政状況分析 ②公共施設マネジメントの可能性及び取組手法 ③公共施設の費用便益分析
3	ユークロニア株式会社（静岡市）	県内の小中学校では睡眠不足からくる問題が顕在化している。「睡眠授業」の依頼が増えているが、研修にはマンパワーが不足。地域の課題として睡眠を整えることができる仕組み作りが必要である。	①睡眠教育の標準化や効果検証 ②教育者の育成 ③静岡独自の睡眠問題の調査により、地域にあった生活スタイルを探る。
4	NPO複合力（静岡市）	両河内地域の高齢化は進み、休講農地が増えている。森林公園「やすらぎの森」は、老朽化にもかかわらず年間30万人が訪れる。脱・限界集落の手がかりを得て、地域を活性化する手立てを考えたい。	①農産物の品質を高め、商品化する栽培知識技術。竹林等を伐採し、循環型資源とする知識技術。 ②グリーンツーリズムを活性化するための知識技術 ③大学生など若いマンパワーが恒常的に来園する方策
5	静岡市北部生涯学習センター美和分館	潜在的な利用者ニーズの把握が十分ではない。広く地域住民の生涯学習に対するニーズ把握のため調査を企画した。それにより、一層充実した学びの機会を地域に提供し、地域コミュニティ活動の推進につなげたい。	地域住民に対するアンケート調査への助言及び分析

6	静岡市立登呂博物館	リニューアルオープン後、年々来館者数が減少している。イメージ・キャラクターを使った誘客活動を行ってきたが、マンネリ状態になっている。また、多様化する来館者に対応するため、多言語仕様の資料が必要となる。	①イメージキャラクターを活用した教育普及事業の開催への支援。 ②登呂遺跡および登呂博物館の概要を紹介した多言語対応パンフレットの作成とHPの構築
7	NPO法人 富士川っ子の会 (富士市)	子育て支援中心の活動を、今後は生涯学習の観点から事業を広めていく必要がある。当NPO、行政、企業が協働できるようなテーマで解決を図る活動を展開する。活動拠点の確保、会員の若返り施策と後継者の育成が課題。	①当団体、行政、企業との協働により、団体の若返りと活動の幅を広げ、定款に示す事業展開の具体化。 ②活動拠点の確保。
8	油山川のマコモを根絶する会 (袋井市)	油山川では700mにわたってマコモが繁殖し、流下能力を著しく低下させ、景観上からも問題になっている。河川管理者が年に1回刈り取りを行っているが、マコモは繁殖力が旺盛で、2カ月もすると元の状態に戻ってしまう。	活動の中で、マコモは根が残っていると再生するが、完全に取り出せば再生しないこと、天地返しにより根が腐り取り出せることが分かった。マコモの生態研究、根絶手法の検証で研究支援を期待する。
9	袋井市三川自治会連合会	高齢者が地域社会に飛び出せない、“生き甲斐や社会貢献”の機会が確保できない。	①高齢者の意識調査 ②高齢者のライフスタイルの解析 ③高齢者の社会進出の仕掛けづくり ④全国での成功(失敗)事例の紹介 ⑤街づくりワークショップ等への共同参加
10	南伊豆新生機構 (南伊豆町)	①未利用の土地の有効活用がされていない。 ②地場産業が稼働していないため人口が流出している。 ③人材が育っていないため、外部の人材との交流がうまくできていない。 ④行政の協力体制がない。	①知的アドバイスの支援 ②人材の支援 ③資金の支援
11	焼津市役所総務部政策企画課	焼津市では、高度成長期の急激な人口増を背景に公共施設の整備を進めてきたが、老朽化が進んでいる。効果的に公共施設をマネジメントしていく取組が求められている。	地域の人口推移の検証や施設の利用状況を詳細に分析し、老朽化を迎えている集会所の複合化案について提案頂き、市民への説明、話し合いを経て、建設計画を実現可能レベルに調整
12	浮橋地域のスローフードを考える会 (伊豆の国市)	中山間地の活性化	①大学生の視点から、中山間地を幅広い世代にアピールするための意見がほしい。 ②ワークショップを取り入れながら、地元の自然を最大限に利用し、農業・観光へと循環させるプランを検討してほしい。
13	株式会社アイ・クリエイティブ/ジョブトレーニング事業 (静岡市)	①ニート(若年無業者)増加問題。 ②静岡県耕作放棄地増加問題。	①大学に望むこと…ニート・ひきこもりや発達障害などの教育心理の知恵を貸してほしい。 ②ジョブトレーニングが提供するもの…ゼミ等の一環として参加してもらうことで、実態現場+学びの場を提供する。
14	松崎町	町内にはなまこ壁を配した歴史的建造物が残されている。所有者の高齢化、維持のコスト高等で取り壊すことが多い。町の財産ではあるが個人の所有物である歴史的建造物を、いかに後世に残していくべきか悩んでいる。	最小の費用で最大の効果のある維持や修繕方法を一緒に考え、古民家を利用したまちづくり手法と収益事業のアドバイスや、学生による町おこしや収益事業の模索など。
15	松崎町	町民の森「牛原山」を利活用したいが、中途半端に行政主導で整備してきたため町民の利用が少ない。眺望はよく晴れていれば展望台からは富士山も望める素晴らしい山だが、利用されない。	人が集まる仕掛けや、町民が自ら維持や修繕に携われる方法を一緒に考え、里山の素晴らしさを内外に発信し、愛され利用される森にしたい。アドバイスや学生の知力、体力、気力を町おこしに活かしたい。
16	松崎町	松崎町では、ソフト、ハード両面からの防災施策が急務である。津波対策として水門の建設や防潮堤の嵩上げなど必要な事業だが、景観などの問題で全体の理解が得られない。	防災機能だけの無機質な防潮堤や水門を、どうしたら景観に配慮したデザインや機能を持たせることができるか、一緒に考えてほしい。
17	松崎町	過疎化・少子高齢化により、当町もご多分に漏れず耕作放棄地が急増してきている。このままでは町内の農地が荒地だらけになり、今年度加盟を認められた「日本で最も美しい村」連合に恥ずかしい姿をさらしかねない。	耕作放棄地の解消だけでなく、永続的に利活用し続けることができる仕掛けづくりを期待する。当町での有効な作物の選別や耕作方法の指導、学生による農業体験事業化などでの協力がほしい。
18	松崎町商工会	松崎町の中心市街地である商店街が、過疎化・少子高齢化によりどんどん寂れている。このままではゴーストタウン化してしまう。現在でも転居し、空き地になるところが後を絶たない。空き店舗も多く、シャッター商店街になりつつある。	商店街の魅力発掘と、買い物弱者である高齢者への商店街への買い物支援法。商店街のアート誘致、コミュニティ公園化について助言がほしい。全体的なデザインについても関わってほしい。



19	浜松都市環境フォーラム (浜松市)	浜松市はマイカーに依存した都市となっている。深刻な渋滞問題が予測され、抜本的な交通対策が急務である。工業都市として発展してきた浜松が、今後も持続的に発展していくには観光・文化都市としてのまちづくりが必要になる。	持続可能な都市づくりは、行政・民間が扱いきれない空白の分野で、大学の持つ知的・人的資源を活用して研究する価値が高く、実現を前提に「特区」の認定を受けられるような研究を期待したい。
20	伊豆半島ジオパーク推進協議会	伊豆半島ジオパークの進捗を判断する評価指標や調査方法の不足。貴重な資源の保全、教育、防災、地域振興等、様々な分野での取組があるが、活動の検証とフィードバックが難しい。	伊豆半島ジオパークの活動の進捗状況を把握し、フィードバックするのにどのような調査や指標が適当なのか、大学の知的、人的資源を活かしたモデル調査の実施、各種資料の収集と分析等。
21	三保の松原フューチャーセンター (静岡市)	①三保の松原の保全。 ②三保の魅力を知り、次世代へ伝えていく仕組みづくり。 ③三保住民の安全な生活環境の確保。 三保で活動している団体は数多く存在するが、横の連携が取れておらず、協働できるきっかけがほしい。	①耕作放棄地を活用し、三保自生の松から植樹用の松を育て、商品化するための支援。 ②子供や住民が気軽に参加できるイベントを開催し、地域の関わりを強化するための支援。
22	焼津市市民活動交流センター運営協議会	焼津市内には市民団体が数多くあるが、団体相互の交流が少なく、協働もできていない。焼津市の抱える様々な問題に行政、企業、市民が協働して解決策を模索するようになれば、もっと良いまちになると思われる。	市民活動の実態を知り、その活動を直接・間接に支援できる人材育成を依頼したい。センターへの支援として、情報発信能力の強化、交流会の企画立案、市民が参加しやすい方法論の検討などがある。
23	静岡市葵生涯学習センター	①「生涯学習」の学習格差の解消 ②「生涯学習」に興味・関心がない地域住民に「生涯学習」に取り組んでいただけるよう支援していく	①地域の現状調査の一連の事業の中で、調査方法や課題解消への取組方法、評価方法へのアドバイスがほしい。 ②大学生等の若年層の認知を高める手法を開発、事業実施をする。
24	伊豆を愛する会 (南伊豆町)	ジオサイト候補地の里山を所有しているが、安全面の不安を理由に、南伊豆町観光協会と行政は消極的である。これまで500名以上の方が問題なく見学しており、地域の不安を取り除くために力を貸してほしい。	①岩石構造専門家の派遣をお願いしたい。 ②石切り場には、昔の人が文字を掘った跡が何か所もあり、解明されていないことも多く、歴史文化の専門家の派遣をお願いしたい。
25	静岡県／松崎町	①棚田保全・活用－石部地区の棚田を保全するとともに活用を検討。 ②特産品を活用して加工品づくりと販路拡大までを検討。 ③伝統芸能保存。 ④大学と地域のネットワーク化。	①既存のつながりでは生み出されていない部分の開拓に期待。 ②新しい視点で工夫を加えた加工品を開発してほしい。 ③継続的課題解決活動に取り組み、地元との連携を築いてほしい。
26	静岡県／東伊豆町	①エコタウンとしての売り出しに向けたガイドシステムの研究。 ②地域づくりインターンとしての学生の参加。 ③オーリーブの里づくりへの大学の参画。	①エコ資源の活用方法の提案。 ②従来より長期的な関わりが可能な大学生の派遣と、長期的な関わりを求める。 ③オーリーブの栽培の可能性について、植樹の段階からの研究を希望。
27	静岡県／南伊豆町	①竹の子振興方策の検討－産地化に取り組んでいるが、竹林の利活用についての研究が必要。 ②過疎地域における公共交通サービスの在り方の検討が課題。	①従来と異なる新たな竹の子の活用策の提案に期待。 ②集落が分散し、主要道路周辺のみを運行するのではカバーしきれない公共交通網維持の問題の検討に期待。

《第2期》

No.	応募団体/関連団体	現在困っていること（地域課題）について	大学に期待する支援について
1	東伊豆町観光協会 (東伊豆町)	東伊豆のジオスポット・細野高原の「すすき祭り」は、町民による活動が実を結び集客が伸び始めた現在、さらなる活動の展開が課題となる。町内へ観光客を誘導するための食品開発・土産物の展開などを通して、細野高原・東伊豆町の価値を高めていきたい。	学生たちには細野高原イベント委員会へ参画という形での支援を期待する。参画することによって、実行委員会や地域住民と交流を図るとともに、地域の実態を学生たちの目線で捉え、問題提起・解決方法の提案・提案の実行を実行委員会や当団体とともに作り上げていきたい。
2	静岡市葵生涯学習センター 指定管理者(公財)静岡市文化振興財団	静岡市生涯学習センターは地域住民が豊かな人生を送るための場として活用されているが、学生・勤労者層は利用率が低い。すべての地域住民の生涯学習活動を充実し、地域と密着した活動とするため、事業の企画立案・運営に地域住民自身、特に若年層が参画することが重要である。	①市民協働・若者参画による生涯学習の活性化のため継続的な意識調査において、企画・実施・分析作業を支援してほしい。 ②若年層に対して、施設や生涯学習の認知を高めるための手法を開発・事業実施をしているが、そのプロセスに参画してほしい。 ③実習生制度への学生参加を推進してほしい。

3	富士のさとの森づくり実行委員会(御殿場市)	国立中央青少年交流の家には様々な樹木が存在するが、一定の考え方をもって植栽するべきであるとの意見が寄せられている。すでにランドデザインが一応存在しているが、これをひとつのたたき台にしてコンセプトを固めていく必要がある。	①学生の意見を反映した森づくりのランドデザインの再構築作業 ②ランドデザイン再構築に必要な森林の伐採等の作業 ③既存の草花の生育等に配慮した環境の専門家の指導、助言(整備時期、整備内容の決定)
4	松崎町	旧依田邸は築300年以上の歴史をもつ建造物で、伊豆半島の発展の原点であり、歴史的・文化的な価値が高いが、修繕・保存という課題に直面している。また町の地域資源として活用し、まちおこしの拠点とする方策を立案・実行することも課題である。	最少の費用で最大の効果のある維持や修繕方法を一緒に考え、歴史ある建造物を利用したまちづくり手法を提案してほしい。教職員・学生を送り出してフィールドワークとして支援していただきたい。
5	松崎町	当町では近隣に大学がなく、せっかく素晴らしい公開講座などがあっても、移動時間を考えると参加をあきらめるしかない。また、大学生との交流に時間とコストがかかるため、いつ何時でも交流が持てる状態にない。	今夏(2016年7月)オープンした、シェアオフィス「ふれあいとふや。」において、静大の公開講座を受講できるように配信を検討していただきたい。大学生との交流にも使っていただきたい。
6	松崎町	松崎町が抱える課題として、人口集中地域から遠いこと、交通手段が整っていないことがあげられる。そうしたハンディキャップを克服して交流を進める方法としてのICTの活用が考えられる。光ファイバー網の整備をしたが、利活用の具体的な方法が見つからずにいる。	防災や観光、福祉をICT技術で地方の不利、不便さを解消できる技術や提案の提供。
7	松崎町	全国で活発に行われているふるさと納税だが、当町では返礼品競争ではないふるさと納税本来の趣旨を踏まえた活性化を検討しているが、思ったように納税額が伸びない。	外部から見た松崎町の魅力を探り、そのうえでどのような返礼品やどうしたら納税満足度が上がるかを一緒に研究してほしい。
8	松崎町	町内に大学の施設や研究室などがいないため、産官学の連携した取り組みができない。また、仕事が少ないため若い人が出ていく。	新しい働き方や隙間産業などを学生と一緒に考案していただきたい。 例:耕作放棄地や放棄果樹園を集約し、都市部の週末農業体験のニーズへ繋げるなど。
9	茶夢来(菊川市)	環境整備や農業を核とした新たなライフスタイルを実現する地域づくりが必要となっており、食と農の拠点創造、食育の場づくりを目指している。地域住民の意識調査やニーズ調査をベースに、地域住民が一体となった取り組みを行っていききたい。	農業を核とした食育、地域食材を活用した商品開発、レシピ開発、ノルディックウォーキングを活用した地域健康づくりと観光開発など地域が一体となったまちづくりを目指したい。菊川ブランドのストーリー性の創造に大学の支援をいただきたい。
10	NPO法人富士川っ子の会(富士市)	地域全体に「かわっこカフェ」の存在を周知し、自由に集える居場所であることを認知させる手立てを見出すことが課題である。参加者には「かわっこカフェ」の存在意義が理解されつつあるが、地域住民に「一度は行ってみようと思わせる仕組みの工夫」が必要である。	遊び塾と「かわっこカフェ」の活動を通して、次の点を明確にしたアドバイス。 ①地域に求められている居場所とはどんなものか ②それはどのように形作られるべきか ③地域での連携で欠かせないものは何か
11	NPO法人富士川っ子の会(富士市)	富士市の高齢化率は全国平均程度だが、要介護者数も多く深刻な問題となっている。解決法として、高齢者が後期高齢者の介護を担当するようにして、循環型の介護要員を確保するという構想のもとで活動を進めている。	課題に対応する団体設立の可能性と実現のために必要なことのアドバイスをいただきたい。 ①介護者と要介護者の区分方法 ②適正報酬額の算出 ③団体の設立及びあるべき介護支援形態
12	自立快活プログラム実施 自立援助ルーム 訪問レストランf(浜松市北区)	障害者に対する理解と認知が低すぎ、また障害者であることをカミングアウトできない社会性が問題である。自立して一人暮らしする障害者も増えてきたが、結果的に介助者の手を借りるため、介助者本位のサービスを受けている。本来的な意味での自立援助が必要である。	①事業自体が本格始動していないので、まずグレーゾーンにどれくらい障害者が存在しているのか示してほしい。 ②障害者のための恋愛対策に共に踏み込んでほしい。 ③理解促進を深めるための方策を検討してほしい。
13	認定NPO法人クリエイティブサポートレッツ(浜松市西区)	障害福祉サービス事業所「アルス・ノヴァ」では、毎日30名以上の障害を抱えた方々が通ってきている。「多様で寛容な社会」の実現のため、できるだけ多くの人にこの場を体感してもらいたいが、一般の方々に足を運んでもらうことが難しい。	①学生たち自身が障害福祉施設を体験・体感してほしい。 ②その体験をもとに、どうしたら自分の知り合いが障害福祉施設に関心をもつのか考え、実際に身近な人を誘ってきてもらいたい。 ③広く一般の人に関心をもってもらうための方法を共に考え実行していきたい。

14	空き家再生プロジェクト (静岡市駿河区)	空き家の利活用を促進し、地域社会の活性化に貢献することを課題として、次のような活動をしている。 ①空き家に関する研究活動(発生と利活用方法、意識調査) ②空き家の利活用にむけた啓発活動(イベント・セミナー) ③空き家再生活動(マッチングサポート・リノベーション)	積極的にまちづくりに関わることを目指して、空き家を再生したサテライト研究室を設けて、地域を活性化するためのリサーチ・研究を進めているが、この活動に継続的に関わってもらいたい。
15	南伊豆町	伊豆半島最南端に位置し、人口減少と地方経済の縮減が続き、その克服が基本的課題である。一方、豊かな自然環境をはじめとした地域資源も有し、大都市圏との連携を取りながら健康創造のまちづくりを進めているが、大学と連携することによってそうした取り組みを加速できる。	宿泊型のフィールドワークや長期休暇を利用したインターンシップ等を企画し、南伊豆ならではの地域資源を活かしたまちづくりに関わってほしい。

地域課題をきっかけに、それぞれの地域に入り、住民の方と交流し、課題解決を一緒に考えることを通して、学生たちは大きく成長しています。

これまでに取り組んできた各課題の進捗状況は、こちらからご確認ください。

[http://www.lc.shizuoka.ac.jp/areastudies\\_history\\_list.php](http://www.lc.shizuoka.ac.jp/areastudies_history_list.php)





## 公開シンポジウム

# 地域課題に取り組むプラットフォームのあり方を考える

日 時：2020年12月24日（木）13:10～16:30

開催方法：Zoomによるオンライン形式

プログラム：

(1) 地域連携・課題解決支援の事例報告

報告1「伊豆半島における地域づくりの課題と可能性」

報告者：深澤準弥（松崎町企画観光課）

山口一実（南伊豆町地方創生室）

荒武優希（NPO法人ローカルデザインネットワーク理事長）

報告2「フューチャーセンター×地域 各地の取り組み事例から」

報告者：宇賀田栄次（静岡大学学生支援センター教授）

増田彩香（静大フューチャーセンター5代目学生ディレクター）

報告3「しずおかキッズカフェ」

報告者：小林タバサ（しずおかキッズカフェ代表）

報告4「子ども達の「できる！」を社会の中に～株式会社こども会議（仮）の挑戦」

報告者：安池中也（株式会社こども会議（仮））

(2) パネル・ディスカッション

パネリスト：報告者、課題提案者

コーディネーター：阿部耕也（静岡大学地域創造教育センター長）

阿部（コーディネーター）——ただ今から、地域課題解決支援プロジェクト公開シンポジウム「地域課題に取り組むプラットフォームのあり方を考える」を開催します。例年、集中講義「地域連携論」の授業内シンポジウムとして開催しており、今回が4回目だと思います。残念ながら今回は1カ所に集まることができず、Zoomを使ったオンライン形式の開催となります。いろいろご不便をおかけすると思いますが、どうぞよろしくお願いいたします。

それぞれ報告をしている間もチャットで質問を書き込んでいただければと思います。その場合、全員宛てで書き込んでください。

それでは地域連携・課題解決支援の事例報告として、3人にそれぞれ報告していただきたいと思います。松崎町企画観光課の深澤準弥様、よろしくお願いいたします。

## 報告 1

# 伊豆半島における地域づくりの課題と可能性

## 松崎町における課題と可能性

深澤準弥（松崎町企画観光課）

松崎町は、伊豆半島の駿河湾沿いの西南部にあります。元々、港町として栄えた場所で、江戸(東京)と上方(大阪)間の商船の風待ち港として人と物の交流が盛んだったといわれています。

### 1. 伊豆半島における課題

伊豆半島における課題は共通したものが多く、人口流出、少子高齢化、産業の担い手不足、人・金・知恵の不足、魅力ある職業がない、ポテンシャルは高いといわれているはずの地域資源の価値が理解されていない、観光と防災の両立などが挙げられます。

最近は新型コロナウイルスによる影響もあります。人の動きが止まると観光地は大打撃を受けるという現実があり、伊豆半島全体が明らかにひどい目に遭っています。Go Toキャンペーンで少し持ち直した部分もありますが、特に関東圏の経済にもものすごく依存していることが今回露呈した感じです。また、高齢化率が高いために人々の不安も増幅されています。これは世界的な課題でもありますが、感染症対策と経済活性化の両立が課題です。

### 2. まつぎきスタイル

松崎町としては、海水浴場を開けるときに、新たな方針として「まつぎきスタイル」を打ち出しました。歴史的にも交流の町であることと、人がいいといわれる伊豆半島南部の売りを生かすだけでなく、安全・安心をしっかりと提供するためには、われわれ受け入れ側だけでなく、来る人にもしっかりと責任を持ってもらいながら、お互いにリスクを回避して安全・安心で楽しい旅をしてもらえるスタイルとして、ホームページなどで周知しました。具体的な施策よりも精神面のことを売りにしたのが松崎らしさだと思っています。当然、それ以前に消毒やマスク着用などはやるべきことですから、個々のお店や宿泊業者などをお願いしています。

今回の新型コロナで、好影響も少なからずありました。東京だけがかっこいいわけではありませなし、若い人たちの価値観にも多少の変化が生じています。また、新しい働き方や生活の仕方にも随分変化があって、自分の生き方を考えるようになったと思います。東伊豆町の荒武君もそうですが、地方で生きることの価値が上がった、もしくは荒武君のように上げてくれたこともとてもありがたい話で、伊豆半島にはそうした可能性がまだまだあるのではないかと感じます。

やはり地方には多くの可能性が秘められています。視点を変えて、ピンチをチャンスに切り替えるのは気持ち一つだろうと考えて、今後の取り組みを始めています。

### 3. 取り組み事例

松崎町では先月（2020年11月）まで、自動運転の実証実験を行っていました。当町は公共交通が脆弱なため、高齢者の足の確保が大きな問題となっています。鉄道がなく、バス・自家用車・タクシーといったものしかないので、移動がなかなか困難です。そこで、住民の不便を考える

ときに、2次交通、3次交通の脆弱さをいろいろなパターンで考えなければならないということで、自動運転の実証実験を積極的に受け入れたのです。

ただ、ハードルが高過ぎました。実証実験はできるのですが、実際に運用できるようになるまでには相当な時間がかかるだろうと思います。それまでの交通施策を考えるために、いろいろな形で実態を確認しているところです。スマホなどの電子機器を使ってモビリティ・アズ・ア・サービス（Mobility as a Service：MaaS、サービスとしての移動）が進められていますが、あと10年もすれば高齢者はみんなスマホを持つようになると思うので、それまでの10年間をどうするかというのが課題だと思っています。

また、コロナ禍の中、感染対策を徹底した上でのスポーツイベントやアクティビティの実施など、「新しい生活様式」に準じた対応にチャレンジしています。松崎から修善寺までの稜線を走る「伊豆トレイルジャーニー（IZU TRAIL Journey）」というレースは、国際トレイルランニング協会認定レースであり、前泊の人もかなりいるので、ホテルなど宿泊業関係者はできれば開いてほしいという意向がありました。松崎スタートですし、松崎から発信したレースなの



図1 伊豆トレイルジャーニーのレース風景

で、感染対策を徹底しながら12月13日に実施しました（図1）。レース前後の2週間、選手・スタッフ全員の健康状態をアプリで確認しています。今回のコロナ禍では、外でのアクティビティをいかに楽しんでもらえるかが非常に重要だと感じたので、そうしたものをいろいろ推進していければと思っています。

松崎の体験スポットはどんな所があるか、関係者の皆さんは何度も来ていただいたり、私の話を聞いていただいたりしているので、分かっている方が随分多いと思います。海や川、田んぼの風景、歴史的・文化的な建物のほか、かつて石切り場だった所にお墓を入れた雲見霊廟などもあり、空海が修行に訪れたともいわれています。

元々、人の交流で発展してきたので、そうしたものを大事にしようと考え、松崎町は「日本で最も美しい村連合」に加盟していろいろなエリアとつながっています。

#### 4. 松崎の未来と観光

先日（12月20日）は静岡大学と、「松崎町の未来と観光を考える」プロジェクトのキックオフシンポジウムを実施しました（図2）。基本的には新しいツーリズムの形であるサステナブル・ツーリズム（持続可能な観光）の構築を目指すもので、私どもと静岡大、町観光協会、伊豆半島ジオガイド協会の主催によるシンポジウムです。

一番力を入れているのは、バックキャストिंगの手法です。松崎町の未来を考える際に現在15歳の中学生、18歳の高校生の10年後を考え、この子たちが25歳、28歳になったときにどんな町であってほしいかを考え直す機会を提供しています。彼らと共に松崎町の未来と観光を考え、持続可能な地域とは何か、社会とは何かということから、静岡大学と地域の大人たちが責任を持って未来につなぐために、子どもたち



図2 「松崎町の未来と観光を考える」プロジェクト シンポジウムチラシ

の夢を聞き出し、その夢をサポートできるような地域になることを目指しています。

テレワークやワーケーションなどの新しい働き方も出てきましたし、クリエイティブな考えの民間企業を呼び込んで、新しい価値観、新しい稼ぎ方で地域活性化に多種多様なイノベーションを起こしてもらうことも可能ではないかと思っています。

## 5. 伊豆半島の可能性

地域の課題を解決するには地域の力だけでは限界がありますし、特に伊豆南部は世界が経験したことの無いスピードで人口減少と高齢化が進んでいます。実はそのスピードに負けないぐらいの技術革新も中央では進んでいます。その恩恵を地方が享受できることは少ないので、大学や民間企業と連携し、地元の大人たちと共にイノベーションを起こし、チャンスをもにしたいと考えています。それは松崎町1町だけでは100%不可能なので、近隣の市町や伊豆半島全体の連携があってはじめて進められるのだろうと考えています。

松崎町の「田んぼをつかった花畑」も、最初は自治体が始めたのですが、予算がないのでやめると言ったところ民間に引き継いでいただき、今は地域の人がいちいち苦難を乗り越えながら継続しています。このような精神文化をもっと大切にしながら活性化を進めていくことが松崎町の進むべき道だと考えています。

## コロナ禍における地域課題解決×関係人口創出

山口一実（南伊豆町地方創生室）

### 1. 賀茂地域の人口の流れ

南伊豆町を含む賀茂地域の人口の流れは、下田市を中心に動いていると見ていただろうと思います。南から北への流れが大きく、特に顕著なのは下田市から河津町、河津町から賀茂地域外、あるいは東伊豆町から伊東市への流れです（図1）。下田市からは南伊豆町、河津町、東伊豆町、松崎町と満遍なく人が動いています。つまり、地域内での人口の奪い合いにより、結果的に地域外への人口流出を招くことが危惧されます。人口減少対策として地域ごとに補助制度などを設けることは、各地域の人口減少対策にはなるかもしれませんが、賀茂地域全体としては人口流出を招く可能性があることをまず捉えていただければと思います。



図1 賀茂地域の人口の流れ：域内移動から域外流出へ

南伊豆町の場合、人口の大きな流れが役場を中心に大きく五つあり、下田市への人口流出につながっています。当然、より暮らしやすい所には人は流れていくので、人口が周辺部から中心部に集まると周辺部は暮らしにくくなり、今度は中心部に集まってきた人たちがさらに暮らしやすい所を求めて下田市に流出するのです。これを伊豆半島全体で見ると、下田市に集まった人口が外部に流出していく可能性があるともいえると思います。これは南伊豆町だけでなく、他の地域でも起きている現象ではないかと捉えています。

賀茂地域では、人口の自然減、社会減が起っています。自然減になるのは、生まれた人より亡くなる人の方が多いからです。賀茂地域の合計特殊出生率自体は低くないのですが、出産年齢に該当する女性の人口が少ないため、全体の出生数が少なくなっているのです。当町でも



年間の出生数が約30人となっています。ただし、移住政策などによって小学校に上がる子どもの数は40～50人に増えています。先月（2020年11月）の南伊豆町の人口は社会増になっていて、十数人増えました。

国立社会保障・人口問題研究所の推計によると、賀茂地区の人口は2015年時点で6万6000人だったのが、2045年には半分以上の3万1481人になるとされ、ちょうど今年、生産年齢人口と高齢者人口の逆転が起こっていると考えられています。0～14歳人口は元々少ないのですが、出生率と女性人口の関係からさらに減っていくと見られています。

賀茂地域の他市町を見ても同じような状況となっています。特に生産年齢人口と高齢者比率は大体同じような動きをしています。西伊豆町だけはやや特異な動きで、今の段階から高齢者数が多くなっています。つまり、人口減少のスピードが他よりも速くなっているといえます。

## 2. 人口減少対策が課題ではない

ここまで人口の話をしてきましたが、われわれとしては人口減少を課題と捉えていません。人口減少によって引き起こされるさまざまな問題が地域の課題になっていると捉えています。行政は人口減少を課題として捉えている向きが多いと思います。地方交付税への影響や地域の自立・活性化などへの影響を考えれば、人口減少自体が課題になり得ますが、そこに暮らす人々にとっては人口減少自体が課題ではなく、人口減少を要因としたさまざまな事態が課題になっていると考えられます。

地域住民にしてみれば、今の自分の暮らしがそのまま続けば、人口が減ったとしても特に大きな問題はないのです。人口が減ることで今までできていたことができなくなったり、金銭的な負担が増えたりすることが大きな課題であり、それらを克服することが課題解消になると考えています。

併せて、地域づくりの観点からは、一定規模を有する地域においては移住推進などで人を呼び寄せ、地域活性化を図ることが有効かもしれません。しかし、既に人口が6000～8000人規模になっている伊豆地域の市町村にとっては必ずしも有効な手段になり得ない状況になってきています。

地域づくりといえば、コミュニティをどのようにして維持していくか、成長させていくかということになると思います。しかし、人口1000人のコミュニティに10人の移住者が入ってきてもそれほど大きな影響はありませんが、人口50人のコミュニティに5人の移住者が入ってくると、相当大きな変革が必要になります。そのコミュニティの中にこれまで存在していなかった人が一定数入ることで、その人たちの生活も含めた新たなコミュニティ形成を図らなければならなくなるので、相当な負担がかかると思います。つまり、人口減少対策を進めることで現在の課題を解決することにはならない場合も存在するのです。

南伊豆町では総合計画の中で主要課題を七つ挙げており、基本的には人口減少を要因として起こり得る課題が中心になっています。人口減少を抑制すること、あるいは人口増加を進めることでは必ずしも課題解決にならないといいつつも、やはり人口は一定規模を維持していく必要があり、それによって暮らしを支えていくための基礎ができるのは間違いないと考えています。

## 3. コロナ禍における関係人口創出

国は第2期の「まち・ひと・しごと創生総合戦略」の中で、東京一極集中を是正し、地方活性化を図るためには、東京の人口を地方に分散させる必要があると捉えています。中でも人口

減少に適応した地域をつくることを掲げており、この点に着目する必要があると思っています。人口減少を抑えることは必要ですが、人口減少を前提とし、それに適応した地域をつくることも必要です。松崎町の深澤さんも言っていたとおり、技術革新などによって生まれるものもあるでしょうし、これから説明する関係人口によって生まれるものもあると思っています。

関係人口とは、交流人口と定住人口の間にあるといわれている部分です(図2)。今年のコロナ禍において、南伊豆町では関係人口創出の取り組みとして、オンラインを活用してきました(図3)。これまで早稲田大学や静岡大学と行っていた地域連携ワークショップなどはすべてオンライン化し、南伊豆町に一度も来ることなく最終発表まで行いました。地域の人々のインタビューもオンラインで実施しています。にもかかわらず、早稲田大学との連携ワークショップでは約20名の学生に参加していただき、4チームで南伊豆町の課題について検討していただきました。これまで行っていた現地研修もオンラインで実施している状況です。

併せて、実は本日(12月24日)、協定を締結する予定なのですが、食のアプリを作っている株式会社キッチンハイクと連携して、南伊豆町の食材を各家庭に送り、南伊豆町内に住む調理人が講師としてオンラインで調理を実演しながら、みんなでそれを作って食べ、南伊豆町の話について語るようなコミュニティイベントをこれまで10回ほど実施しました。参加人数は毎回約20人と小規模ですが、その人たちが南伊豆町の人たちや食材と深く関わりを持つことで、関係人口創出につながるような仕組みを作っています。オンライン上ではありますが、こうして顔を合わせたことのある人のレストランに行ったり、アクティビティを体験したいと思えるような仕組みを作っているところです。

このような形で、コロナ禍ではありますが、オンラインのつながりを有効活用することで関係人口の創出につなげ、その関係人口がやがて地域の活力となることに期待して取り組んでいるところです。

## 建築学生がリノベーション起業に至るまで

荒武優希 (NPO法人ローカルデザインネットワーク理事長)

東伊豆町の中でも、特に私が活動している稲取地区に関する地域づくりの課題や可能性についてお話ししたいと思います。東伊豆町は、伊豆半島の東海岸沿いの中央辺りに位置します。人口減少が続いていますが、地域経済の中心に観光があり、そこから建設業、酒屋、食材卸売業者などに仕事が回って、地域にお金が循環している地域だと認識しています。

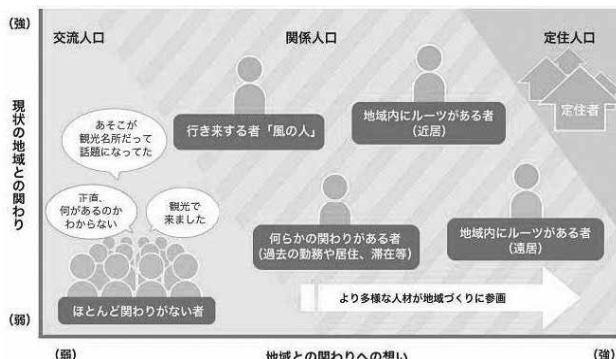


図2 「関係人口」概念図  
出典：総務省「関係人口」ポータルサイト  
<https://www.soumu.go.jp/kankeijinkou/>



図3 オンラインを活用した大学生とのワークショップ

伊豆半島はジオパークに認定されていて、元々はフィリピン海プレートの移動によって本州にくっ付いた土地だった関係で、日本国内でも特異な地質がいろいろと見受けられる地域です。これは東伊豆に限った話ではなく、伊豆全体がとても魅力的な自然に恵まれています。そうした特徴もこの土地の魅力ではないかと思っています。

## 1. 空き家改修プロジェクト

私は学生時代から、地域の空き家問題についていろいろな取り組みをしているのですが、2013年の調査によると、東伊豆町内の5979軒中1027軒が空き家というデータがあります。

私がこの土地に入ることになったきっかけを紹介しますと、私は横浜市出身で、芝浦工業大学建築学部で学んでいたのですが、学校の課題以外に現地で建築体験をしたことがなかったので、大学院に進学するタイミングで同級生たちと「空き家改修プロジェクト」という学生団体を作りました(図1)。この中でいろいろと成功や失敗、地域の人たちとのさまざまなドラマがあったのですが、その話はいつかどこかですることにして、とにかくこの土地のファンになって引っ越してきたのです。

学生時代に地元の人たちと話し合いながら、空き家だった東伊豆町消防団第六分団の器具置場を地域のコミュニティキッチンに改修したので、その施設を運用するため、私は2016年から東伊豆町の地域おこし協力隊員として移住しました。



図1 空き家改修の作業風景

## 2. 地域おこし協力隊の活動

地域おこし協力隊は行政の枠組みであり、3年間の任期中にいろいろなミッションを与えていただき、その中で活動することが仕事です。私の場合、東伊豆町の空き家を有効活用するために協力隊に入らせてもらいました。

特に、学生時代に改修したコミュニティキッチンは、第6分団の施設だったので「ダイロクキッチン」と呼んでいるのですが、食を通じた地域の交流拠点というテーマで、料理教室を開いたり、地元の高齢者を対象にした落語会や音楽ライブなども開いたりしました。地域住民に認識してもらい、楽しく使ってもらって、この土地の暮らしを豊かに感じてもらうようなことができればということで、利益度外視でお楽しみ会のようなことをしていました。

地域おこし協力隊の任期終了直前に、東伊豆町の稲取地区のメインストリート400mほどを使って、地域の商工会青年部の若手経営者とともに歩行者天国を実施し、今のコロナ時代では見られないような地域のにぎやかイベントを行いました(図2)。通りは普段、車が多く通行する場所で、歩行者はほとんどありません。元々は商店街として栄えた場所ですが、通りを歩行者天国にして、閉まっているシャッターもイベント期間中だけは開けて、仮のお店に入ってもらい、昔の商店街の雰囲気を復活させられないかという取り組みをしました。

地元の人たちからは「ここを歩行者天国にする発想は、よその人でなければ思いつかなかった」



図2 空き店舗活用×歩行者天国イベント「雞フェス」



と言われ、まず無理だろうと考えられていたのですが、仲間の中に建設業者がたくさんいたので、工事のための通行止めの申請手続きが得意な人や、看板を作って交通誘導するのが得意な人など、地域の業者のお力添えで意外とスムーズにイベントを開くことができました。私の力というより、周りの皆さんにご協力いただけてできたことですが、地元の人たちからもこのまま残ってもらいたいという話があり、自分自身もこの土地にまだまだ関わり続けたいので、地域おこし協力隊の任期終了後も伊豆に残って暮らしていけたらという思いをずっと持っていました。

### 3. リノベーション施設の運営

現在は、NPO法人ローカルデザインネットワークと、今年（2020年）4月に立ち上げた合同会社湊庵の二つを回しながら生計を立てています。湊庵では、学生時代からの文脈から稲取地区でリノベーションプロジェクトを立ち上げ、出来上がった建物を運用することで生計を立てていくことに挑戦しています（図3）。

NPO法人では現在、ダイロクキッチンとEAST DOCKを運用しています。ダイロクキッチンは、「食を通じた地域の人たちのコミュニティを作る場」とうたっています。コロナ禍でなかなか難しいのですが、定期的にカフェを開くような地元のお母さんや地域の高校生がいるので、その人たちが活動するときには、地元の人たちも集まるような場になっています。もう一つのEAST DOCKはコワーキングスペース（co-working space）で、海が見えるワークスペースを運用しています（図4）。奥には伊豆の山々が見えたり、伊豆急行も走って

いたりするので、少しジオラマチックな風景が展開しているようなワークスペースとなっています。

元々は両方ともシェアスペースのような形で運用していたのですが、南伊豆町の山口さんもお話しされていたように、伊豆は人口が結構流出しており、プレーヤーが不足してしまっている現状があります。われわれは元々よその人間であり、この土地を好きになって関わりを持ち始めた身でもあるので、われわれのような人は他にもいるのではないかと考えました。NPOのメンバーは学生時代の仲間が中心なので、ほとんど首都圏で本業を持ちながら関わってくれているのですが、そのメンバーの人脈を使いながら首都圏から人を呼んで、仲間集めをしました。

そのときネックになるのが、首都圏からの移動に約3時間かかってしまうことです。日帰りでは少しつらい面があります。周辺に旅館があるので、そこに滞在してもらったのですが、素泊まりでもそこそこ値が張ってしまう宿が多いので、来てくれる人の負担が大きいという話がありました。そんな折、いろいろと地域で活動する中で、とても稲取らしい物件をいい条件で貸してくれる人と出会い、宿泊事業に挑戦することになりました（図5）。これに関しては、NPOでは利益追求の事業を展開する上でハードルがあるため、後輩の地域おこし協力隊員と一緒に合同会社を立ち上げ、「湊庵」というプロジェクト名を付けて活動しています。

この物件は、車では入っていけないような港町ならではの路地を入っていかないととどり着



図3 稲取地区でリノベーション施設を運営



図4 EAST DOCKの海が見えるワークスペース

けない宿で、こうしたところを楽しみながら地域のファンになってくれる人と、これから地域づくりを行っていきたくと思っています。そのような人たちをふるいにかける装置としても機能させていきたいと考えています。

元々は家族4人が住んでいて、最後はおばあちゃんが一人で暮らしていた2階建ての家ですが、改修前は家財がいろ



図5 湊庵プロジェクト第一号物件 (錆御納戸)

いろと置かれていました。工事はほとんど業者をお願いしたのですが、自分たちで解体できる場所は自分たちでやっていくことにしました。1日1組限定の一棟貸しの宿ですが、おかげさまでいい感じでお客さんが入っていて、コワーキングスペースとの連携もうまく取れています。宿泊施設は平日がなかなか埋まりにくいのですが、ワーケーションのようなかたちで使ってくれる方が少しずつ増えているような状況です。

宿泊施設が多い地域への新規参入になるので、宿のポジショニングはしっかり考えなければいけないと思いました。既存の稲取の旅館は割と、温泉・食事・おもてなしなどの宿の魅力でお客さんを呼び込んでおり、そこにしっかり投資もしているので、宿泊費を高く設定し、基本的には宿の中で消費を促すスタイルが多いように思いました。

一方、私たちは地域を好きになってほしい、地域内でたくさん消費してほしいという狙いがあるので、宿泊費はできるだけ抑え、地域内で消費を楽しんでもらうことを意識していろいろと考えながらやっています。基本的には素泊まりで、風呂も取り払ってシャワールームだけにし、食事や温泉も外のお店を紹介するようにしました。宿でもできるだけ楽しく過ごしてもらいたいのですが、地域に泊まりに来るような感覚で遊びに来てくれる人たちを増やしていきたいと考えています。ゆくゆくは、こうしたリノベーション宿を増やし、地域の中に新しい人の流れを作っていくことを目指しています。

併せてEAST DOCKやダイロクキッチンという場所もあるので、そこともうまく連携しながら、稲取地区の漁港エリア・港町エリアをうまくブランディングしていけたらと思っています。元々ある魅力をうまく活用しながら、新しい人を呼び込んで、楽しんでもらえるような仕組みをたくさん作っていきたくと思っています。



図6 エリアブランディング構想

資金集めにはクラウドファンディングなども使っています。今ではクラウドファンディングで支援してくださった方が泊まりに来てくれたり、その人が紹介してくれた新しいお客さんが来てく

れたりしています。自分たちだけで宿を始めるのはハードルが高いですし、今日この場に参加してくださっている皆さんにもたくさんご支援いただいています。こうした仕組みを使えばみんなで作った宿のような感じになるのではないかと思い、クラウドファンディングに挑戦しました。

#### 4. 100年後の稲取の景色を作る

しかし、コロナ禍もありましたし、地域の課題が浮き彫りになったりもしました。私たちの



宿は、周辺の路地の雰囲気魅力的だったので今の場所で始めたのですが、開業してすぐに隣の家の解体工事が始まり、今は見るも無惨な、日当たりも風通しもいい宿になってしまいました。私が魅力的だと思っていた港町の風情が刻一刻となくなっていくような現状は、山口さんや深澤さんのお話にもたくさんありましたが、本当に地域の現状が刻一刻と悪化しているということを感じています。この町並みを残していくにはどうしたらいいか、日々考えているところ です。

軒先に干し柿がつるしてあって、物欲しげにしていたらおばあちゃんが顔を出して干し柿を私たちに恵んでくれるような、渋い路地の風情がたくさん残っているので、この風景をNPOと合同会社の両軸を回す中で次の世代の人たちにうまく引き継いでいけたらと考えながら、事業に取り組んでいます。

いろいろな人たちにまちづくりに関わってもらいたいと思っていますが、誰かにお勧めするよりも、まず自分たちが動き、その経験をいろいろな人たちに伝えながら仲間を増やしていくことが先決だと思っています。とはいえ、失敗し過ぎると、「あまりうまくいってないようだし、俺たちはやめておこうか」という感じになってしまうので、ある意味プレッシャーですが、事業を立ち上げた責任をしっかりと果たすためには、うまくいっているというアピールをたくさんしていかなければならないと思って日々奮闘中です。

目指しているのは、「100年後の稲取の景色を作る」ことです。たくさんの仲間と共に取り組んでいるつもりなので、これからもみんなで楽しくやっていきたいと思っています。

## 報告 2

## フューチャーセンター×地域 各地の取り組み事例から

宇賀田栄次（静岡大学学生支援センター教授）

増田彩香（静大フューチャーセンター5代目学生ディレクター）

### 1. 静大フューチャーセンター設立の経緯

（宇賀田）

私は民間から大学教員になって約10年になりますが、着任した当時、私が静大生だった頃と比べて能力や意識の高い学生が非常に多いと感じる一方、何か自信がないように感じていました。2011年でしたので、まだリーマンショックの影響もありましたし、ちょうど東日本大震災が起こり学生の就職不安も大きく、社会への不安や不信感の強さ、地域にいる社会人との接点の少なさを特に感じていました。

これらを背景として2013年8月、当時の理学部の3年生と静大フューチャーセンターをはじめました。その学生は棚田研究会というサークルで地域の方々との接点を持っていましたが、周りの学生にはその機会が非常に少なく、学生としてはそうした機会を作りたいという思いもあってスタートしました。

私には、学生にもっと自信を持って社会に出てほしいという思いがありました。「今の若者は」「今の学生は」などと一方的に足りないことを指摘するだけの社会人も多いのですが、大学に来て特に感じたのは、今の学生は力があり、意識も高く、みんなのことを考えているということです。そうしたことをもっと大人たちに分かってほしいという思いもありました。

フューチャーセンターは建物や組織の名前ではなく、あるテーマに利害関係がある人もない人も、多様な人が集まって、こうなったら未来はいいのではないかとすることを踏まえながら自分たちのできることを考え、対話する場のことを指します。元々は北欧の企業が新しいアイデアを出すために始めたものでしたが、日本の企業や地域にも広まっていきました。

静大フューチャーセンターの大きな特徴は、学生が運営・ファシリテーションしていくことです。フューチャーセンターでの対話そのものをフューチャーセッション（future session）というのですが、セッションのディレクターを学生が務めます。後ほど話をする増田さんは5代目のディレクターです。

### 2. 静大フューチャーセンターが果たしてきた役割

プラットフォームとしてのフューチャーセンターのこれまでを振り返ると、課題そのものを解決することはできませんが、地域の当事者にプラスアルファを残せたのではないかと感じます（図1）。深澤さん、山口さんの話にもあったように、地域内ではさまざまな課題や課題の要因がありますが、当事者だけではなかなか地域の課題は解決できません。人口減少から来る担い手不足があったり、関係が希薄になったり、課題が複雑化したり、価値観が多様化したりしています。

その中で、静大フューチャーセンターでは学生がファシリテートをし、地域内に入ることで何ができたかを振り返ると、まず一つは内外のサポーターを作れたような気がします。私が仕

事で初めて松崎町に行ったのが2015年でした。それ以降、松崎町との縁を勝手ながら感じ、松崎町に対して思いをはせる一人になったわけです。こうしたサポーターを増やすことができたと思いますし、もう一つは、中の人だけでは気が付かないことや意外な視点、新しい気付きも成果としてあります。そもそもこのような場を設けることで、できないことを探すよりもできることを探していくことができますし、当事者がやる気を持ってくれたり、覚悟を決めてくれたような場面にも遭遇しました。

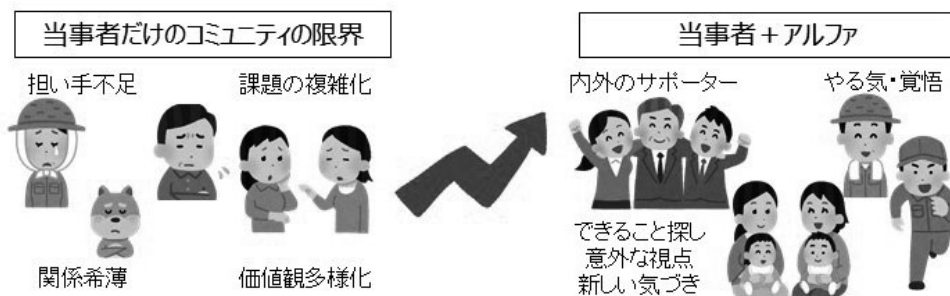


図1 地域課題に静大フューチャーセンターが果たせる役割

2015年の松崎町でのフューチャーセッションでは、学生ディレクターが聞き役になることで、大人が本音をしゃべってくれました。翌年（2016年）の菊川市では、住民の方々と一緒にお茶のイベントを考えている大人たちを後押しすることができました。

コロナ禍のため、今はオンラインのセッションですが、むしろオンラインだからこそ物理的な移動なしで、いろいろな方とつながっていける良さもあると感じています。

元々、学生に自信を持ってほしいという思いと、学生の力をもっと認めてほしいという思いがあったのですが、何年かたって、運営していた学生たちもたくさん卒業しました。彼らが若くして管理職になったり、会社を代表するいろいろな場面で映像やホームページに出てくるさまを見たりすると、フューチャーセンターを通して何かしらの自信を持ってくれたと思いますし、社会人になっても地域の大人とつながっている様子もうかがえます。そうした様子を見ると、とてもうれしく、頼もしく思う昨今です。

この後、増田さんにバトンタッチするのですが、増田さんは4月から社会人になります。先輩たちに負けず劣らずの評価をもらえる社会人になってくれるのではないかと思います。

### 3. 新しい未来に出会う場 (増田)

私からは、学生の目線でフューチャーセンターの話をしたいと思います。私自身、私の前に4代続いた先輩たちの中で「静大フューチャーセンターとはこういうものだ」と定義されてきたのではないかとこのことを考えながら運営しています。5代目のメンバーで考えている静大フューチャーセンターは、「多様な参加者が未来を創るプロセスを共有し、新しい未来に出会う場」と定義しています。

宇賀田先生の話にもあったように、複雑化する社会課題は一人の人や一つのグループでは解決しきれませんので、「出会い」というキーワードは私も非常に大切にしています。フューチャーセンターは出会う場であり、地域の人との出会いや働く人との出会いは先生が説明して下さったとおりですが、私自身が体感したエピソードを一つご紹介します。

静大フューチャーセンターが持っている機能の一つに、「学生が大人の働く姿を知る場」というものがあるのではないかと考えています。就職活動を夏に終えて、私自身も早く働きたいと

うずうずしていますが、私は、働いてきたかっこいい大人にたくさん出会うことができたので、働くことがとても楽しみだったのです。しかし、一つ下の学生の話聞いたときに、「働くのが楽しい人なんてこの世にいるのですか」と言われてしまい、「いやいや、たくさんいらっしやるけど」と思ったのです。

私がそういう方とたくさん接することができたのは、静大フューチャーセンターで待っていれば来てくださったからで、自分で動かなくても面白い大人たちがフューチャーセンターに参加してくれたので、自然と働くのは楽しいことだと思えることができていました。フューチャーセンターのディレクターらしく言えば、自分の未来を、大人を通してイメージできる場がフューチャーセンターの持つ役割の一つだと考えています。

それから、大学であることが静大フューチャーセンターの大きな利点だと思っています。学生視点のいいところは、フューチャーセンターのファシリテーターはとても未熟なので、大人からすれば場を作る能力がとても不足しているのです。学生ディレクターがイニシアチブを取れない場になっているので、大人が助けてくれたり、周りで提案したことを一緒になえようとしてくれたりする関係性が生まれます。そうして上下関係に縛られない場が主体的に作られていくことはとてもいいことだと思っています。

#### 4. 実際の運営状況

実際の運営では、よくあるイベント企画と同じように、ディレクターとテーマオーナーさんが打ち合わせをして、日時・会場を決め、SNSなどで告知し、参加者に連絡して開催します。この流れだけでも非常に貴重な体験になるのではないかと私は思いました。主な開催場所は、静岡大学共通教育C棟4階の宇賀田先生の研究室ですが、今はZoomでの開催がメインとなっています。

過去に扱った少し面白いテーマとしては、カラーセラピストが来てくれたり、静岡科学館「る・く・る」の方が来てくれたり、就職活動のルールをみんなで作ろうというテーマを扱ったりしたこともあります。

いろいろな方が参加してくれるのですが、参加の理由としては、社会人多いのは学生が何を考えているのか知りたいという声や、知人の紹介で広がっているいろいろな方が来てくれたりすることが多いです。学生側では「何か始めたいけど、どう動いていいかわからない」とか、近くの研究室にいる人が暇だったから来たということもよくありました。

今年度は開催できませんでしたが、南伊豆に毎年夏に出張してフューチャーセンターを開催したり、テーマによってはそのテーマにゆかりのある土地で開催することもあります。

また、普段はきちんとテーマを決めて、テーマオーナーもいるときが多いのですが、「ゆるっと会」という会話を楽しむ会も企画しています。フューチャーセンターは元々雑談が多いのですが、さらに雑談に特化したような会をもっと開こうということで、違いを楽しむことをテーマにした会を開くこともあります。記憶に残っているテーマでは「文系・理系・体育会系は何が違うのか」などがあり、私たち学生世代だけで話し合うのではなく、大人も交えることで世代を超えた価値観の擦り合わせを経験する場になっています。

最後に告知をさせていただきます。12月30日に「これからの時代、飲食店の開業はあり?!」というテーマでフューチャーセンターを開催します。このテーマの背景としてディレクターの一人に、新卒から飲食店を開くか、新卒採用で飲食店に勤めるかで悩んでいる学生がいます。しかし、コロナ禍で飲食店の開業は難しいのではないかと、飲食店は市場が飽和しているのではないかとといったマイナスの意見が出てきたときに、フューチャーセンターであれば大人の方たち

がいろいろな意見をくれたり、学生自身も自分の進路を考えるきっかけになったりするのではないかと思ったのです。もし飲食店を開くなら、これからの時代はどんな店がいいのかということも含めて、みんなでセッションができればうれしいと思っています。



## 報告 3

## しずおかキッズカフェ

小林タバサ（しずおかキッズカフェ代表）

私は静岡市出身で、現在、静岡大学人文社会科学部法学科の4年生です。憲法を中心に学ぶゼミに所属しています。大学2年のときに「トビタテ！留学JAPAN」の地域人材コース奨学生として2カ月間、ドイツの子ども食堂にインターン留学をしたことがあります。

## 1. しずおかキッズカフェ立ち上げの経緯

子ども食堂「しずおかキッズカフェ」は、私が大学1年生になる直前の2016年の春休みに立ち上げました。静岡市葵区の瀬名地区を拠点とし、月2回、土曜のお昼に、子どもは無料、大人は300円で「土曜ランチ」を提供しています。回数を初めて数えてみたら、今までに111回開催していました。地域の親子のための居場所づくりを実現したいという有志の集まりで始めました。毎回、若い親子連れでにぎわい、気が向いたときに立ち寄れる空間として利用していただいています。

私が子ども食堂を立ち上げるきっかけになったのは、私自身が中学・高校のときに不登校を経験したことが大きかったです。学校に行かなくなると他にいく場所がなく、家に引きこもりがちになるので、家でも学校でもない第3の居場所の必要性を強く感じました。元々、料理に関心があり、子どもも好きです。ちょうど子どもの貧困問題がメディアに取り上げられていた時期だったので、まちおこしや地域課題との関連もあって、自分に何かできることはないかということで立ち上げを決意しました。

手始めに実施したのは、地元の小学校2校を対象としたアンケートです。その結果、土曜日の昼食を子どもだけで食べる孤食の児童が多いことが分かりました。土曜日は親御さんも仕事に行っている関係で食べていない児童や、スナック菓子だけを食べている児童もいて、特にひとり親世帯の子どもたちでは孤食と抜き食が非常に顕著に表れていました。約4割が一人で土曜日の昼食を食べていて、約2割は何も食べないと回答しており、とても衝撃を受けました。今は核家族化などによって近所付き合いも希薄化しているので、地域ぐるみで子どもたちを見守る手立てはないかと考え、子ども食堂を立ち上げることを決意しました。

最初は閉店した喫茶店などの施設を時間単位で借りていましたが、活動内容が食べ物の提供なので、食器や食材は開催日ごとに会場に運搬しなければなりません。雨の日はびしょ濡れになってしまったり、食材を寄付していただいても置く場所がなかったりするので、必要なものを常時置いておく拠点がないと活動が不徹底に終わってしまうと強く感じました。そこで2017年の夏から、空き店舗の賃貸で本格的に拠点をもち、活動を本格化しました。

利用する子どもたちには赤ちゃんもいますし、小学生はもちろん中学生、高校生ぐらいついでと非常に幅広く、毎回50~100名ほどの参加者がいます。子どもと大人の利用者数が半々ぐらいついでのときもありますが、特にコロナ禍になってからは子どもの比率が高くなっています。参加者が住んでいるエリアは大部分が静岡市葵区の瀬名地域ですが、清水区や駿河区などからも来ていて、中には新聞などを通してしずおかキッズカフェを知り、ボランティアに関心があると

ということで焼津市や富士市から来てくださる方もいます。

お借りした空き店舗は元は空き倉庫だったため、キッチンも換気扇もなく、保健所の基準を満たすものではなかったため、天井に塗装を施すなど食事を提供するのに見合うリフォームが必要でした(図1)。水道などいろいろ導入しなければなりませんでしたが、私は先ほどの荒武さんと違ってそのようなことに長けていませんし、資金もなかったため、水回りなど本当に業者が必要な部分以外は、できるだけ自分で塗装したり壁紙を貼ったりして、素人のDIYという感じで乗り切りました。

## 2. ビュッフェ形式へのこだわり

しずおかキッズカフェのこだわりは、品数豊富なビュッフェ形式で食事を提供していることです(図2)。旬の野菜や素材の味を楽しんでもらい、かつ栄養バランスを考慮したメニューを提供しています。いろいろな家庭のお子さんがいらっしゃるため、定食形式で一定量を均一に提供すると、お子さんによっては足りなかったり、逆に多過ぎたり、好き嫌いやアレルギーなどでフードロスが出る場合もあるため、ビュッフェ形式は実用面でも利点があります。

しかし、それ以上に私はビュッフェ形式には深い意義があると思っています。おなかいっぱい食べることは、同時に心を満たすことでもあり、なおかつ子どもたちには自分で食材の色彩や栄養バランスなどを考え、どの形のお皿にどのくらいの量を盛り付けるかという工夫をしてもらいたいです。また、人気メニューの唐揚げやスイカなどは、一人の子どもが全部持って行ってしまっても他の子どもたちが食べられないこともあります。子どもたちが自然に他の子と分かち合うことを学び、公平性や思いやり、順番を待つこと、コミュニケーションなどを育んでもらえるのではないかと考えています。

さらに言えば、お子さんが無料で会場まで来て、自分で思うままに食べ物を取って食べることは、地域の一員であるという自覚が芽生える行為ではないかと思っています。本当に家庭の経済事情が厳しいお子さんもいるので、キッズカフェに来ることで生きる力を育ててほしいという願いも込めています。

## 3. 各種イベントの開催

もう一つのこだわりは、子どもも親も楽しめるような、または地域の方々を巻き込んだ形の各種イベントの開催です。今年(2020年)はコロナで見送りましたが、毎年夏には「流しそうめん大会」を開催し、通りがかった地域の方も参加してくださるなど、反響がとても大きいです。静岡大学教育学部の松永研究室による「木の動くおもちゃ作り講座」も好評を博しました(図3)。

2018年からは、子ども食堂初の取り組みである独自の防災訓練を実施しています。静岡市千代田消防署のご協力の下、消防車や起震車の展示、無害のスチームの中を通る煙体験ハウスな



図1 空き倉庫を借りてリフォーム  
上:改修前 下:改修後



図2 ビュッフェ形式で食事を提供

どを通して、防災や災害について学びました。なぜ子ども食堂で防災かというと、子ども食堂にはたくさんの食器、備蓄食品、調理器具、トイレなどがあるので、何かあったときは防災に役立てられると考えているからです。地域の人との関わりを通して日頃から防災意識を高めていければと思っています。

秋には次郎柿狩りのイベントを行っています。耕作放棄地の柿畑ですが、毎年とてもおいしい柿がなるのに、管理している方が高齢のため、いつも腐ってしまう状態でした。そこで、農家の方のご協力の下、毎年ここで野外ランチを開催しています。この柿畑はキッズカフェから少し離れているので、安全性の観点から車で送迎すべきと判断したのですが、費用がかかります。そこで、千代田タクシーさんに相談したところ、子どもたちを無料で送迎してくださっています。本当に良い連携が生まれたと思っています。



図3 静岡大学教育学部松永研究室による「木の動くおもちゃ作り講座」

#### 4. 地域の方々の協力

NPO法人化していないので、資金は寄付や自費で賄い、食材の多くはフードバンクふじのくにさんから提供していただいています。フードバンクとは、消費期限や賞味期限が近づいて販売できない食材を、処分するのではなく必要としている個人・家庭・キッズカフェのような団体に譲る取り組みをしている団体です。他にも企業や農家、個人の支援者の方々からご支援をいただいています。

キッズカフェの活動は、何よりもボランティアの皆さんの協力で成り立っています（図4）。近くの常葉大学保育学部の学生さんは、専攻と関連した食育や保育の観点から興味を持って来てくださっています。静岡大学人文社会科学部の学生さんも長らくボランティアを続けてくださっています。最近は高校生のボランティア受け入れも増えていて、帰りには「とても社会勉強になりました」と言ってくださいます。



図4 学生ボランティアが協力

今年は何といてもコロナ禍で、子ども食堂は特に3密になりやすい条件がそろっているため、どうするか非常に迷いました。県内の子ども食堂の多くが活動の縮小・中止を余儀なくされている中、逆に法人化していないからこそ柔軟に、自己責任で開催できる強みを生かしています。もちろん感染対策を油断することなく、これまで通常どおり開催しています。



図5 地域の方々によるマスクの寄付

今年の3月ごろから、地域の方々に子ども用マスクの寄付を募ったところ、郵便ポストやキッズカフェのドアの前などにたくさんのマスクが寄せられ、約500枚も集まりました（図5）。「鬼滅の刃」の柄など、子どもたちが喜ぶ姿を想像しながら作ってくださったのだらうと思います。本当にかわいい柄のマスクがたくさん集まり、寄付していただいたマスクをクリスマスツリー

に飾って、子どもたちが来るたびに好きなマスクを選んで持ち帰ってもらうようにしています。

当初、私は子どもの居場所づくりにフォーカスを当てて活動してきましたが、親の交流の場という役割の重要性も感じるようになりました。待機児童やひとり親の家庭、日々忙しくて子どものために時間が作れない方や、授乳中でなかなか睡眠が取れず疲れて「たまには家事を休みたい」と言うお母さん、初めての子育てに分からないことばかりで身近に頼る人が誰もいないシングルマザーの方などが、ママ友のような感じでどんどん交流しています。子どもだけでなく、親を含めた居場所づくりができてきたという実感があります。

私のような大学生が立ち上げた本当に小規模なボランティア団体ですが、地域の皆さまのご理解とお力添えでここまで活動を拡大・継続することができました。卒業後もこの活動を継続し、見守ってくれている大人がたくさんいることを地域の子どもたちや親御さんたちに伝えていきたいと思っています。

しずおかキッズカフェは、毎回の活動の様子をホームページに掲載しているので、興味がありましたらご覧ください。ボランティアに興味がある方も、ぜひお問い合わせください。



## 報告 4

## 子ども達の「できる！」を社会の中に ～株式会社こども会議（仮）の挑戦～

安池中也（株式会社こども会議（仮））

私は、「株式会社こども会議（仮）」の隊長をしています。本業は子ども家具の製作で、株式会社etcという子ども家具メーカーを運営しています。子ども家具は遊び心をととても大事にしていて、会社のことを「基地」と呼んだり、商品の出荷を「出動」と呼んだり、注文のことを「出動指令」と呼んだりしています。家具職人が一つ一つ手作りしている会社を20年間営んできました。

### 1. スタートは1通のメールから

コロナ禍の今年（2020年）4月30日、友人があるメッセージをSNSに投稿しました。この人は大手企業の管理職の方です。「共働き世帯の同僚や部下がリモートワークで大変な思いをしている中、子どものストレスも大変です。最初は、学校に行かなくていいから家で遊べていいなと思っていましたが、パパもママも忙しいし、悲しい。何か難しいことにチャレンジしなくてはいけないと思っているのに、チャレンジしていない自分は駄目な子なのではないかと思っているようだ」という内容でした。

これが夜中の1時半ごろに投稿されていました。この人は割といつもクールで、いろいろなことを俯瞰して見ているイメージだったので、メッセージからすごく熱いものを感じてすぐに連絡を取りました。そのときは、子どもたちに向けてYouTubeで職人の様子や道具のクイズなどをアップしたらどうだろうと思って話したところ、「今の子どもたちに必要なのは、双方向での社会参画感と親以外の大人との関係性だ」と言われたのです。

そこから一晩考えて思いついたのが「株式会社こども会議（仮）」でした。まさに今、大人たち、自分の親たちはリモートワークで会議をしています、子どもたちは絶対にそれに憧れていると思ったので、憧れたシーンに自分が入り込むような仕掛けができないかと思ったのです。

そこで想像した台詞が、「ママ、私は今日、会議だから静かにしてよ」「パパ、今日、僕はお仕事だからお手伝いしてあげられないけどいいね」というものでした。いつもは親が言っている台詞です。それを逆に子どもたちが言う側にするにはどうしたらいいかと考えました。

翌日、その友人と話をし、その翌日に株式会社こども会議（仮）のイメージをフリーアナウンサーと日本語学校の教師をしている友人2人に話し、5日後の5月5日に株式会社こども会議（仮）を創業しました。構想1晩、準備4日というスピード感でした。

### 2. 株式会社こども会議（仮）の工夫と仕掛け

「株式会社こども会議（仮）」はプロジェクトであり架空の会社ですが、やっていることは家具メーカーと同じです。私の会社etcの商品であるロビットは、子どもたちが片付けをしなくなる工夫が入っています。「お片付けしなさい」と言っても子どもたちは動きませんが、「ロビットに格納して」と言うと片付けるのです。言葉遊びのようなもので、これが褒められる仕掛けになるのです。子どもたちはロビットにおもちゃを格納しているのですが、親から見れば片付



けているので褒めてもらえます。子どもたちがアクションしたくなる仕掛けと親に褒められる仕掛けが、私の商品のアイデアのもとになっています。

株式会社etcのことを「静岡基地」と呼び、社長は「隊長」、社員は「隊員」と呼びます。注文を「出動指令」、商品を届けることを「任務に就く」、商品が届いたことを「着任する」と呼び、子どもたちには「ミッション」という形のメールを出します。これで子どもたちがetc静岡基地という世界観にどんどん入ってくるのです。

そこで、こども会議でも同じようにしました。Zoomで会議をしていますが、Zoomの場所を「会議室」と呼び、実際に名刺を作って、子どもたちが何か発表するときはプレゼン研修をします。

子どもたちがその世界観の中に入ってくことで、想像のスイッチが入ります。すると、「話を聞きなさい」と言わなくても「今から会議です」と言えば、子どもたちは自然と聞く姿勢になります。友達の話聞き、考え、挙手して自分の考えを発言するという一連の流れを「会議」という想像の中に入れてあげるだけで、子どもたちは自然に体感するのです。すると未就学児の中には、「明日は会議だから今日は早く寝なきゃ」と言って自分で寝て、翌朝着替えて、10分前には会議室（Zoom画面の前）で準備する子もいます。「いかに子どもたちの想像力の中に入るか」ということを大切にしているのです。

現在、株式会社こども会議（仮）には、4歳から12歳までの子どもたち約50人がいます。日本はもちろん、ウズベキスタン、インドネシア、フランス、スリランカなどいろいろな国の子どもたちが参加しています。

### 3. 企業理念と組織

「ぼくたちの『できる』を社会の中に」という企業理念の下、子どもたちは参加しています。「ぼくたち」となっていますが、これは男の子ということではなく、「ぼく」とは私（隊長）のことです。つまり、子どもたちを雇用しているのではなく、私も同じ一社員、子どもたちと同じ立場で、何か社会に貢献できることはないか、一緒に考えている感じです。

子どもたちにはいつも「仕事」と言っているのですが、基本的には誰かの困り事を解決することと誰かの喜びを生み出すことの二つだと思っています。どうしたら困っている人を助けることができるのか、どうしたら喜んでもらえるのかということ子どもたちが考えていると、自然と仕事になっていくような流れになっています。

現在、株式会社こども会議（仮）には、本社の下に三つの事業部があります。Facebook内にグループがあり、社員、社員の家族、「かぶぬし」（株主）が会議の様子を見られるようになっています（図1）。

まず、国際事業部には、日本で暮らして海外にルーツのある子どもたちが参加しており、母国に帰った子どもたちをつないでいる日本支局と海外支局があります。そこで日本の常識を

いろいろな視野から考えていったり、共通言語がない場合のコミュニケーションはどうやって取ればいいのかといった仕掛けを子どもたちと一緒に考えています。

それから、ワクワク開発事業部では主に未就学児が、よく話を聞いて、考えて、アクション



図1 株式会社こども会議（株）の事業部と会議の様子

することの繰り返しを体験しています。

商品開発事業部は、実在の企業と一緒に商品開発をしていて、私はここを担当しています。アイデアを実際に出すところから、そのアイデアを発表するためのプレゼン研修を経験し、実際に企業の人にオンライン上でプレゼンをしています。

#### 4. アイデアを商品化

実は、商品開発部で先日、一つの商品が誕生しました（図2）。静岡市にある惣菜販売の天神屋と開発した「こんこんきつねむすび」が2020年12月7日に発売されたのです。酢飯に甘く煮た油あげを刻んだものや白ゴマ、お茶の葉などが入っています。

私からは何も言っていないのですが、この商品を考案した女の子は、どうしたら天神屋に来てくれるお客さまに喜んでもらえるかという視点から、実際にお店を見に行き、そこに天カスの入った「たぬきおむすび」という商品があったことからヒントを得て、この商品を思いついたそうです。

こんこんきつねむすびは、発売初日の午前中で完売しました（図3）。天神屋の人も、最初は子どもたちのアイデアに付き合ってあげようというぐらいのテンションだったと思いますが、子どもたちの本気のプレゼンやアイデア出し、きちんと試作する姿を見てどんどん本気になっていき、ついには機械も入れ替えて本気で作りました。子どもたちが仕事として取り組んだことで、経済を少し動かしたような感じになっています。実際に話を聞いてみると、あるお店では近くのデイサービスのおじいさん、おばあさんたちが楽しみにして買っていくから、いつも完売になってしまうということも起きているようでした。

他にも、商品開発のためにプレゼン研修をしたり、CSR活動もしていて、どうしたら大人たちが笑顔になってくれるかを実際に研究しながら、さまざまな活動をしています。今は毎週土曜日と日曜日に会議を開いて熱い議論をしています。その会議の様子を支えてくれているのは「かぶぬし」の存在です。「かぶぬし」には実際に出資していただき、会議の様子を見たり、子どもたちを見守ってくれたりしています。

社員である子どもたちが何かにトライするときは、出資金を使うことができるシステムになっていて、実際に「かぶぬし」にプレゼンをしてOKをいただいたらお金を使えます。12月は半期の決算として株主総会を開いたりしているのですが、「かぶぬし」制度にしたのは子どもたちに「かぶぬし」の数の多さを見てほしかったからです。

子どもたちが大きくなって2020年を振り返ったときに、マスクの息苦しさや消毒のにおい、テレビから流れてくる感染者数などではなく、会ったことはないけれども確かに画面の向こう側に仲間がいて、仲間の話を聞き、自分の意見を話し、ときどきしながら挙手して思いを伝えたときに、その仲間たちがうなずいてくれたり、拍手してくれたり、「いいね」と共感してくれたりしたことを思い出してほしかったのです。そして、自分たちは「かぶぬし」であるたくさ



図2 企業との商品開発で実際に商品化された「こんこんきつねむすび」



図3 「こんこんきつねむすび」は発売初日の午前中で完売

んの大人たちに見守られていたということに気付いてほしかったのです。私はそういう流れを作りたいと思って「かぶぬし」制度を作りました。

## 5. 新しいステージへ

来年、株式会社こども会議（仮）は新しいステージに向かいます。「みんなの『できる』を地域の中に」ということで、地域事業所を立ち上げるのです。今度は僕たちの「できる」ではなく、みんなの「できる」です。地域に住んでいる子どもたちにできるだけ主導権を持ってもらい、子どもたちが地域の課題を見つけるような場を作りたいと思っています。

子どもたちの一番身近な社会は地域だと思います。今はオンラインなので、割と俯瞰して社会全体を見ながら、誰を喜ばせることができるかということを一生涯懸念想像しています。その想像をより身近にするために、「あの」とか「この」という単位で、子どもたちが分かる場所に関する課題を見つけてほしいと思っています。「あの公園のベンチが」「この交差点の何か」「あのお店の商品が」というように、子どもたちが思いをはせることができる場所が地域だと思ったので、地域事業所を立ち上げることにしました。

2021年1月、まず御前崎事業所からスタートします。先日、会社説明会を行いました。子どもたちはやる気満々で、早速アイデアを出し合いながらキックオフをしていました。3~4月ごろには伊豆の韮山でも始まります。課題を探すのも、行動するのも、いろいろなアイデアを出していくのも、とにかく子ども（社員）主体で行っていきたくて考えています。われわれ大人は、子どもたちが活躍する場を作っているにすぎないのです。

2025年までに株式会社こども会議（仮）の地域事業所が全国に広がるような流れを作りたいと思っています。地域事業所の社員たちが地域中を駆け回り、課題を探し、その課題を解決するためにはどうしたらいいか、会議を開いて考え、地域全体の子どもたちがZoomでつながりながら課題を共有し、「こんなことにトライしたらうまくいった」などと話し合うのです。そのとき、「かぶぬし」は何人ぐらいになっているのでしょうか。株主総会にもみんなで参加して、「かぶぬし」に思いを伝えたいと考えています。大事なのはZoomで行うことではなく、Zoomを切った後、子どもたちがいかに地域に散らばっていくかということだと私はイメージしています。

2020年8月に入社式を行いました。入社式自体はあまり大事なことではなく、入社式のとき、「かぶぬし」に招待状を出すことを最も大切にしていました。招待状を出すために、子どもたちは紙を買ったり、切手を買ったりしますが、そのときに領収書をもらってくるようお願いしました。子どもたちは郵便局や100均ショップなどに行って、いろいろなものを買ったときに領収書をもらいます。「株式会社こども会議（仮）で領収書をください」という大人とのやりとりや、実際にポストに手紙を入れに行くなど、Zoomを切った後のアクションをととても大事にしていました。

ある日、ある未就学児の社員が、運動会で1枚の絵を描くことになりました。そのとき、幼稚園の先生は親御さんに、「モンゴルの国旗を描いたのですが、なぜですか」と聞いたそうですが、その子が招待状を書いた「かぶぬし」がモンゴルに住んでいる方だったので、その子は「どうすればかぶぬしに自分の招待状を捨てられないようにできるか」と一生懸命考えたのです。それで、国旗を描いてあげたら喜んでくれるのではないかと思い、親御さんと図書館に行き、モンゴルの国



図4 企業の方と名刺交換

旗を調べて自分で描いたのです。彼女はまだ4歳ですが、大きくなったらモンゴルを旅行することが夢になっています。私たちはきっかけを与えているだけですが、社員の子どもたちはどんどん想像力を広げていきます。

近い将来、社員たちが皆さんのところに行って、「こんにちは、僕は株式会社子ども会議（仮）の社員です」と言って名刺を渡すかもしれません。そのときには大人の方と接するときのように両手でしっかりと受け取っていただき、名刺交換をしていただけたらと思っています（図4）。株式会社子ども会議（仮）はここからどんどん広がっていきますので、ぜひ期待していただけたらと思います。

（阿部） ロゴも社員さんが作っているのですね。4歳と10歳のお子さんですか。

（安池） そうです。社員が考えて、「発言・ひらめき・共感」という子ども会議のワードから作ったロゴです。



図5 株式会社子ども会議（仮）のロゴ



## パネルディスカッション

**阿部**——せっかくですので、チャットでの質問に対して皆さんに回答していただく形にしたいと思います。最初にパネリストの増田さんから他のパネリストに質問があります。

**増田**——今年度（2020年度）はフィールドワークに限らず、町内や受け入れの最前線に立つ皆さんの中にも、伊豆地域や県内の観光地で外部から人を受け入れることに抵抗がある人がいらっしまったと思います。例年どおり学生を受け入れることが難しかったのではないかと思います。判断に当たって難しかったと思ったことがあれば教えてください。

**山口**——南伊豆町ではこれまでも早稲田大学と地域課題解決に向けたワークショップを実施していたのですが、今年（2020年）は学生が地域に入ること、あるいは学校に来ること自体も大学側で止めていたため、大学側からの提案で、学生の自宅とオンラインでつないでワークショップを実施していました。

このワークショップでは、実際に現地で体験することで学生側にとってもインセンティブになると考えていたので、今回はオンラインということとその部分がなくなり、果たして応募者が来るのだろうかかと懸念していたのですが、オンライン方式で行った場合の問題点も踏まえて学校側と調整しながら募集をかけたところ、10人の予定に対して倍の20人から応募がありました。町としては旅費を補助する費用負担がなくなったので、全員に参加していただくことにし、オンラインで約2カ月間、プロジェクトを実施しました。

町として、受け入れ自体は移動制限が出ているとき以外、特に大きな問題はありませんでしたが、プロジェクトとなるとどうしても地域のキーマンにお願いしなくてはならない部分もあるので、その方たちが地域の人から冷たい目で見られることがないように配慮しながら、地域の状況やキーマンの方々の心情なども含めて調整してきました。個別に1~2人の少人数で来る場合は、通常どおり受け入れています。

**深澤**——最近商店街チームに新たに2年生が入ってきたので、初めての松崎訪問ということで、一度日帰りで来られました。そのときもいろいろ配慮する中で、送り出す側の大学が一番神経を使っていたので、受け入れ側としてはいつでも大丈夫というスタイルでやっています。

一つ注意しているのは、山口さんが言っているように、町民の中にはよそから来ることに神経質になる人もいるので、そのような方々との直接の接触は時期が来るまでやめようと考えています。ですから、最初は松崎を知ってもらうために地域を回ってもらうのですが、食事のときも自分の知っているところをお願いしています。町内には観光客を受け入れている食堂が多いので、そういうお店で距離を少し取ってもらったり、話すときはマスクを着けてもらったり、配慮しながらやっています。同じ静岡県内ということで、静岡大学からフィールドワークで来る分にはそれほど変な目では見られないので、静大に関しては全然問題ないだろうと思っています。

早稲田大学については、学校への移動も制限されているということなので、ほぼオンラインで実施しています。ただ、10月に一度、班で訪問したいということで、行く場所や会う人を限定して訪問されました。当然、感染対策をしっかり徹底しながら対応しました。このように、受け入れる側としては正しく恐れることと、できる限り感染予防を徹底する形で、東京などからも受け入れています。



今は移動制限や自粛などがあるので、東京からは無理だろうと思いますが、県内は今のところ問題ないだろうと思っています。

**荒武**——東伊豆も南伊豆や松崎と同様の対応をしていると思います。基本的に感染拡大が激しいタイミングには来るのをやめ、落ち着いたら来訪も可能性としてあるだろうと思います。第2波や第3波がなかなか読めなくて、来訪のスケジュールを組んでいても来られなくなってしまうこともありました。受け入れ側として、みんなが来てくれるのを楽しみにしていますし、紹介してあげたいところも考えているのですが、それがかなわなかったりするとがっかりしてしまいます。

来る学生たちもそれぞれモチベーションがあって来てくれていると思いますが、急に来られなくなるとがっかりしてしまうと、そのままモチベーションが下がり続けてしまって、非常にもったいない状況が生まれてしまうのではないかと思います。多分、コロナと向き合いながら地域の活動もしていかなければならないと思うので、うまくオンラインを使ってワークショップを実施した様子も山口さんから後で教えてもらいたいと思います。オンラインで地域とつながりを保てるような関係性を模索していくべきだと思っています。

静大のフィールドワークの学生たちや芝浦工業大学の学生たちも、地域と関わりを持ち続けたいと思っています。静大に関しては、オンラインインタビューのような形で地域の人たちとのつながりや交流を何とか持てないだろうか、地域のことを知りたいという思いを打ち明けてくれています。私は「東伊豆通信」というローカルメディアで地域の人たち取材しているので、取材に行くタイミングを学生たちにつないで、地元のいろいろな業種の方たちと交流を持てる機会を作っています。地域側としてできることもまだまだあるのではないかと考えているので、学生の皆さんと一緒に模索していきたいと考えています。

首都圏の大学の皆さんも地域側より非常に気を使ってくれていて、自主的に体調管理シートのようなものを事前に用意して、しっかり体調を管理した上で来てくれています。地域に気持ちを持って関わろうとしている学生たちなので、そのつながりをオンラインで保っていく手段について、これからも探していきたいと考えています。

**阿部**——チャットでは人文社会科学部2年生、浅井佑奈さんから質問がありました。子ども食堂には赤ちゃんから高校生まで幅広い子どもが参加しているということですが、どのような経緯で子ども食堂を認知し、子どもたちが集まっているのでしょうか。また、食材が残ってしまうという問題はありますか。

**小林**——活動を始めたばかりのころは、やはり地域の方々からの認知度が低かったため、チラシを学童保育所に置いてもらったり、近所にポスティングしたりして、開催情報や日時などを告知していました。また、子ども食堂のシャッターに貼紙をして、次はいつ開催するか、通り過ぎた人が分かるようにしています。それ以外は特に勧誘などはしてなくて、評判が人から人に広まる形で認知してもらえようになりました。

ひとり親世帯や共働きのご家庭のお子さんの場合、学童保育や児童クラブの先生が引率して子どもたちを連れてくることもあります。週末の学童保育はお弁当持参らしいのですが、そもそもお弁当を作れないご家庭もあるようなので、児童クラブ等との連携はうまく機能してきているように思います。こちらから働き掛けたというより、児童クラブさんの側から「孤食の子どもを連れていっても構わないか」と連絡してくださったのがきっかけでした。学童保育には、

外国籍の子どもも最近では増えており、家庭とは異なる学校の給食で出される日本食に抵抗があるので、子ども食堂がきっかけで日本食に親しむようになったとも聞いています。そのほか、メディアなどをきっかけに知っていただいて来るようになった方も最近は多いです。

残飯などが多く出てしまうフードロス、確かに問題ではありますが、だからと言って私は、お子さんたちにキッズカフェに来ないといけないというプレッシャーは与えたくないです。むしろ家庭で家族と食事を取ることが理想だと思っていますので、参加者が0人でもおかしくないぐらいの気持ちで料理を作っています。最初は20人分ぐらいの料理を作っておき、大勢来たら追加メニューをその場で作ることにして、なるべくロスが出ないように工夫はしています。

しかし、バイキングなので量を多めに作っていることもあり、当然ながら残ってしまうこともあります。食品衛生の観点から、テイクアウトには保健所からの別の許可が必要ですし、特に夏場は食品が腐ることもあるので、利用者の方に持ち帰っていただくことはほとんどしていません。ボランティアで来てくれた一人暮らしの静大生にはお礼として持ち帰ってもらうことは時々ありますが、夏場は特に気を使っています。本当はフードロスをなくすようもっと頑張りたいのですが、残ってしまっただけで処分することももちろんあります。

**阿部**——パネリスト相互に質問や感想等ありましたら、お話しください。

**小林**——子ども会議さんの取り組みが本当に刺激的で、ワクワクしました。一つ一つの用語に夢があって素晴らしいと思います。私も子ども食堂で子どもたちと接する機会が多く、「鬼滅の刃」のように子どもたちがハマっていることを割と認識しているつもりなのですが、子どもたちに「子ども食堂に来ていないときは何をしているの？」と聞くと、動画投稿アプリを一日中見ているという話をよく聞きます。ですので、情報が入ってくるばかりのツールが主流になっていて、情報に対して受け身になってしまっている傾向があるように感じます。

そんな中で、Zoomというツールを使って子どもたちの能動的な考える力や行動力を喚起しているところに感銘を受けました。子どもを子ども扱いせず、些細な意見やアイデアにも真剣に向き合っているところは非常に素晴らしいと思いました。Zoomというツールに関して何か補足していただけたらうれしいです。

**安池**——動画サイトを見せないようにすることはできなくて、きっと見てしまうと思うのですが、見る内容や視点を変えることはできていると思っています。お仕事に必要なであれば、見る内容が変わってくると思うのです。それは「お仕事」というキーワードでいくらでもできていると思っていて、こちらもそれを仕掛けているので、社員の子どもたちも動画サイトを見たり、ゲームをしますが、見ているものが多分違うと思います。公園で遊んでいるときの話の内容が変わってきているとも聞いています。会議の議案を話しているような仕掛けは、いくらでもできていると思っています。

Zoomの使い方を覚えるのは、社員の子たちの方が早いです。何の抵抗もなく枠を超えていきます。例えば「いいね」というボタンがありますが、その機能が分からなければ紙にマジックで「いいね」の手を描いて見せるのです。それだけでは気持ちが伝わらないと思ったら、字が書けない子はハートをたくさん描いて出すなど、子どもたちは工夫するのです。それが素晴らしいと思っています。Zoomは出会う場所にすぎなくて、Zoomの中でどれだけ子どもたちを捨るかだと思っていますし、Zoomの接続を切った後、子どもたちの日常の行動がどれだけ変わるかという方に重きを置いている感じます。

**阿部**——私も子ども会議のときに名前を「かぶぬし」にしてカメラオフ・マイクオフで参観するのですが、爆笑したり、ほろりと来たりするのです。年齢が4歳から12歳までいて、大人の話もあるので、年少の社員さんが話が分からないときには、ちゃんと「何を言ってるか分からない」という意見が出て、それを聞くとパソコンの前で爆笑してしまって、「ああ、今日もすっきりした」と思うのです。自分自身、役員会や教授会では我慢している部分があるので、このように言えたらどれほどいいだろうと思い、それがすごく楽しみなのです。

それから、4歳の子どもと10歳の子どもでは、私たちからすればどちらも子どもと思いますが、社員として会議に参加していると、10歳の社員が4歳の社員の意見をうまく聞き取ってあげたり、途中で仲立ちしてあげたりするのです。そんな様子を見ると「社員さんたちは大人でもできないことをするなあ」と思って、とても勉強になります。

先日の株主総会でも、社員さんに「土日までこういうのを見て疲れませんか」と言われ、「いや、疲れが取れます」と言うと、「キャハハ」と笑われてしまいましたが、都合がつくときにはいつも参加したくなる会議です。

**宇賀田**——私も小林さんと同じように、安池さんの話が超刺激的で、この話に対する深澤さん、山口さん、荒武さんの反応を個人的に聞きたいのですが、お三方から感想をいただいていいでしょうか。

**深澤**——安池さん、本当に面白い話を聞かせていただき、ありがとうございます。聞く側はすごく楽に聞けるのですが、行う側は、環境も子どもたちの家庭それぞれで異なると思うので、大変だろうと思っています。

単純に視点を変えるというのは、子どもだけでなく、大人も同じではないかと思いました。柔軟な視点から見る必要があるのに、年を取ると視点や発想が凝り固まってしまい、何となく既成概念に捉われていると感じ、話を聞いて非常に刺激を受けました。大人も子どもも広い視点でしっかりと見ていく必要があるのではないかと、ということに改めて気付かされました。

**安池**——環境に関しては、やはり各家庭で異なります。私がタブレットを貸し出したり買ってあげたりすることはできませんが、子ども会議がどれほど楽しいところかということを伝えることはできます。すると、子どもたちは考えて、「俺、会社員になったんだけどさ。会議あるんだけど出ない？」とタブレットがない子を誘って、会議に呼ぶのです。同じ画面に2人で出たり、Wi-Fiの環境のいい家に行って参加したり、子ども社員はやりたくなったら自分で考えるのです。私は伝えることしかできないので、出てきたら心から「入社してくれてありがとう」と言います。できない理由ではなく、どうしたらやりたくなるかという気持ちを膨らませていく方を意識しているので、それほど苦勞はしていません。

**深澤**——結局、行動につなげるというか、自分たちで工夫することが大事だと思うので、できない理由ではなく、やるためにどうするかを考えることが大人側にとって一番必要ではないかと思いました。

**山口**——私も、とても面白おかしく聞かせていただきました。おっしゃったように、子どもたちの興味を引くようにして言葉を使っているところが楽しさの秘訣なのでしょう。しかも、そのような方法をご自分も楽しんでできているのだと思いました。

実は南伊豆町でも、子どもたちに対する職業体験のようなことをしています。例えば町内のイチゴハウスに行って、収穫のお手伝いをするプログラムを実施しているのですが、よくよく考えると、先ほど小林さんが言ったように、子どもたちにとっては受け身なのです。そこを自分たちが主体的に取り組めるようにするための仕組みが必要なのだろうと改めて感じました。

事業内容は早速パクらせていただこうと思います。地域の事業者のお悩み解決のためのコンサルを、子どもたちにお願いするような形で取り組んでみようと思っていますので、同じような話題が出てきたら、ニヤッと笑っていただければありがたいと思います。

**安池**——パクるよりも、ぜひ事業所を立ち上げてください。経済活動までちゃんと持つていくので、ぜひご一緒をお願いします。

**荒武**——感想は皆さんと同じで、自分も「かぶぬし」ではなく、普通に社員として入りたいと思うぐらいのワクワクを感じました。社会人になってようやく学べるようなお金のことや仕事の責任のことなどを、その年齢から学べるのはすごい機会だと思います。どうせなら学校のカリキュラムに「株式会社こども会議（仮）を作りましょう」という内容が取り込まれても良さそうだと思うぐらい、とてもすてきな取り組みだと思います。

私は運営面を運営側の立場から見てしまうことがあるのですが、基本的には安池さんが週末の会議のファシリテーションをされているのですか。

**安池**——私はファシリテーションがとても苦手なので、本当は一社員として入社した方がいいと思うのですが、実際はファシリテーションをしていて、自分が見たいシーンを最初にイメージして議案を考えたり、社員の会話からアイデアを出したりするだけです。地域だけでは何が出てくるか本当に分からないのですが、とにかくやってみる感じです。Zoomを切った後、地域に子どもたちが散らばっていくシーンをいかにスピード感を持って見られるかということです。

学校に関しては、実は今、学校内事業所という計画があります。静岡で二つの中学校に手を挙げていただいている、総合学習の中で「〇〇中学事業所」のようなものが立ち上がると思います。そこで子どもたちが、何を議案にしてどのようなプロセスで進めるか分かりませんが、来年はそうしたことも行っていくことになると思います。

**荒武**——中学校の事業所になると、社員は中学生たちになるのですか。

**安池**——そうですね。同じ年齢の子どもたちで取り組むので、同じ年齢ならではの面白さがあると思うのですが、子ども会議では、例えばパフォーマンスが上手な子ではなく、聞くことが上手な子にスポットが当たったり、年齢が4歳から15歳までと幅広いので、未就学児の子の自由な発想を上の子たちが一生懸命説得したりしています。多数決はあまりしないようにしているので、どのように議論を重ね合わせていくのかというプロセスが楽しいのです。どんな意見も言ってよくて、「少数意見が駄目なわけではない」という会議の本当の楽しさを子どものときから学んでもらえる仕組みになっていると思うので、学校とはまた違う雰囲気だと思います。学校は学校で本当にその地域に根差し、より経済活動に近くなってきて、自分たちで行う楽しさが出てくるのではないかと思います。

**阿部**——パネリスト相互でも、いろいろ組み合わせがあると思いますが、いかがですか。



**荒武**——小林さんに質問です。毎回、お話がアップデートされていてすごいと思っています。資金調達面の部分に非常に興味があるのですが、あの倉庫で水道工事などをすると、結構なお金が必要になると思います。寄付という話もされていましたが、資金調達は主にどのような手法を使われているのでしょうか。

**小林**——当初は県からの補助金をいただいていたのですが、それは食材などの費用に充てるものであり、家賃はもちろん光熱費も出なかったので、かなりの部分を自費で賄ったため大変でした。料理には火力の強いガスを使うので、ガス代も非常にかかりますし、夏場はエアコン代などもかかって資金面は本当に大変ですが、自分が好きでやっているもので、誰のせいでもありません。

私は人からお金をもらうことが苦手で、ビジネスにはまったく向いていないタイプです。自分が大変でも、周りの人の喜ぶ顔を見たいというボランティア・奉仕精神が私の原動力なのです。そもそも営利目的ではありませんし、利用者は無料で来る子どもたちなので、そもそもお金が入ることを期待していません。私の活動を応援してくださる方がいて、ぜひ支援したいというお話をいただいたときはもちろんありがたくお受けします。やはり継続していくためには資金は必要なので、もう少し経営学などを学部で学ばよかったと思っています。もっとうまくやりくりしていくことが今後の課題です。

**荒武**——特殊解だとは思いますが、その精神は学ぶことがたくさんあると思っています。卒業されてからはどのような運用になっていくのですか。副業ですか。

**小林**——変わらず私が代表として今までどおり運営します。私は4月から大学院に進学することになっているので、変わらず学生の立場で継続していくつもりです。しかし、学部のとくよりも強い責任感と経営理念を貫いていきたいと思っています。最近は継続するための資金が苦しい月もあるので、もう少しスポンサーなどを自分から探して、アプローチをかけていくことも検討しなければならぬだろうと思っています。

**阿部**——安池さんに質問ですが、株式会社こども会議は「(仮)」が付いているのが正式名称なのですね。この「(仮)」はずっと付いているのでしょうか。何かの段階になると取れるのでしょうか。

**安池**——「(仮)」になっているのは、私も平の正社員で、今は社長不在だからです。将来、子どもたちの中から、「隊長はもういいよ。自分たちにこの会社を任せてくれ」と言う社員が出たときに「(仮)」が消え、会社ごと社員に渡すことを私の最終ゴールとしているので、それまでは「(仮)」が付いています。

**阿部**——4日間ぐらいで考えたと言われましたが、結果的にすごく練られていますね。受講している学生の皆さんにも伝えたいのですが、今日の報告を聞くとZoomやICTを上手に使ってぱっと立ち上げ、それがうまくいったという印象を持ったかもしれません。しかし、安池さんは元々、子ども向けの家具を作ったり、木育ワークショップで宝箱を作ったりしています。そのワークショップもネットを使って何かやるのではなく、私は逆のタイプだと思っています。株式会社こども会議（仮）も実際に手を触れたり、いろいろなものを一緒に作ったり、子どもたちを見守ったりする時間や空間を大事にしているところは変わりないと思います。だから地域



事業所なども立ち上げたと思うので、学生の皆さんにそうした経緯でやっている方だということとは伝えておきたいと思います。

**山口**——私も株式会社こども会議（仮）の「（仮）」のところ非常に気になっていました。実は南伊豆町の事業に「南伊豆温泉大学プロジェクト」というものがある、これも「（仮）」なのです。立ち上げたときには、正式名称が決まったら「（仮）」を取ろうと考えていたのですが、実は温泉大学プロジェクトは町づくり事業として進めており、町づくりに最終段階はないだろうということで、結果的にずっと「（仮）」を付けていくことにしています。これは国にも地域再生計画という形で計画認定を受けている事業で、国に説明するときも「（仮）は取らない」と説明しています。「（仮）」というのは、逆に肯定的、発展的に捉えることができると思っていて、まさしく今もそうしたお話を聞いたので、発展的でとてもいいと思いました。

**阿部**——宇賀田先生、株式会社こども会議（仮）の仕組みや狙いは、フューチャーセンターと非常に重なる部分があるのではないかと思います。フューチャーセンターを4歳から始めるのは仕組みとしてはなかなか難しいと思いますが、株式会社こども会議（仮）に何か刺激されたことはありましたか。

**宇賀田**——たくさんあります。安池さんの話の中でとても印象的だったのが、どうしたらやりたくなるかを考えているという話です。そう考えると、大人の社会はみんなやりたくないような仕組みになっているのではないかと、だからネガティブな大人がいるのではないかと思います。

増田さんの発表にもあったように、フューチャーセンターに関わる人たちにはポジティブな人が多く、「大人って面白いぜ」と私自身も思っています。学生のとくよりもできることがいろいろと増えていくので、大人は面白いと思っています。しかし、学生はどこかネガティブに考えているところがあって、それをどうにかしたいというのは安池さんの言葉どおりです。

学生たちも「就活」と聞くと、それをポジティブに思っている学生はほとんどいません。就活自体をポジティブに行うかどうかは別にしても、社会に出ることはもっとポジティブに切り替えられるのではないと思うのです。そんなときに、もしかしたら株式会社こども会議（仮）の力を借りることができるのではないかと思います。

**安池**——私も中学や高校にお邪魔して、キャリア教育の授業などで話をしますが、その年代から取り組もうとすると将来がすぐそこにリアルにあるので、いきなり夢を描けと言われてもドキドキしてしまうのです。ですから、未就学児から参加しているのが株式会社こども会議（仮）の“みそ”であり、どんな意見でも発言してよい、少数意見が駄目なわけではない、反対意見は自分への否定ではない、ということを繰り返し経験していくことができます。自分が発言したアイデアがみんなに共感してもらえたり、アクションしたことで社会が少しでも変わったりするような体験を小さなことから繰り返していくと、自分の道を切り開くときにワクワクできると思うのです。そのような大人になってほしいという思いもあって、株式会社こども会議（仮）をお仕事の場にしていますし、「誰かに喜んでもらったり、誰かの困り事を解決したりするためにみんなの力を貸してほしい」とひたすら言っています。

「ありがとう」と言うように子どもをしつづけていますが、私は「ありがとう」を言われる側になってほしいと思っています。「ありがとう」をいろいろな人からたくさん言ってもらった方が、「ありがとう」と心を込めて言える人間になると思うので、そのようなことを経験できる

場になればと思っています。

**宇賀田**——お話が非常にすんと入ってきます。私も中学や高校に行く機会があって、学習指導要領が変わったのでキャリア教育や探究などといわれているのですが、やらされていると思うととてもつまらないです。私などは、それを盾にいろいろなことができるのにと感じてしまうのですが、そうした発想についてきてくれる先生もなかなかいなくて、そのような場がまだまだ作れていません。子どもの頃は夢を語ることをみんな喜んでくれたのですが、そのうち夢を語ることにに対してネガティブな空気感が漂ってくるので、いつから潮目が変わってくるのだろうと本当に思います。日本全体は変えられないかもしれませんが、自分の身の回りだけは変えられるのではないかと感じて自分も仕事をしています。

誰かスーパーマンのような人が1人来て、一気に世の中を変えることもあるかもしれませんが、私がコロナ禍で感じたのは、人と人がつながらないと結局はみんなの楽しみが減っていくということです。みんなが少しずつ何かをすれば、自分たちもみんなも楽しみが増えていくし、ずっと維持できるということに気付いたのではないかと思います。人と人がつながっていくことは結局は自分を助けることになりすし、社会を構成することすし、未来の社会を変えることだと改めて気付きました。中学、高校の地域事業所をぜひ広げましょう。

**安池**——ありがとうございます。

**阿部**——地域事業所の第1号は御前崎市が2021年1月からで、葦山にもできるそうですね。葦山には何かきっかけがあったのですか。

**安池**——社員の一人が葦山に住んでいて、その子が株式会社こども会議（仮）の社員になってから非常に変わったのです。ポップを作るときに、ポップが何か分からないから実際にスーパーへお母さんと見に行き行って勉強するなど、非常に熱心なのです。葦山という地域は、かろうじて地域で子育てをする風土が残っているのですが、先ほどの松崎や南伊豆でもあったように、抱えている課題は同じです。そこで、私ができることとして地域事業所を考えたのです。葦山でなければいけない理由はまったくなく、社員が「やりたい」と言って手を挙げたから、そこに作るだけです。

私は勝手にご縁を感じてしまうタイプなので、松崎、南伊豆、稲取というワードには何かご縁を感じています。事業所を本当に考えたいと思っているので、後でつながっていただけたらうれしいです。一緒に株式会社こども会議（仮）の事業所を作りましょう。御前崎では行政の方にも入っていただき、皆さんで使って最後はバトンを渡すイメージでいます。ご一緒できたら勝手に思っていますので、よろしくお願ひします。

**阿部**——皆さんおっしゃっていましたが、今年はコロナの影響があり、そこから必ずしも負のものではないものが確かに生まれている感じがします。株式会社こども会議（仮）も本当にそうだと思います。人間は、ある程度生きると価値観が大きく変わったりはしませんが、少し変わるきっかけになるようなことがあれば、もちろんコロナは収束した方がいいのですが、それが難しいとしても、何かいろいろやらなければいけないこと、あるいは面白いこともあるのではないかと思います。

株式会社こども会議（仮）などを見ていて思うのですが、大学でも今はバックキャストイン

グなどと言いはじめています。今のあり合わせの材料から出発するのではなく、2030年、2040年に向けて条件を考えずに理想のビジョンを作り、そこから逆算して今何をしなければならないのか、というアプローチをする必要があるといわれています。

それは深刻な面もあって、例えば地球環境問題などは理想のビジョンではなく、持たせるためには何をしなければならないかということですから、「これを今やらないと地球が持たない」と言われると本当にビクビクしてしまいます。しかし、株式会社こども会議（仮）の事例を見ると、人がバックキャストिंगをするようになるには、その目標が楽しくてワクワクするようなものにならなければならないのではないかと思うのです。

「大変なことになる」と脅されてバックキャストिंगするのではなく、10年後、20年後にこのような社会があったらいいというふうに考えるのです。あまり材料がないままに、普段考えていないような理想図を作るのではなくて、今やって、ヒントや妄想が生まれてきて、こんな社会になったら面白いというものを提示したら、みんな一生懸命になり、自然と楽しくバックキャストिंगができるでしょう。実際にそういうものがあるのか分かりませんが、その良い例になっているのではないかと思います。子どもたちは代替わりでどんどん入ってきますが、そのような考えが社会に浸透していくと、子どもたちが次の世代になったときに本当に楽しみですし、それを横目で見えていたらとてもうらやましいですし、本当に頼もしく感じられるのではないかと思います。

私は大学にいますので、学生の皆さんにそのように伝えなければいけないと思うのですが、大学生まで待たなくても、小林さんが子ども食堂を始めたのは大学に入る前ですし、フューチャーセンターにも高校ぐらいから関わっている子たちがいます。近くにいろいろな子たちがいるのではないかと思います。隊長の活動、社員の活動は非常に勇気付けられます。

増田さんはもうすぐ学生から社会人になりますが、パネリストの話聞いて何かありますか。

**増田**——今日登壇されている方々は、ほとんどの方が顔見知りということもあって、面白い大人がたくさんいるとか、働くのが今から楽しみだと思えた要因となった方たちです。その点では、もちろんフューチャーセンターも同じです。私も高校3年生の2月ごろからディレクターをしていたのですが、フューチャーセンターがなければ、このように面白い大人の方たちと出会えていなかったと思っていますし、来年以降、そこでの出会いを絶対に無駄にはしたくないと感じています。ご縁をつなぐのもそうですし、組織の人間になったときに、今まで助けてくれた大人の皆さんに私は何を返せるだろうということを、常に考えていきたいと思っています。基本的に私は半径3mの人たちしか変えられないだろうし、幸せにできないと思っているのですが、自分が移動すれば半径3mは変わっていくので、来年以降も自分から体を動かしながら、いろいろな人と関わっていったらと思っています。

**安池**——食に関していえば、われわれは会社という体になっているので、実はいろいろなことができます。地域事業所も学校内事業所もそうですが、社食をZoomでやるのです。株式会社こども会議（仮）の社食が2021年1月からスタートします。実際に食堂へ食べに行くことはできませんが、子どもたちが「ありがとう」を言われる側になってほしいという思いから、Zoomをつないで会議中の1時間を使い、できるだけ火を使わないメニューを子どもたちが作ります。チーム分けをして、1品ずつメニューを考え、ランチプレートのようなものを作り、それを会議後に家族と一緒に食べてもらうのです。

それが株式会社こども会議（仮）の社食になるのですが、親御さんはしばしの休息になります。

すし、子どもは「ありがとう」と言われます。今はメンバーが社食をどのようにしていくか、いろいろ考えているところです。食つながりというわけではありませんが、小林さんの方でも何かできたらと思ったので、社食がスタートすることをお伝えしました。

**小林**——素晴らしいですね。やはりおいしいものは幸せになりますし、何よりも信頼関係が芽生えると思います。その人が作ったご飯を食べるということは、あなたを信用していますという表れでもあると思うので、私は利用者の方々の信頼を絶対に裏切らないようにしたいという気持ちで今まで活動が続けてきました。何よりも、食を囲むと会話も弾みます。今はコロナ禍で、食べるときに話をしてはいけないということがだんだんスタンダード化していますが、本当に早く元通りになってほしいと思うばかりです。

荒武さんも食でいろいろな活動をされていて、実は私も1年生のときにフィールドワークでお邪魔したとき、出前でとてもおいしいソウルフードをいただきました。

**荒武**——肉チャーハンですね。

**小林**——そうです。本当に胃袋をつかまれるという感じがして、食というのは本当にいいですね。

**荒武**——本当にそうだと思います。宿を始めてから、お客さんに案内するのは信頼できるお店だけですし、それこそ深澤さんや山口さんはお客さんが来たら行きつけのお店を紹介して、また来たくなるような手法を取っていると思います。人と人の距離を縮めたり、地域に愛着を持ってもらったり、食には大きな可能性がありますね。

**阿部**——あのときは、地域連携論の後に9人ぐらいで行ったのですよね。建物だけを改修してもうまくいかなないということで、ダイロクキッチンという形でコミュニティスペースにして、そこで物を作って食べられる空間にしたのはすごいと思いました。いろいろな方がその場を使って食べ物を提供していましたが、ダイロクキッチンで提供しているのは何種類ぐらいあるのですか。

**荒武**——コロナでなくなってしまったものを含めると五つぐらいの企画が立ち上がり、定期的に月に1回か週に1回、キッチンを使っています。人によって来るお客さんが変わったり、開けば来るというお客さんがいたり、いろいろ面白い現象が起こっていたのですが、コロナ禍になってしまい、いろいろ模索しているところです。リアルな場に行く機会が制限されてしまうご時世なので、一時停止している部分があります。

**阿部**——新しく始めた宿も面白いですね。私が驚いたのは、初めて行ったときにはあった向かいの建物が次に行ったらなくなっていたことです。私も狭い路地の雰囲気が好きで、次に行ったときはあそこに七輪を出してサンマかキンメダイを焼こうと思っていたのですが、あのように開けてしまうと少しやりづらいですね。

**荒武**——こぢんまりした感じが失われてしまいました。布団を干したり風を通したりするには非常に良くなったので、建物的にはいいのですが、ネガティブな状況をポジティブに変えてい



くような考えをいろいろ巡らせています。

**阿部**——最後に一言ずつ感想などをお話いただければと思います。

**深澤**——毎度このような場に呼んでいただけるのは幸せです。毎回、目からうろこの話が聞けますし、皆さんの熱い思いに刺激を受けます。やはり何かをするときには一人では絶対にできないとつくづく感じています。思いがないと行動にもつながりませんし、人に伝えられないと思います。

皆さん共通しておっしゃっているのは、自分に関わる人をはじめとする周りの人を笑顔にしたい、幸せにしたいという思いがあって初めて、そのような思いを持った人たちとつながれるのだらうということです。先ほども安池さんから「松崎や南伊豆とのご縁」というワードを言っていたのは大変ありがたいことです。これからもいろいろな形でこのご縁を大事にしていきたいと思っています。その他のパネリストの皆さんにも本当に何度もお会いして、いろいろなお話をいただいているので、これからも私のような人間と懲りずに付き合っていただければと思います。

**荒武**——毎回この会に出させてもらって、もう4年目ぐらいになるでしょうか。その都度お話しする内容が変わっていくので、年の瀬のタイミングに皆さんの前でお話しすることで、自分のいる場所を確認させてもらっているようなところがありますし、皆さんからたくさんの刺激もいただいています。

最後の方で「食」に関するお話があったのですが、当初大事にしていたものが新しい挑戦をする中で忘れつつあるようにふと感じて、ダイロクキッチンをうまく使いたいという気持ちが再燃しました。小林さんや安池さんと一緒にできる機会を作らせてもらえるとうれしいです。地元のママさんたちが紹介で来たり、非常にやる気のある子どもたちを集めたりしてプレーパークをやっているような若者もいるので、うまく連携できたらうれしく思います。

**宇賀田**——今日の皆さんの発表でとても印象に残っている言葉がたくさんありました。山口さんの発表の中で、「人口減少は課題の要因ではあるが課題ではない」という言葉がありました。これを聞いている学生の皆さんも、授業のレポートなどで「人口減少が課題である」などと簡単にまとめられそうなものがよくありますが、そもそも人口減少は課題ではないという立ち位置で物事を考えてもらうことはとてもいいことだと思いました。その点では大学で今、対面かオンラインかという議論もありますが、そもそも対面が良くてオンラインは駄目だという前提も少し違うような気がしています。

安池さんのお話では、「お仕事とは」という定義がとても分かりやすく、大人の社会でも誰かの困り事を解決したり、誰かの幸せをつくったりすることだというのは本当にそのとおりで思っています。いみじくもその話を中学生や高校生にしている、それが原点のはずなのですが、途中で雲行きが怪しくなってくるのが不思議だと思います。私の立場でできることは何とかやっていきたいという思いを新たにしました。また、私も伊豆に胃袋をつかまれた一人なので、また行きたいという思いがふつふつと湧きました。

これを聞いている学生の皆さんの中で、静大フューチャーセンターは面白そう、楽しそう、大人とつながる扉だと思った方は、遠慮なく連絡をいただければ幸いです。



**増田**——1年生のときから毎年懲りずに呼んでいただけたので4回目になります。私ごとで申し訳ないのですが、フューチャーセンターのディレクターとして登壇するのは今回が最後になります。最後がオンラインなのは少し貴重だと思いながら参加させていただきました。

最近、私自身もフューチャーセンターとは別の活動で、小学生ぐらいの子と関わる機会が多くなっています。マルシェに来てくれた小学生たちに松原の保全活動をしてもらい、枯れ松葉を集めた分をお金に換えて、商品券を渡してお買い物をしてもらっています。お小遣いを持ってこなくても、保全活動をしてくれたらお買い物を楽しんでもらうことができるのです。しかし、彼らをただの労働力として扱うことは絶対にしたくありませんし、自分たちが楽しくて集めてくれているならいいと思いながら、模索しつつ活動しています。彼らがもっと楽しく集められるような仕組みや、集まった枯れ松葉を使って商品開発をするような話がどこかで進められたらいいと思っています。小林さんも安池さんも、どこかでつながれたらいいと思っているので、またご連絡させてください。

今年は東伊豆には隙を見て何度か行っていたのですが、あちこち転々とするにははばかられて、南伊豆にも松崎にも行けなかったのが、またぜひ遊びに行かせてください。

**小林**——私も静大生という身分で登壇するのは最後になるので、寂しい気持ちと同時に、静大生としての学生生活を振り返って、静大に入ったからこそ、ここまで継続できたのだと思っています。プレゼンの中で言う機会はなかったのですが、静大の先生方との出会いやサポートがあったから、小さな会場から始めたものがこうして徐々に地域に根付くところまで行くことができました。

静大に所属している方や静大生になろうとしている方は、静大生という身分を最大限生かしてほしいと思っています。授業のフィールドワークなどでおのおのが関心の向かう場に出掛けて、学びを得てほしいです。アンケートを実施するにしても、どこかを見学するにしても、調査するにしても、静大生という身分は静岡県内では非常に役立つことが多いと思います。自分のやりたいことに向かって、静大生という特権を使ってほしいと思います。私も静大生であることによって、子ども食堂の活動のみならず市や県と連携したり、国の省庁のプログラムにも参加したりすることができて、地域人材としてトビタテ！留学JAPANでの海外留学派遣もさせていただきました。これからの静大生の皆さんに期待したいと思います。

**安池**——先ほど発表した「こんこんきつねむすび」は、8歳の社員の子のアイデアです。その子はアイデアを出すことは好きなのですが、選ばれるのが嫌なタイプの子でした。「少数派の意見になった子がかわいそう」「自分が選ばれなかった子を見るのが嫌だから」と言って、結論を出すことが苦手だったのです。しかし今回、このおむすびを作る過程で、「隊長、お仕事って選ばれることが大事じゃないんだね。それをどうつなげていくかなんだね」と言ったのです。

それを聞いていた10歳の社員が自分ができることを考えて、食レポをしました。学校があるため土曜日の商品開発会議に出られなかったその社員は、つなげるにはどうしたらいいかと自分なりに考えて、静岡県でしか食べられないその商品を、県外や海外の社員にも味がわかるように食レポをしたり、食べてくれた人にインタビューをしたのです。そうすることで、自分ができることをしてつなげていこうと思ったようです。

このように、子どもたちはどんどん成長していきます。われわれ大人が勝手に未来や社会をつくって、そこに子どもたちを放り込むより、一緒につくっていったらと思っています。このような思いばかりの株式会社こども会議（仮）ですが、「(仮)」が取れる日まで一緒にサポート

していただけたらと思いますので、引き続きこれをご縁によりしくお願いします。

**阿部**——私からはもう何も言うことがありません。お願いとして、参加されている方はミュートを解除して、声や拍手が聞こえるような状態にして、パネリストの方々に拍手を送っていただきたいと思います。

静岡大学×和歌山大学研究フォーラム

## 半島地域における交流・協働のための プラットフォームを考える

日 時：2021年2月11日（木）14:00～17:00

開催方法：Zoomによるオンライン形式

プログラム：

- (1) 開会挨拶 石井 潔（静岡大学長）
- (2) 趣旨説明
  - 「静岡大学未来社会デザイン機構について」  
丹沢哲郎（静岡大学理事・未来社会デザイン機構長）
  - 「和歌山大学紀伊半島価値共創基幹について」  
伊東千尋（和歌山大学長・紀伊半島価値共創基幹長）
- (3) 活動報告・提案
  - 報告1「伊豆半島ジオパークを軸にした取り組みと今後の展開」  
小山真人（静岡大学未来社会デザイン機構教授）
  - 報告2「半島地域における高大地域連携による地域発展学習の取り組み」  
村田和子（和歌山大学紀伊半島価値共創基幹教授）
  - 報告3「紀伊半島における鉄道防災教育を中心とした取り組みと今後の展開」  
西川一弘（和歌山大学紀伊半島価値共創基幹准教授）
- (4) パネル・ディスカッション
  - パネリスト：上記報告者  
深澤準弥（松崎町企画観光課長）  
山口一実（南伊豆町企画課地方創生室主幹）  
荒武優希（ローカルデザインネットワーク理事長）
  - コーディネーター：阿部耕也（静岡大学地域創造教育センター長）
- (5) 閉会の挨拶 竹之内裕文（静岡大学未来社会デザイン機構教授）

### 開会挨拶

石井 潔（静岡大学長）

皆さま、本日はご多忙の中、両大学共催の研究フォーラムにご参加いただき、誠にありがとうございます。このフォーラムは元々、静岡県賀茂地域局のご協力をいただき、伊豆半島下田市にある賀茂キャンパスを会場として、和歌山大学の伊東学長をはじめ、紀伊半島価値共創基幹（Kii-Plus）の方々に現地においでいただき、開催する予定でした。しかし、新型コロナウイルスの感染状況が悪化し、やむなくオンラインでの開催となりました。

さて、静岡大学はキャンパスのある県中部・西部だけでなく、東部や伊豆半島でもさまざまな活動を展開しています。近年は2016（平成28）年度にスタートした学位プログラム「地域創造学環」のフィールドワーク地として、また大学全体で取り組んでいる地域課題解決支援プロジェクトの舞台として、学生や教職員が関わっておりますし、後ほど小山先生からご報告する

伊豆半島ジオパークを巡る活動についてもこれまで大きな成果を上げてきたと考えています。

こうした活動をより活性化させるために、昨年（2020年）4月に未来社会デザイン機構という全学的な組織を立ち上げ、7月には修善寺に東部サテライトを開設しました。伊豆半島は奥深い自然、文化、歴史の宝庫である一方、若い世代を中心に人口減少と経済の縮減が特に進行している地域でもあります。豊かな資源と深刻な課題を抱える地域において、どのような取り組みを進めていくかというのは、伊豆半島のみならず全国の地域が抱える共通の問題だと思います。

紀伊半島を舞台として長年、意欲的な活動を展開され、Kii-Plusを核にその活動をさらに拡充・進化しようとされている和歌山大学は、こうした取り組みの先駆者であり、われわれにとっても参考にすべきモデルとなる存在です。

また、フィールドワークなどで学生・教職員を受け入れている伊豆半島の自治体の方々にも今回、パネリストとして参加いただいています。フォーラムでは伊豆半島、紀伊半島それぞれで展開する地域と大学の取り組み事例を報告し合い、質疑や意見交換を行うことで、これらにつながる示唆をいただけるものと考えています。

さらに今回は報告者やパネリストだけでなく、伊豆半島を中心にさまざまな活動を進めているの方々、全国の大学関係者の方々にもご参加いただいています。このフォーラムがさらなる連携交流のきっかけとなることを祈念して、私からのご挨拶とします。



**趣旨説明****静岡大学未来社会デザイン機構について**

丹沢哲郎（静岡大学理事・未来社会デザイン機構長）

**1. 地域×静岡大学**

今回、静岡大学と和歌山大学という、ともに半島の地域を持つ県にある大学として、こうして連携のきっかけをつくることができたことを大変うれしく思っています。

私ども未来社会デザイン機構は、昨年（2020年）4月に発足しました。その一番大事な理念は、「地域×静岡大学」という部分です。特に私どもが大切にしているのは、社会の多様なステークホルダーと共に望ましい未来社会についてビジョンを描くことです。後ほどご紹介する松崎町での事業でも、こうしたビジョンを描くことを進めています。ビジョンに到達するために、解決すべき課題を明確にして、複雑な地域課題の解決のために、協働して具体的な事業活動を進めていくことを最も大切にしています。

そのためには「対話」を重視したいと考えています。徹底的に地域の方々と対話を続け、私たち大学が支援者、地域が被支援者という図式ではなく、地域コミュニティと対等なパートナーシップを築き上げます。そして、私たち大学側は文理融合の研究領域横断的なチーム「オール静岡」を構成し、課題解決を目指していきます。そして、単に地域の人口を増やしたり、経済活動を活発にしたりするだけでなく、ウェルビーイング（幸福）を目的として、そこに住む人たちが「そこに住んでいてよかった」「生活が快適だ」と思えるような社会を実現することを目指しています。

そのために私どもは、静岡大学の既存組織である防災総合センターと地域創造教育センターは、持続可能な社会構築に向けて非常に重要な組織であると捉え、未来社会デザイン機構内に再配置しました。それから、新設のサステナビリティセンターの中に五つの部門（ESD・国際化推進、法実務、ダイバシティ推進、環境変動適応、生物資源高度化利用）を置き、多面的に地域課題解決に取り組むためのセンターを構築しました。

と同時に、東部サテライト「三余塾」を設置しました。ご承知のように、静岡大学は浜松と静岡にキャンパスがありますけれども、東部地域にキャンパスがありませんでした。東部地域は東京に近く、首都圏に目が向きがちということもあって、静岡大学ではこれまで組織的に東部地域へ積極的に入っていけなかったという反省がありました。その反省を生かし、東部地域に拠点を設け、東部地域の課題解決や持続可能な社会構築に取り組もうと考え、三余塾を伊豆市修善寺の元幼稚園舎をお借りして設置しました。幕末の伊豆松崎では、土屋三余という方が日本全国で活躍する有為な人材を多く育て上げた実績があります。私どもも日本社会に貢献できる人材を輩出できるようにと、その方のお名前をお借りして「三余塾」という副称を名付けました。

地域創造教育センターの下には、地域創造学環という教育プログラムを設置しています。まさに地域で活躍できる人材を育成する教育プログラムであり、フィールドワークなどが非常に重視されている学部です。ここにも独自の教員たちが所属して活動しており、学生たちと共に地域課題解決に取り組む体制を整えています。

**2. 松崎町における取り組み**

松崎町からは本日、われわれと共に活動されている深澤さんにご参加いただいておりますが、

伊豆半島の中で現在、私どもの取り組みが最も進んでいる松崎町のご説明を簡単にしたいと思います。

そもそも松崎町と私たちの関係性ができたのは、本学の教育学部が松崎町にかなり昔から入っていて、松崎町の小中高校と共に、さまざまな教育プログラム開発や教師教育などをしてきた実績があったからです。それから、先ほど既存組織としてご紹介した地域創造教育センターが展開している事業に松崎町からも手を挙げていただき、古くから信頼関係が築き上げられたことで、私どもの活動が松崎町で展開できているのです。つまり、私たちが地域にぱっと入っていった何かができるというものではなくて、やはり互いの信頼関係が構築されている地域でなければ、なかなか高い成果も上げられません。ですので、私どもは松崎町と共にこうした活動ができることを大変うれしく思っています。

現在、松崎町と共に「地域と大学の協同によるサステナブル・ツーリズムの構築」というタイトルでプロジェクトを進めています。伊豆半島は観光が大きな産業ですので、一つの目玉として観光を中心に置きながらも、従来の単なる消費する観光ではなくて、サステナブルな観光の在り方を考えることを中心的な概念として進めています。しかしながら、私どもの目標は、松崎町が今後10年、20年、50年にわたってサステナブルな社会になることですので、まずは松崎町を今後どういった社会にするかという徹底的な対話を開始したところです。

今年度（2020年度）は中学生や高校生とのワークショップが3回、市民とのワークショップが2回の計5回を計画しており、現在二つが終了したところです。今年度中に松崎町の将来のビジョンを描き出し、そのビジョンを基に、次年度（2021年度）から具体的な取り組みを策定して、事業を進めていきます。

この事業は、県内のインフラ系の企業などにも高い関心を寄せていただきます。松崎町と私たちだけではなく、企業にも関わっていただき、さらには松崎町の観光協会あるいは伊豆半島ジオガイド協会と連携協定を結んだので、そうした関係も活用しながら、まさにさまざまな組織が対等な関係で参画して、松崎町の未来をこれからつくり上げていきたいと考えています。

### 3. 未来社会デザイン機構の概要

最後に、未来社会デザイン機構を構成するサステナビリティセンターについて、簡単に触れたいと思います。先ほど申し上げた五つの部門で、現在九つの研究プロジェクトが進んでいます。特に、静岡市の由比ではサクラエビの不漁という深刻な問題が生じ、地域社会の存亡が懸かっているため、地域社会の構築を含めて、サクラエビの不漁問題解決に向けた取り組みが活発に進んでいます。

それから、裾野市はトヨタ自動車が入って新しい町をつくるということで非常に有名になりましたが、裾野市には元々、スマート・シティ構想があって、AIなどを活用したまちづくりをここ数年進めています。そこへ技術的・法的基盤の構築のために、情報学部の教員やサステナビリティセンターの法律系の教員などが入って、事業を進めているところです。

持続可能な開発目標（SDGs）には17のGoalsがありますが、私たち機構としては、これらのGoalsを目標にして事業を進めているわけではありませんので、そこは誤解ないようにお願いしたいと思います。私たちはあくまでも未来ビジョンを描き出し、そこへ向かって課題解決を図ることが目標であり、その結果としてSDGsのGoalsが関わってくるのです。機構のメンバーと「われわれの取り組みはSDGsでいえばどのGoalに対応するのだろう」という話をすると、「全部だね」という答えがすぐに返ってきます。つまり、Goal一つを定めて何かを進めるようなア

アプローチはまったく取っていないということです。

先ほど、既存の組織である防災総合センターと地域創造教育センターを再配置したと申し上げました。防災総合センターに関して言うと、和歌山県も同じ課題を抱えていると思うのですが、やはり津波対策は地域にとってまさに存亡の危機に関わる大きな課題であり、これまで十数年間、地域と連携して防災体制の向上に資することを目的として活動を進めてきました。これは、われわれ機構の理念と非常に一致するところであり、防災センターの教員たちが松崎町のプロジェクトにも関与して互いに協働しながら、地域の課題解決、持続可能な社会構築に取り組んでいるところです。

一方、地域創造教育センターでは、これまでまさに個別の地域課題解決を進めてきました。特に地域課題解決支援プロジェクトでは、地域社会が抱えている問題を大学と一緒に解決したいという提案を地域からいただいて、こちらでマッチングし、うまく進められるものは先に進めていくプロジェクトです。その中で最も多くの課題提案をいただいたのが松崎町であり、先ほど申し上げた経緯もあって、今回の機構としての取り組みにつながっています。

また、地域創造学環部門は、学生たちと共に地域に入っていくって課題解決を進めている部門であり、未来社会デザイン機構の活動と最も親和性が高いセンターだと思っています。

#### 4. 今後の課題

私どもは現在、裾野市や松崎町、磐田市といった地域と事業を進めていますが、お膝元の静岡市とどう連携するかということが大きな課題の一つになっていて、静岡市との協議が始まった段階です。しかしながら、そうしてさまざまな地域とプラットフォームを形成して課題解決に取り組んでいく中で、学内で文理融合の人をどう組織して進めていくかということが大きな課題になっています。私どもの機構は比較的大きな組織ではありますが、偏りもあり、まったく足りない分野もたくさんあります。学内でそういった教員たちをどう組織化して、プラットフォームに参画いただいて共に取り組む体制をつくるかということが、大きな課題になっています。

それから、これは私どもの内輪の問題になるのですが、サステナビリティセンターと機構はどういう関係性があるのかという組織論の問題があります。まだ立ち上がって1年たない組織ですので、関係のメンバーとも議論しているところではありますが、より充実した体制、外から見て分かりやすい体制、成果をきちんと上げられる体制を今後どうつくっていくかということが、私どもの課題だと捉えています。

## 和歌山大学紀伊半島価値共創基幹について

伊東千尋（和歌山大学長・紀伊半島価値共創基幹長）

### 1. 紀伊半島価値共創基幹という地域連携モデル

本日はこのような機会をいただき、誠にありがとうございます。われわれ和歌山大学は教育学部、経済学部、システム工学部、観光学部の4学部からなる極めて小規模な地方国立大学です。今までも地域貢献はかなり進めてきてはいたのですが、どうしても個別対応が多く、システムティックな活動になっていなかったという問題がありました。そこで、地域貢献活動を見直し、「紀伊半島価値共創基幹」という組織を立ち上げました。私からは、その内容について説明したいと思います。

先ほど、伊豆半島の話がありました。私は三島出身ですので、伊豆半島の付け根の地域のこととはよく知っているのですが、先端部へ行くと自然豊かですし、そこに根付いている文化もたくさんあります。和歌山も同じように歴史、文化、自然があふれています。和歌山城や熊野などの自然遺産や文化遺産、そしてジオパーク構想がありますので、紀伊半島と伊豆半島は非常に大きなつながりがあると考えています。

われわれ地域の大学としては、この地域の魅力や地域の力を地域振興や地域創生につなげていく役割を持っていますので、そのために和歌山大学では何ができるかということを考えているところです。

## 2. 地域連携の課題とその解決

われわれのような小規模な大学の場合、地域連携における最も大きな問題はやはり人手の問題です。従来型の地域貢献は多くの場合、大学から地域に教員が入って行って、研究主体で地域連携を行う形になっています。この形をわれわれは、大学教員がプレーヤーとして働くプレーヤー型の地域貢献といっているのですが、この形の地域貢献では非常に問題が生じることがあります。

地域の観点から申し上げますと、人口減少によって地域の課題がかなり複雑化してきています。クリアカットにこの分野で解決できるという話がなかなかできません。すると、研究で入っていった教員だけではなかなか対応できないという問題があります。大学側の問題としては、運営費交付金等の削減により、十分な数のプレーヤーを確保できないことが挙げられます。プレーヤーとなる教員が他の大学に移ってしまったり、部局長になってしまったりすると、今まで築き上げてきた地域との連携が切れてしまうという問題点が今までも発生していました。

そこで、われわれは新しい共創型地域連携を考えています。地域のプレーヤーと共に活動することで、持続可能な地域連携を可能にする取り組みです。これはわれわれ教員側が出ていくだけではなくて、地域からも大学に入ってきていただくのです。こうした形でいけば、大学本体にいる多様な研究者とのつながりを地域のプレーヤーが得ることができるので、多様な課題に対応できるというメリットがあります。

以上のような経緯で、われわれは今年度の4月（2020年4月）から紀伊半島価値共創基幹（Kii-Plus）を立ち上げました。Kii-Plusでは紀伊半島が抱える諸問題について、自治体と企業とのマルチパートナーシップによって社会実装研究教育プロジェクトを展開し、課題の解決とともに新たな価値を共創することを目指しています。半島特有の事情によって発生する課題を地域ニーズに基づいて取り上げ、Kii-Plusをコアとする広域な連携によって解決を図るものです。和歌山市の駅前にグリーンベルトを作る活動をしたり、棚田地域にインターンシップで学生を派遣したり、インターンシップで果樹園に行ったりするような活動も含めて、地域の課題に学生と教職員が共に対応しています。

通常は研究者の研究活動や地域貢献が成果になるのですが、Kii-Plusでは社会実装研究教育プロジェクトの成果が「果実」になるだけで終わってしまうと、地域も大学もあまり大きな影響を受けないので、果実が熟して地面に落ちる（社会実装する）ところまでを考えています。社会実装が可能になることにより、また地域が活性化して養分が発生しますから、それによって地域との連携関係が強化されます。あるいは、地域から資源が投入されることでさらに木が大きくなり、葉が茂り、そして実を付けて、その実が落ちるといった好循環モデルをつくっていきたいと考えています。そのために、和歌山大学は連携大学・機関と地域社会をつなぐ結節点になりたいと考えています。



### 3. Kii-Plusの取り組みと成果

ここでKii-Plusの取り組みの特徴を説明します。Kii-Plusには価値共創オフィスという司令塔を置いています。特徴は、プログラムオフィサーが大学教員ではないことです。地元自治体の局長級の人を特任教員として雇用して配置します。そうすると、大学からの発想ではなく、地域目線での地域貢献の展開が得られることになります。その下に生涯学習・リカレント教育推進室や各サテライトを置いています。

さらに下部組織として、食農総合研究教育センター、災害科学・レジリエンス共創センターを置いていきます。さらにその下に、実質的に防災に対応する学生災害ボランティアステーションを置いています。また、紀伊半島の文化・経済史を研究する紀州経済史文化史研究所を置いています。

Kii-Plusで従前から続けているパイロットプロジェクトとして、「地域レジリエンスの共創」というテーマの下、観光地特有の災害に関する課題解決を目指す社会実装モデルの構築を進めています。それから、「食農価値共創拠点への展開」というテーマでは、和歌山では平野部がかなり少なく、山間部で果樹栽培をしているところがほとんどですので、「条件不利地域・小規模農業の課題解決を目指す活動をしています。

この二つをパイロットプロジェクトとして展開していますが、その他に地域のニーズに基づいた社会実装研究教育プロジェクトを展開しています。これは地域自治体からの要望やニーズをこちら側から拾い上げ、あるいは提案していただき、大学のプロジェクトとして展開するものです。こうした活動を通じて和歌山大学の地域連携モデルを構築するとともに、それを半島支援の大きなプロジェクトに変えていきたいと考えています。

特に、半島地域で一番重要なのは人口減少です。人口減少によって自治体が今までの規模で維持できなくなってきました。バス・鉄道等の交通機関も、利用者減少によって非常に細ってきています。こうした問題を取り上げていくことで、地域の価値共創の在り方を考えていきたいと思っています。そのときに、地域の共創人材と学内教員の連携、地域課題解決の教育への取り込み、研究成果の実装にも対応していきます。これらを抽象化・一般化することにより、紀伊半島だけではなく伊豆半島を含めた他の半島地域において、半島に起因した課題解決を図り、地域創生につなげていきたいと考えています。

Kii-Plusの取り組みにおいて、やはり学生の力を生かしていくことが必要になるため、セミナールーム、学生ルームとオフィスを学内に整備しました。全学のスペースマネジメントを行うことで、今まで分散していた地域連携部門のオフィスを1カ所にまとめました。それから、現在のプログラムオフィサーには和歌山市役所の元局長級の方に入っています。社会福祉協議会からの人材受け入れをしています。これについてはプログラムオフィサーによる部分がかなり大きいです。

それから、自治体や各機関との連携協定を締結しています。和歌山県だけでなく、大阪府阪南市とも締結しました。それから、日本財団学生ボランティアセンターとも結んでいるほか、さらに複数の協定締結予定があります。それから、地域からの相談窓口機能を一元化しました。これにより、学部ごとに受けていた相談がすべてここに集まるので、いろいろな分野の教員を投入できる利点があります。私はこの機関の発足に際し、和歌山県内30市町村と泉州の8市町村を回り、自治体トップ全員と対談して、われわれが求めている地域貢献の在り方を説明しました。

われわれの地域貢献活動の特徴の一つに、価値共創研究員というものがあります。自治体の職員に週1日あるいは2週間に1日程度、和歌山大学で研究員という身分を持って勤めていただ

くものです。解決すべき地域課題を持ってきてもらって、それを和歌山大学の研究者と一緒に研究するとともに、自らの職場に持ち帰ってもらってさらに実装を考える仕組みです。和歌山市からはアフターコロナを見据えて「ご近所観光（マイクロツーリズム）」というテーマが出され、その研究を観光課職員の方にしてもらっています。また、和歌山県社会福祉協議会の職員を受け入れて、ボランティアステーションの方でも活動が続けられています。

社会実装教育研究プロジェクトのパイロットプロジェクトのうち、「災害レジリエンス」については後ほど西川から詳細に説明します。もう一つの「食と農」については、和歌山県は果樹産地ですので果樹労働の労働力確保支援システムや6次産業化の支援などを行っています。

また、紀州経済史文化史研究所では、「和歌の浦」という和歌にも詠まれる非常に古くからの景勝地があるので、その景観とそこで行われている和歌祭の保存と継承、紀州地域における歴史と文化的価値の教育・啓蒙をしています。

さらに、「ご近所観光」のプロジェクトや、最近では地域に外国人が入ってきているので、その子女教育として「外国人にやさしい和歌山」プロジェクトを進めています。

今年（2021年）に入ってから、災害ボランティアセンターなどと連携した災害対応訓練や、「小規模多機能自治」と「中山間地域での新しい移動創生」を組み合わせた活動を進めています。それから、今回参画した「半島学」についても静岡大学と連携して進めていきたいと考えています。

共創化による主な効果事例としては、事業面では南海電鉄との共創事業が進んでいます。また、人材面では県社会福祉協議会からの価値共創研究員派遣や災害ボランティアセンターとの連携によって確実に成果が出ています。

われわれは、今まで個別にやってきたことを機関・組織として地域連携する立場でこうした取り組みを行っています。静岡大学の広い規模にわたる地域連携と比べると見劣りするところもあると思いますが、今後もいろいろとご指導いただきながら、頑張っていきたいと思っています。

## 報告 1

## 伊豆半島ジオパークを軸にした取り組みと今後の展開

小山真人（静岡大学未来社会デザイン機構教授）

私は、未来社会デザイン機構の副機構長と防災総合センターの副センター長、そして伊豆半島ジオパーク推進協議会の顧問を務めています。南紀熊野ジオパークは伊豆半島ジオパークと隣同士のジオパークで、ほそぼそと交流がありますし、和歌山大学観光学部にチャクラバルティー・アビックさんという方が准教授でおられると思いますが、この方は伊豆半島ジオパークの元研究員で、何年か一緒に楽しく活動した仲間です。そういう意味では和歌山と縁があったと思います。

## 1. ジオパークとは

ジオパークは、地質公園や世界地質遺産と訳されることがあるのですが、これは完全な間違いです。ジオパークは、一番の基礎に大地があり、その大地を保全・活用して地域を興していく仕組みです。活用は主に経済活動と文化活動に分かれ、文化活動の中には教育がきちんと入っていますし、経済活動の中にはツーリズムが入っています。

ですので、ジオパークは大地だけが資産ではないのです。大地の上にはいろいろな自然物、地層や岩石だけでなく水もありますし、温泉もありますし、動植物もありますし、災害も起きていろいろな景観が作られています。その上に人間がいろいろな産業を興して特産物を作ったり、観光や防災活動をしたりして、地域社会が成り立っているわけです。大地と地域社会の間にはいろいろなつながりがあって、このつながり全体を守って楽しむのがジオパークの根本的な姿です。ですから、大地とつながる地域のすべてがジオパークの構成資産ということになります。

ジオパークは現在、世界ジオパークというユネスコの一つのプログラムになっていますが、似たようなプログラムには世界遺産やMan and Biosphere Reserve（MAB：ユネスコエコパーク）があります。それぞれ特徴があるのですが、やはりジオパークの一番の特徴は、人の活動であることです。地域社会の人々の活動を非常に重視していて、そこが審査対象となっていることが一つのポイントです。それから、他の二つと異なり4年に1度の再審査があり、実は今年（2021年）が再審査の年なのです（その後コロナ禍によって延期中）。人々がしっかり活動していないと取り消される可能性もあり、過去に取り消されたジオパークは幾つもあります。

審査基準としては、地質学的な価値のある場所を保全して、それをきちんと見せていなければなりませんし、地域の文化や歴史、生態系を見せるサイトも必要です。その上でツーリズムの拠点があるか、いかに住民が参加しているか、地元子どもたちに教育ができていないか、管理のしくみと持続性があるか、世界中のジオパークときちんと交流しているかといった、多数の厳しい審査基準があります。これをクリアしないとジオパークにできないのです。

ジオパークは2015年末に、ユネスコの正式なプログラムになりました。それまではユネスコが支援するプログラムだったのですが、直轄プログラムになったために新たなことが入ってきました。SDGsのことはもちろん、ジェンダー平等に配慮しているか、地域の持続的な発展にきちんと貢献しているかが問われるようになりました。もう一つ重要なのは、地域の防災教育に

役立っているかどうかは明確に位置付けられたので、もはや防災に関わっていないジオパークは審査を通らないことになったと言えます。

大地が生んだ資産が一番下の基礎となって、それを教育・文化、経済・観光、保全・防災の3本柱で支えていくのがジオパークだと言ってよいでしょう（図1）。

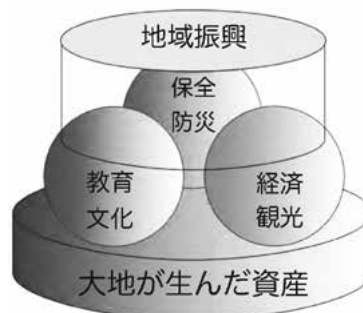


図1 ジオパークのしくみ

世界のジオパークの分布を見ると、元々は中国とヨーロッパで始まったプログラムを結合したもので、まだ偏在していますが、だんだん世界中に広がっており、今では44カ国169地域になっています。そして、日本には伊豆半島を含めて9地域のユネスコ世界ジオパークがあります。その他に日本ジオパークとして認められている地域が37、そこを目指している地域が10あり、いまや日本全国に広がった活動といってもよいと思います。

## 2. 伊豆半島ジオパークの認定

伊豆半島のジオパーク認定に向けた取り組みは2011年に始まり、2018年にユネスコ世界ジオパークの認定を受けました。今やユネスコのホームページに行くと、大室山の写真とともに「IZU PENINSULA UNESCO GLOBAL GEOPARK」というページで紹介されています。

これは特筆すべきことだと思いますが、静岡県地域防災計画にも2013年からジオパークが位置付けられました。最初は火山対策のためだったのですが、2015年の修正によって地震や津波、土砂災害などすべての自然災害に対してジオパークが防災知識の普及に役立つと明記されました。日本のジオパークの中で地域防災計画中にジオパークが明記されているのは、恐らく伊豆半島だけだと思っています。

元々、伊豆半島ジオパークはそこを目指してきたのです。実は1989年に伊東沖で突如、海底火山が噴火するという大事件がありました。噴火そのものは1日程度で終わったのですが、伊東温泉の3km沖に海底火山が誕生しました。普通、こういうことがあれば防災対策が地域できちんと進められていくのですが、残念なことに大観光地だったので、火山のことにふたをしてしまったのです。目の前にある火山噴火のリスクを無視した時代が20年ぐらひ続きました。

私は地元の火山学者としてこのことを非常に残念だと感じ、まずは知識の普及活動を行った結果、2005年ごろからはようやく「火山は悪いことばかりではない。それを生かした観光でまちづくりができるのではないか」という思想が広まり、それに従って防災対策も広まって行って、火山リスクを直視する時代に入りました。その結果としてジオパークができたこととなります。

2011年3月、あの忘れもしない東日本大震災が起こった月に、計画停電の中、伊豆半島ジオパーク推進協議会が設立されました。翌年（2012年）には日本ジオパークに認定され、その後いろいろ頑張って、世界ジオパークの認定を受けたのが2018年になります。

## 3. 南から来た火山の贈りもの

伊豆半島ジオパークのメインテーマは「南から来た火山の贈りもの」です。伊豆半島は、フィリピン海プレートという本州とは別のプレートに乗って、徐々に北へ移動してきた歴史があります。まさに本州とくっつきつつある場所であり、二つの火山列島が衝突しつつある場所は、世界中でここだけという特異性があります。

伊豆半島の成り立ちは、かつて南洋の海底火山だったものが徐々に本州に近づき、本州との間に海峡が生まれ、半島そのものも陸化を始め、衝突して半島になったというものです（図2）。



最初は長い海底火山の時代があって、それから陸上の火山になったという特徴があります。そうになると、かつての海底火山が陸上に見えている形になります。海底火山の場合、陸上火山の噴火とは異なり、かなり見かけの異なる堆積物を作ります。

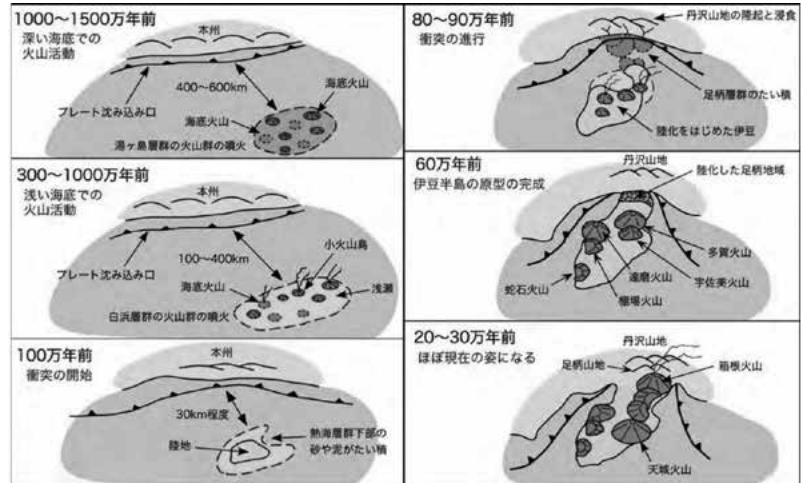


図2 伊豆のおいたち

例えば溶岩が海底を流れると、表面張力でチューブ状の流れになります。これを崖で見ると、枕が重なっているように見えるので枕状溶岩といいます（図3）。逆にこれがあれば海底火山ということがわかります。また、角張った岩を積み上げたような崖があります。海底に噴出したマグマが海水で急激に冷やされ、水冷破碎した溶岩です（図4）。噴火していないときは、海底にたまった火山灰がきれいな縞模様を作ります。それから、かつての海底火山の根元の部分が露出してできた地形もあります。そうした場所に行くと、六角形の模様が見えます（図5）。地下でマグマが冷え固まるときに収縮してできた柱状節理というものです。こうした場所が有名な観光地になっています。

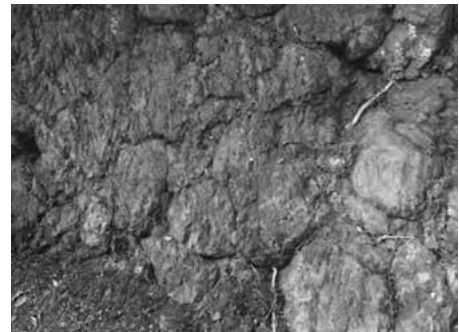


図3 枕状溶岩（西伊豆町一色）

陸上火山の時代（100万年前以降）には、最初は天城山や達磨山などの大きな火山ができたのですが、15万年前からは小さな火山がいくつも誕生しました。その代表格が大室山です。4000年前に噴火して、きれいな火口付きの小さな火山ができました。今は山全体が国指定の天然記念物になっています。この山は、粘り気の少ないマグマが火口から噴水のように噴き上がって、その周りに積もったものです。こうした火山をスコリア丘といい、世界的に同じようなものがたくさんあります。大室山麓からはこんこんと溶岩が流れて、伊豆高原と城ヶ崎海岸を作りました。平らな高原と凹凸の激しい美しい海岸となり、今では一大観光地になっています。



図4 水冷破碎した溶岩（西伊豆町仁科）

伊豆半島ではさまざまな石材が採れます。すべて火山が作ったもので、黒曜石があったり、安山岩や凝灰岩を切り出した石切場の跡なども資源として残っています。切り出された岩は石材（伊豆石）として、主に南関東に運び出され、下田市でも海底火山の火山灰が波や海流に洗われたときの美しい縞模様をもつ石が、石材として

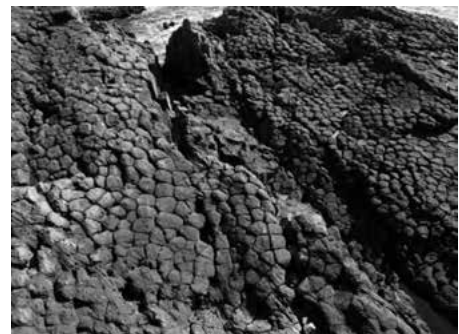


図5 柱状節理（下田市依磯）

使われています。こうした石材が世界遺産の韮山反射炉や江戸の台場、江戸城の石垣などにも使われました。

火山が繰り返し何度もできた伊豆半島は地熱が高いので、そこに染みこんだ地下水が温められるため、100°C近い温度の温泉が湧いている場所もあります。そうした温泉水からは、貴重な鉱物が沈殿します。そうすると、元は灰色の岩石だったものが黄色や茶色になって、それが夕日に映えると観光地になりますし、金山やガラスの鉱山として採掘されたりしました。

いろいろな特産物の恵みもあります。ワサビは伊豆半島を代表する特産物ですが、伊豆半島特有の地質学的な歴史を反映しています。変質が進んだ海底火山の地層は水があまり通らないのですが、すき間や割れ目の多い陸上火山の地層が上に重なっているので、そこに水が染みこむと2つの地層の境界付近に地下水がたまって麓で大量に湧き出すため、そこでワサビを作ることができます(図6)。

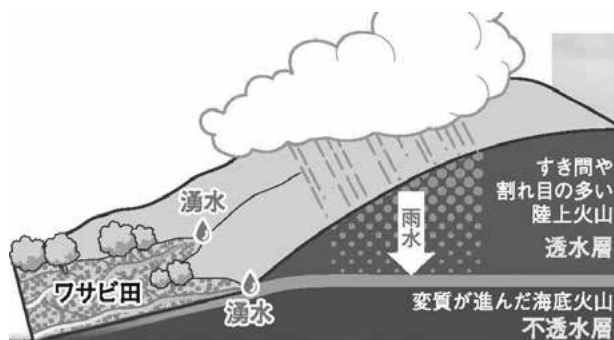


図6 伊豆半島独特の湧水が育むワサビ沢

プレートの沈み込み境界がある駿河トラフでは、深海生物が採れます。タカアシガニはその一つです。こうした特産物も地質学的な特徴を反映しているのです。

#### 4. 津波と活断層

ただし、よいことばかりではありません。伊豆半島の西側には駿河トラフという東海地震が起きるプレート境界があり、東側にも相模トラフという関東地震の震源域があるので、当然津波が来ます(図7)。津波に襲われた伊豆半島各地には、「つなみ塚」などの石碑を始めとする痕跡が多く残っています。

特に下田は、半島を回り込んで両側から津波が来るのです。港としては素晴らしい立地なのですが、何度も津波に襲われてきました。世界史的に有名なのは1854年、江戸幕府と開国交渉を行うためにプチャーチン提督率いるロシア軍艦ディアナ号が下田に停留中に、ちょうど安政東海地震の津波に襲われた出来事です。そのときに下田を襲った津波の痕が地質学的にも発見されました。下田東急ホテルの下の海岸に巨礫がひっくり返っていて、その上面に白いものが残っているのですが、これは化石なのです。潮だまりに住むような生物の化石がなぜ海水につからない場所にあったのです。これは津波でひっくり返ったに違いないと思って、防災総合センター長の北村先生が研究したところ、やはりそうでした。こういった災害の痕跡もジオパークの大事な資産になります。

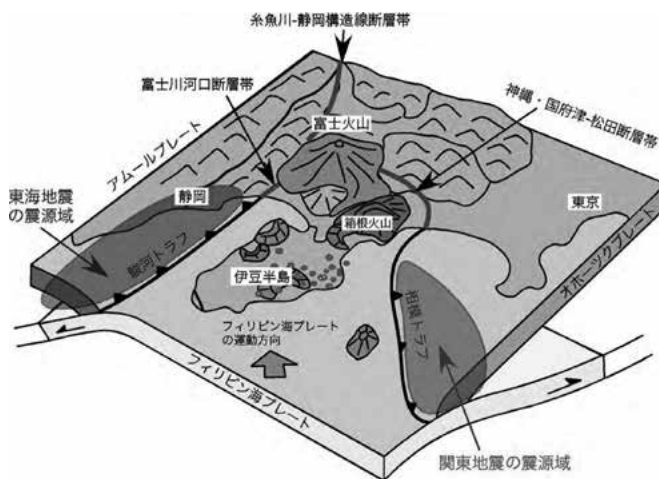


図7 伊豆半島周辺のプレート構造

伊豆半島は本州にぶつかって押されているので、多くの活断層があります。中でも一番有名なのは半島の根元にある丹那断層で、歴史上3回動いている活動的な活断層です(図8)。かつ



てつながっていた3本の川が、丹那断層によって同じ距離だけ1kmほどずれているのです。これを発見したのが、久野久という東大の先生でした。1936年というかなり早い時期に、断層が1km以上も水平にずれたことを世界で初めて発見したのです。つまり活断層の研究史上、記念碑的な場所なのです。

また、工事中だった在来線の丹那トンネルが丹那断層沿いの破砕帯に達して大量の湧水に苦しめられていたところに、ちょうど丹那断層が動いて北伊豆地震が

発生し、トンネルが2.5mずれてしまったという大事件が起きました。そのことを作家の吉村昭さんは『闇を裂く道』という小説で描いています。

工事にともなう大量の湧水は地上の湧水を枯渇させてしまったため、かつてワサビ田と稲作で生計を立てていた丹那盆地の人たちは、その責任を認めた鉄道省の巨額な見舞金によって酪農に転換しました。そうして生まれたのが現在の丹那牛乳です。静岡県では知らない人がないくらいの美味しい牛乳です。このように、大地の動きと向き合ってきた人々の歴史もあります。ちなみに丹那断層はその後も活断層研究の最先端地として大規模な発掘調査が行われ、平均的には1000年に1回活動して大地震を起こしていることがわかりました。つまり1930年に動いたので、あと数百年は大丈夫ということになります。

以上、ごく簡単に代表例だけを紹介しましたが、伊豆半島にはいろいろとすごい物語があるので、これを世界中に自慢するのが伊豆半島ジオパークの目論見となります。ちなみにジオパークの資産には、世界遺産が扱っていない無形遺産も含まれています。狩野川の水害で犠牲になった人たちのを弔う伊豆の国市の「かわかんじょう」というお祭りなども、その一つです。

## 5. ジオパークの組織と活動

2011年に伊豆半島の市町がまとまって伊豆半島ジオパーク推進協議会という運営組織を設立しました。最初は13市町でしたが、後に2町が加わりました。ボトムアップ的な組織になっていて、地域住民がいろいろな支援団体を通じて協力して、推進協議会の活動に参加する構造になっています。

修善寺に<sup>ジオリア</sup>GEORIAという、ミュージアム施設を持つ拠点も作りました(図9)。その上で、各市町がそれぞれ特徴あるビジターセンターを開設しています。これによって、かなり広い伊豆半島全域をカバーしています。また、既に観光地になっている見所には看板を建て、目の前に見えている風景がどうやってできたのかを説明しています(図10)。こうしたサイトは、地元住民から非常に愛着を持っていただく場になっていて、先ほど紹介した西伊豆の枕状溶岩の場所では清掃活動が行われたり、イベントが開かれたりしています。

ジオパークはどこでもそうですが、ジオパー

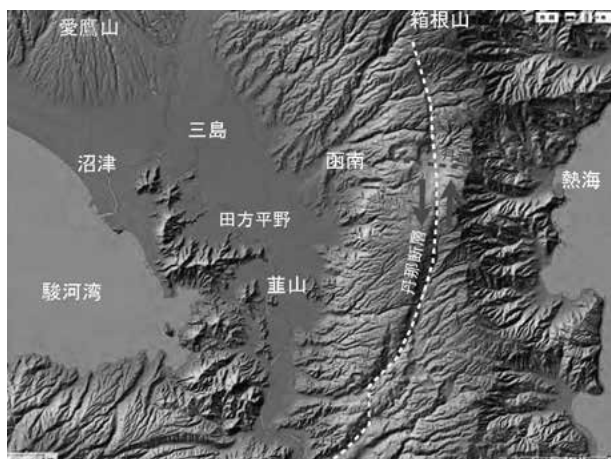


図8 丹那断層(白破線)とその周辺の地形



図9 伊豆半島ジオパーク中央拠点施設GEORIA(伊豆市修善寺)

クのガイド（ジオガイド）を計画的に養成しています。伊豆半島でも既に150人以上の認定ジオガイドが誕生しています。彼らはいろいろな得意技を持っていて、自転車やボートでガイドする人もいます。ジオパークならではのさまざまなツアーが、毎月数回企画されています。

お菓子作りが得意な人はジオパークのお菓子を作っています。岩石や地層、化石に似せたお菓子を作って、「ジオガシ」と名前を付けて売っています。また、地元の洋菓子店や食堂が、ジオパークにちなんだ商品を作っています。世界中のジオパークで同じようなものがある、それらをジオフードといいます。スーパーのマックスバリュ函南店では、ジオパークにちなんだ食品を、主にパートの女性たちが頑張っているいろいろな開発しています。

ジオガイドには芸術家も何人かいます。鈴木由美子さんは生け花の師匠さんで、自ら認定ジオガイドになってツアーをガイドする一方、自分のお弟子さんたちとジオパークをかたどった作品を作っています。日本の伝統芸術とジオパークが見事に融合した例として、ユネスコの審査のときにも紹介されました。

また、地元の現代アーティストたちも、5～6年前からジオパークにちなんだ現代アートを作るプロジェクトに取り組んでいます。最初の年は「半島の傷跡」と題して、丹那断層の動きをモチーフにした作品をお寺などに設置したりしました。その後も連綿と続いていて、2021年には伊豆市にある上白岩遺跡という縄文時代の遺跡の周辺にアートを展示しました。何をテーマとしたかという、3200年前に天城山で伊豆東部火山群の大噴火が起きて火砕流が流れ下り、さらにその先に大土石流が流れ下って沼津に到達するという大事件が起きました。縄文時代の人たちは住居が高台にあったので土石流から免れましたが、こうした大災害を体験しているのです。この事件をモチーフとしたアートを、いろいろな芸術家たちが映像・絵画・舞踊・彫刻など、それぞれ得意な技を使って表現したのです。

ジオガイドは、地域のさまざまな分野のリーダーになっている方が多くて、防災リーダーとして活躍している人もいます。例えば西伊豆町では、津波からいかに避難するかが大きな課題ですが、「防災まち歩き」と称して地域の中を実際に歩きながら危険箇所を発見し、それを地図上で共有するワークショップを開いたりしています。

学校教育でもジオパークがきちんと生かされています。伊豆総合高校ではジオパークの設立当初からさまざまな活動に取り組んでいて、今でもジオパークが総合学科の必修科目になっています。この間、私も出前授業をしてきました。生徒たち自身が地元の小学校でジオパークのことを教えたりしています（図11）。ユネスコスクールになった天城中学校でも火山の実験をしていますし、松崎高校もジオパーク活動に熱心に取り組んでいます。そうした成果を審査員が来たときに彼ら自身が発表しています。



図10 ジオパーク解説看板の例（下田市）



図11 伊豆総合高校生徒による地元小学校での出前授業

## 6. 静大と伊豆半島ジオパークの連携

続いて、静岡大学とジオパークがいかに連携してきたかを紹介したいと思います。まず、防災総合センターとは設立以来、さまざまな連携をしてきました。それから、もちろん私も含めて個別の教員との連携もしています。地域創造学環や未来社会デザイン機構との連携も始まっています。これらをまとめて簡単に紹介します。

防災総合センターの「防災静岡モデル」という事業構想の中に、しっかりとジオパークが位置付けられています。中でも人材育成を重視していて、地元の防災人材を育成する社会人向けの「ふじのくに防災フェロー養成講座」というプログラムには、ジオパークからも参加する人が出てきています。

例えば仲田慶枝さんという方は伊豆半島ジオガイド協会の会長なのですが、かつて私が防災フェロー講座の中で指導しました。防災フェロー講座は講義を聴くだけではなく、研究テーマにきちんと取り組んで、それを学会や研究会で発表するという、かなり厳しい課題をクリアした方が卒業できます。仲田さんは、西伊豆町の災害ボランティアコーディネーター連絡会の会長でもあるので、自分の地域で起きた災害を研究されました。それから、伊豆総合高校におられた上西智紀先生は、ジオパーク教育を実践してその成果を検証する研究をされました。伊東市職員の鈴木淑夫さんは、防災部署に長年勤められた方ですが、市内各地に地震計を設置して、伊豆東部火山群の活動による被害の即時把握をおこなうプロジェクトを構想し、彼が設置した地震計は今でも稼働しています。

そして、私が指導した学生たちも、修士論文や卒業研究でさまざまなジオパーク関連の研究を行い、それぞれ社会に巣立っていきました。何人かを紹介すると、ワサビ田と地質がどう関係しているのかを調べた研究や、近代文学の中でジオパークがどのように描かれているかについての研究もありました。

それから、ジオパークの研究員たちが大学内のさまざまな授業を担当するとともに、私たちもジオパークで開催される講演会やジオガイド養成講座の授業を担当したりしています。

次に、地域創造教育センターの下に位置付けられている地域創造学環を紹介します。地域創造学環は特定の学部には属さず、どこかの授業を聴きに行ってもいい教育プログラムです。2016年から学生50人が毎年入学し、当初は五つのコースに分かれていましたが、2020年度から地域経営、地域共生、地域環境・防災の3コースを文理融合の地域サステナビリティコースに統合しました。私は地域環境・防災分野で学生を指導しています。

地域創造学環の特徴は、1年生のうちから地域に出ていって、積極的に地域の人たちと一緒に活動して学ぶ「フィールドワーク」を必修単位として課していることです（図12）。県内の十数カ所にそれぞれ数名～十数名のチームを作って出掛け、地域課題の解決を目指して活動を行っています。伊豆半島ではジオパーク、松崎町、東伊豆町の3チームに分かれて入っています。

私が指導した学生たちは、環境負荷センサーを開発し、動物や人間の通行量を超音波センサーで調べました。先ほど紹介した防災まち歩きをテーマとした学生もいました。昨年（2020年）はコロナ禍で大変だったので、オンラインでジオパーク的なツアーを実施した学生もいました。

1年に一度、地域創造学環はフィールドワークの報告会を開いています。昨年度はコロナ禍



図12 フィールドワーク（聞き取り調査）の様子



で開催できませんでしたが、今年度はオンラインで報告会を実施しました。

未来社会デザイン機構との連携は、昨年始まったばかりです。まず、「三余塾」構想についてです。伊豆市にサテライトを作り、そこに常駐する教職員を置きました。そして、人口減少・少子高齢化が県内で最も進んでいる松崎町を最優先のテストフィールドとして、地域の課題解決に取り組み始めました。

伊豆半島の人口密度は北高南低となっており、北部は幹線鉄道や高速道が通っているので高いのですが、南に行くほど低くなっています。このことがさまざまな問題を起こしています。人口減少が経済活動の停滞を引き起こし、生産性や生活の質の低下を招いて人口が流出するという負のスパイラルになっています。かつて1万人あった松崎町の人口は現在約6000人で、2030年には約4000人、さらにその先は2000人台と予測され、将来が大変心配な状況になっています。そこで、まず松崎町を何とかしなければ他の地域の課題解決も見通せないだろうということで、松崎町を最初のターゲットに置きました。

サテライト自体は修善寺のやや南にあります。狩野川の近くにある元幼稚園の建物を伊豆市がレンタルオフィスにしており、その一室に設けました(図13)。まず誰もがそこを訪れていろいろなことを相談し合ったり、地域と大学が対話したりする機能を持たせることを目指しています。当然、会議室がありますし、いずれは市民や小中高生がそこで定期的に学べる場に、オンラインで大学の授業なども聴講できるようにしたいと考えています。



図13 静岡大学東部サテライト「三余塾」

## 7. 学校が人と人をつないだ

こうした地域と大学の連携のルーツと言ってもよいのが、浜松で創業したヤマハです。私は浜松出身なので、浜松について少し語りたと思いますが、ヤマハの草創期に山葉寅楠とらくすという人が日本で初めて国産オルガンを作りました。彼がそうした偉業を成し遂げるまでには、学校関係者が深く関わっています。浜松尋常小(旧元城小)に納入された米国製のオルガンが壊れてしまったのですが、誰も直せなかったため、この学校の学務委員をしていた県会議員の樋口林治郎が浜松病院の福島豊策院長に相談し、たまたま医療機器の修理工として和歌山から来ていた山葉寅楠に修理を頼んだのです。ここでも和歌山とのつながりがあったことが注目されます。彼がオルガンに強い興味を示したことから、国産オルガンが誕生しました。

ただし、そこに至るまでにはいろいろな障害がありました。最大の障害は調律だったのですが、当時の静岡県令(後の初代静岡県知事)・関口隆吉が文部省の伊澤修二という日本近代音楽の父を紹介し、調律することができました。その後、浜松尋常小に河合小市という天才児童が現れ、その工作技術の高さに注目した樋口林治郎が山葉に紹介したのです。この天才児童が日本初の国産ピアノを作り出し、河合楽器の創業者になっていきます。つまり、学校が人と人をつなぐハブになったのです。こうした世界を変えるきっかけとなる出会いを伊豆半島で実現するのが私の夢です。

実は、静岡大学にはこの続きの物語があります。初代静岡県知事・関口隆吉の息子・壮吉は浜松高等工業学校(静岡大学工学部の前身)の初代校長で、この人が浜松出身の高柳健次郎と本学で出会い、20年後の未来に必要な技術を開発しなければならないと考えていた高柳を支援

し、テレビを開発させたのです。望ましい未来を最初に思い描き、それに対して何をしたらいいかを考えて、きちんとそれを着実に実行したのが高柳健次郎という人でした。こうしたアプローチを「バックキャストिंग」と呼びますが、同じやり方で伊豆地域の未来をつくり出せたらいいなと思います。

## 8. 松崎町との連携

伊豆半島の西海岸にある松崎町は風光明媚な場所であるとともに、元々は絹織物業で栄えた地域です。日本の東西を結ぶ海上交通の拠点でもありました。一步街を出れば美しい自然があり、町中には「なまこ壁」の伝統建築なども残っています。松崎からは明治の日本社会をいろいろな分野で支える人たちが巣立っていったのですが、その多くが、土屋三余が幕末の松崎に作った「三余塾」の塾生か、その関係者なのです。

特に「松崎の三聖人」といわれたのが、土屋三余と、最初の弟子の依田佐二平、依田勉三です。佐二平は帝国議会議員で、製糸業を近代化した一大拠点を松崎につくって松崎の発展の礎を作った人です。勉三は北海道十勝を開発し、帯広では勉三のことを知らない人はいないぐらいの郷土の偉人になっていて、帯広と松崎は今でも姉妹都市関係を結んでいます。彼の物語は映画にもなりましたし、マルセイバターサンドという北海道のお菓子の名前は、勉三が十勝開拓のために作った晩成社の「成」の字から来ています。

その後もいろいろな偉人が松崎から出ました。例えば石田礼助は、三井物産の代表取締役になった人で、国鉄総裁にもなり、東海道新幹線の開業にも立ち会いました。そうした人たちを記念する資料館も松崎にあります。こういう素晴らしい町が人口減少によって消滅の危機に瀕しているのは、信じ難いことだと思います。

この町の未来を何とかしたい、そのために大学は何ができるだろうかと考えたところ、地域と大学のプラットフォームをつくり、そこでいろいろなステークホルダーが対話しながら、さまざまなプロジェクトを起こしていけばいいということになり、既に活動はスタートしています。

2020年12月20日には、キックオフのシンポジウムが松崎で行われ、オンラインで配信も行われました。その後、地元の中学生と高校生にそれぞれ集まってもらって、松崎の未来を考えるワークショップも行いました。2030年にどんな松崎にしたいかをグループワークで考えて、それを発表しました。

その後の詳しいことは、また別の機会にご紹介したいと思います。

## 報告 2

## 半島地域における高大地域連携による地域発展学習の取り組み

村田和子（和歌山大学紀伊半島価値共創基幹教授）

本日は、大学と地域が連携協働してプラットフォームをつくっていくことが主題なのですが、そのために和歌山大学で行っている高大地域連携の事例紹介を通して、今後の大学の役割について述べたいと思います。

## 1. 課題意識と先行研究

まず、私自身の課題意識と研究目的について触れたいと思います。先ほどの伊東学長からの説明にも重なるのですが、現代の日本社会は地域産業も教育も含めて、あらゆる領域で「再生」「再建」を必要としています。

今日ご紹介する高大連携に関して、二つの大きな動きがあります。一つは高大接続、スーパー・グローバル・ハイスクールなどの、教育学者の本田由紀氏の言葉で言えば「垂直的序列化」です。本田氏は今日の教育について、「垂直的序列化」と「水平的画一化」が強化されていると指摘しています。垂直的序列化とは、学力に加えて近年は人間力などさまざまな能力の高低によって人を選別・格付けするものと定義しています。一方、水平的画一化は特定の振る舞いや考え方を押し付けるもので、古い言い方で言えば教化だと指摘しています。

もう一つは、先ほど来出ているように、人口減少や少子化を背景とした高校・大学の再編や地域経済の疲弊が進む中、地域の歴史や自然、文化を再発見しつつ、持続可能な地域社会のありようや人の生き方を求めて青年たちを地域で育てる動きです。そうした動きを実践的な研究課題として大学・地域連携に位置付ける高大連携がもう一つの柱としてあります。

他方、大学・地域連携は日本の地方創生といわれる政策とも深く結び付いており、特に地方都市の大学にとっては大学経営上の重要なテーマとなっています。しかし、大切なことは、単に大学の生き残りといった戦略にとどまらない地域の再生・再建の主体（人）が育つことへの寄与です。それを通じたコミュニティの内発的発展に対する大学の在り方の探究が重要ではないかという課題意識から、今からご紹介する二つの事例に関わってきました。

まず、高大地域連携の先行研究を簡単に紹介すると、高大地域連携の定義は一般的に、高校と大学、地域がそれぞれの教育資源を活用して連携・協力する教育活動のことであり、既存の教育の改善・充実、新しい学びの場を提供することにあるとされます。特に教育学研究では、2000年代に入ってその動きが顕著であると認識しています。今日はその一端を二つほどお示します。

一つは、読み上げるまでもないとは思いますが、山岸みどり氏の研究です。「一元的な能力主義」や「学びの空洞化」が指摘されているわが国の学校教育において、高大地域連携が主体的な進路選択や学びの意味、学校教育の在り方を問い直し、教育の自治と参加の回路を実質的に切り開く可能性を有するのではないかと指摘しています。また、地域的不均等発展の深刻化に対抗する地域の内発的発展の中に、高校教育を位置付ける不可欠な方策であると述べています。

さらに先行研究では、高大連携の類型化も行われています。ここでは姉崎洋一氏の類型化に

従って、特定高校と和歌山大学との連携授業を取り上げ、事例として高校・大学・ネットワーク・パートナーシップ型事業をご紹介しますと思います。

## 2. 事例紹介

一つ目の事例は、和歌山県紀北地域、高野山の麓にある紀の川市に立地する県立粉河高校を拠点とした高大地域連携授業です（図1）。私自身も大学側の代表として12年間、この取り組みに関与しました。

二つ目の事例は、本州最南端の串本町に立地する串本古座高校の生徒も参画したマナビスト支援セミナーです。これは和歌山県教育委員会と本学が協働して、住みよい地域づくりを目指した社会教育プログラムです。



図1 和歌山県の公立高校立地図（図中●、2021・2現在）

### 2-1. 「まなびの郷」KOKŌ塾

高大地域連携による「まなびの郷」KOKŌ塾の取り組みは、来年度（2021年度）で20周年を迎えます。

事の始まりは、歴史と伝統を有する粉河高校が生徒の荒れに直面していたことにさかのぼります。お聞きするところでは、校内にたばこを含むポイ捨てごみがまるで地層のようになっていて、そのことを目の当たりにした先生方、保護者、生徒による三者協議会を立ち上げるなどして努力が始められました。その後、同校に校長として赴任し、後に県教育長となる山口裕氏がこの状態に接し、生徒たちは本物の学びを求めているのだということを理解します。これは、山口氏の教育哲学に裏付けられた子ども理解だと私は考えています。

そこで、何とか学校を変え、学校の学びを変えるために、豊かな学びの文化が生きる地域であることが重要だと考えたのです。地域からの苦情が絶えない状況を変え、子どもたちを本気で叱ってくれる、つまり人を育てる地域づくりを切に願うわけです。その願いを、当時の和歌山大学生涯学習教育研究センターにいた先輩教授が受け止め、テーマ型のワーキングチームの設置を提案するとともに、大学教員に依頼し、五つのテーマ型ワーキングチームそれぞれに課題に応じた研究者を依頼し、生徒・先生・地域の大人たちが共に学び実践する「まなびの郷」づくりが目指されました

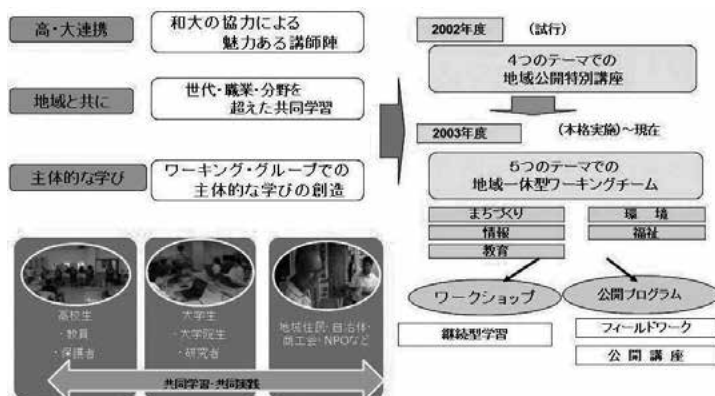


図2 KOKŌ塾「まなびの郷」概要



(図2)。ここで一言まとめておくと、大学の生涯学習は公開講座の提供にとどまらなくて、地域の課題を鋭敏なセンサーで受け止め、学びをプロデュースする役割を担っていると私たちは認識しています。

20年にわたる成果を一口で語ることは簡単なことではありません。荒れた学校の克服は言うに及ばず、私は後発で参画してきたのですが、私が参画した12年前にはもはや、高校がかつて荒れていたという実態は全く想像できませんでした。信じられなかったといっても過言ではありませんでした。大学主催のフォーラムに参加した高校生は、「KOKÔ塾で人生の軸を得た」と語り、別の生徒は粉河の町の魅力を聞かれて、「KOKÔ塾があること」と語りました。初めてお話しする皆さん方には少し分かりにくい説明になっていると思いますが、そのことは、彼らを信頼し、やってみたいという生徒の意思を尊重し、励ます大人たちが地域社会に存在することを意味すると思います。

明らかなのは、20周年を迎えてかつての生徒たちは大人になっているということです。そして、その大人たちの中には高校の先生となって再登場しているという事実があります。その一つが、これからご紹介する串本古座高校です。

## 2.2. マナビイスト支援セミナー

一昨年(2019年)から私は、太平洋に面した串本町に月に1回、マナビイスト支援セミナーの講師として通うことになりました。自宅から車で約3時間かかり、物理的距離が近いとは決まっていけません。地元の人たちは、ふるさとの海を枯木灘かれきなだと呼んで、こよなく愛しています。

一昨年、この地域について学びたいという本学の学生サークルと串本地域の方が交流する機会がありました。高校に配置された地域コーディネーターの住民の方が、地域と学生を仲介してくださったのです。いろいろなことがあったのですが、一つだけご紹介すると、私は単純に地域のことをいろいろ率直に学生に話していただいて交流することを想定していたのですが、「大学生は会ったこともないので、何を話していいかわからない」という声が地域の方々から聞こえてきたのです。対話の場をつくと簡単に言っても、地域社会にとってはこうした現実もリアルにあるのだということを初めて知りました。

取り組みに至った背景を少しご説明すると、第1に、授業を主催する和歌山県教育委員会および串本古座高校からKOKÔ塾紀南版(私自身は決してKOKÔ塾紀南版と考えているわけではなく、オリジナルもあって当然だと思っています)の開発が要望されました。第2に、今もお話ししたように、かつて粉河高校でKOKÔ塾を体験した生徒がやがて教諭として登場していますので、私にとっては生涯学習研究のテーマになるものだとして理解しました。第3に、人口減を背景とした高校再編の動きの中で、当該高校はこの間、3度の再編を経験し、地域に根差した高校づくりを目指して、さまざまな取り組みを進めています。

マナビイスト支援セミナーとは、先ほど来お伝えしているように、和歌山県教育委員会と和歌山大学が協働して2002年から開催してきた社会教育プログラムです。住みよい地域づくりについて住民が学んで、自ら共同学習を進めながら地域の課題解決を図ることを目的としています(図3)。これまで県内2会場で実施し、「紀南の部」は田辺市の会場で15年継続してきました。一昨年(2019年)、串本地域で初めての開催となりました。生涯学習部門の教員には、地域のニーズと大学のシーズをマッチングさせて、講師となる研究者をプロデュースする役割があります。2002年から現在まで44人の本学の研究者に携わっていただいています。修了生たちは県内各地で活躍しており、修了後の自主的なアフターの会なども継続している年度もあります。

昨年(2020年)からはとりわけ、串本古座高校と隣町の新宮市にある新翔高校の生徒に参加

を働き掛け、多くの高校生が参加しました。私自身、興味深く感じたのは、先生たちも市民として参加したり、引率者であった先生が生徒に触発されたり、いつの間にか学習の輪に自ら加わるような場面が見受けられ、先生たちの主体性が引き出されていったことです。受講生は高校生から70代までに広がり、文字どおり老若男女に及びました。

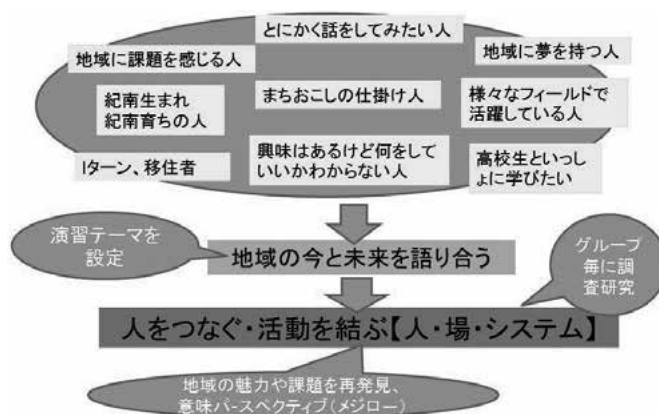


図3 マナビスト支援セミナーの学習の構造

受講動機はさまざまでしたが、地域社会で世代や立場を超えて語り合う場が少ないことが地域ニーズの共通項でした。日頃から地域活性化に関心がある生徒の一人は、「この授業への参加を通じて、実は地域の大人たちも地域活性化について考えていることが分かった」と語っています。つまり高校生たちは、次世代の人たちに地域の未来を託す大人の期待をひしひしと感じながら生きているけれども、大人が何をしたいのかよく分からなかったのです。こうした高校生の実像に出会う中で、大人もまた地域の魅力や課題を再発見していくような自己を見いだすようになり、意識の変容が見られました。

ゼミと称する学習活動では私自身、月に1回の間をつなぐ時間がとても重要だと考えていて、小グループで設定した研究課題について、実態調査や自主活動の深まりが学びの質を規定すると考えています。成人同士、またはそこに高校生が加わることで、時間の調整一つとっても単純に折り合うものではありません。また、高校生も含めて仲間として承認し、対等な関係をつくっていくことも、実は成人の学習に突き付けられる課題にもなりました。

昨年度（2019年度）、企画ゼミのグループが調べた串本町の人口ビジョンによると、「いつかは地元に戻りたい」と回答した高校3年生の割合は40.6%を占めているという興味深いデータも示されました。

こうして2019年度のマナビスト支援企画ゼミの成果はセミナーに提言され、報告書として取りまとめられました。そして、企画ゼミは新たな参加者も加えて2年目を迎え、グループ別に探求した課題の実証化が課題となりました。2020年度はコロナ禍の中、何を目指し学び合うのかということを探る1年となったのです。換言すればリスクとハザードへの挑戦ともいえるべきものです。リスクとは、ギリギリの行為に挑戦することで生まれる人の成長を意味し、ハザードとはこうした環境をいかに地域社会につくり出すかということでもありました。

指摘しておきたいのは、事務方や紀南地域教育事務所の社会教育主事さんたちをはじめとするスタッフの皆さんの創意工夫です。来る2月20日には、セミナーを対面実施で開催する予定になっています。

### 3. 高大地域連携と大学の役割

ここで、改めて学習支援者の役割を五つにまとめました。①地域住民に生涯学習の場を提供し、住民自身が課題を発見する機会をつくること、②地域住民のニーズに柔軟に対応し、企画内容の検討を住民に任せること、③異世代・異分野による対話を促進し、話し合いの相互学習を促進すること、それからこれが一番大事だと思っているのですが、④自由な語り合いを尊重し、課題を探究して、調査研究する方法を伝え、科学的な知見を得ることを奨励すること、⑤こう

した人的ネットワークを構築しつつ、共に楽しみ、地域のつながりを深めること、つまり自覚的な結び手（ノット・ワーカー）となることです。

最後に、高大地域連携と大学の役割について言及して報告を終えたいと思います。学校にはそれぞれの歴史、文化があります。その文化を尊重しつつ、対話を重ね、相互互恵的な関係構築を図るには、通訳者、調整者の役割とそれを支える仕組みが必要です。高校の存続は地域の未来、持続可能性と不可分であり、地方国立大学にとっても重要なテーマです。単一の大学の努力と、それを越えた大学間コンソーシアムとの連携を一層促進し、機能強化を図る必要があります。新たな学校づくりを模索し、展望する高校と地域を橋渡ししていく大学のプラットフォーム機能を、より一層発揮することが求められていると感じています。

## 報告 3

## 紀伊半島における鉄道防災教育を中心とした 取り組みと今後の展開

西川一弘（和歌山大学紀伊半島価値共創基幹准教授）

私は、Kii-Plusの中でKii-Plus全般の部分とリカレント教育、鉄道防災を含む防災の取り組みを進めています。

### 1. 東日本大震災の列車被災

ご承知のとおり、10年前の東日本大震災では大きな被害が生じましたが、こと列車に関しては、乗車中に津波に流されて亡くなった方はいませんでした。それには三つの要因があると思っています。

1点目に、東北自体が地震多発地帯であり、巨大地震＝津波という認知がそもそも土壌としてありました。2010年に発生したチリ地震が一つの契機にもなって、いろいろな対策が打たれていたという面もあります。2点目に、現場知を生かした避難誘導がありました。本来なら列車の運転士は、いわゆる指令から指示された場所に逃げるのが社員としての行動になるのですが、そうではなくて現場の情報を基にした避難誘導や列車内待機の判断があったため、犠牲者ゼロが達成されました。3点目に、津波到達まで時間があったことが最大の要因だったと思います。大津波警報が発令され、避難誘導・指示を開始した時間が平均20分で、最小は1分、最大は41分でした。41分たって行動しても逃げ切ることができる時間的余裕がありました。

ここで重要なのは特に2点目の現場知を生かした避難誘導です。安全な避難のためには乗客が避難させられるという客体的な立場になるのではなく、避難する人・させられる人という関係を打破することが安全につながるということです。そのためには乗客との連携が非常に重要になります。実際、仙石線では快速列車に乗っていた乗客が運転士に「この周辺で一番標高が高い場所だから動かない方がいい」と伝え、列車内待機したおかげで全員が助かったという事例もあります。

### 2. 和歌山での鉄道防災教育の経緯

和歌山では、JRきのくに線という風光明媚な鉄道が走っています。伊豆でも伊東線や伊豆急など景色が非常にきれいな場所を走りますが、いずれも津波襲来までの時間はかなり厳しいものがあります。きのくに線は全長200kmあるのですが、大体3分の1が津波浸水区間です。この区間で迅速な避難を達成するためには乗客の主体性が必要であり、普通列車では最も主要な乗客である高校生の協力が必須となります。そこで、和歌山大学とJR西日本和歌山支社が組む形で、2013年3月、特に高校生を通じた実践的な津波対処訓練を始めました。

和歌山では他にも単発的な訓練もあるので、それを全て合わせると年に4～5回ぐらい訓練を実施することになっています。それぞれメニューは異なるのですが、小中高生など実際の主要な乗客の協力を得るために、学校と連携した鉄道防災教育が進んでいます（図1）。

その中で、幾つかの疑問が生じてきました。訓練を通じた率先避難者の拡大は非常に重要です。訓練以上のことはできませんよね。訓練をたくさんすればするほどいいことは決まってい



るのですが、訓練を拡大するには三つの制約があります。

一つ目が、ダイヤや安全要員配置の制約です。線路に実車両を止めて行うので、安全要員の配置も単なるガードマンでは駄目らしく、配置のコストなど制約はかなり大きいです。また、学校と連携する以上、学校のカリキュラムとしての制約もあります。例えば、土日になかなか連れ出しにくいといった制約があります。



図1 学校と連携した鉄道防災教育

二つ目に、こうした訓練は特に学校では強制的に行うのですが、地元の皆さんと連携するときには、参加する人は意識の高い人、防災に関心のある人が多いですね。そうでない人たちにも防災のことをいろいろ届ける必要があります。

三つ目に、防災対策の事前風評被害というか、津波対策を一生懸命すればするほど、ここは津波で危ない場所なのだという逆のメッセージを届けてしまう可能性があります。

こうした制約がある中で、訓練をただ単に拡大するだけではいけないということで、従来と異なるアプローチを取る必要があるという認識の下、訓練自体を楽しくする方法としてエデュテインメントツーリズム、すなわち津波避難訓練自体を観光商品として位置付けることにJRと取り組んできました。

### 3. 鉄學列車とは

それが、「鉄學」というものです。鉄道防災教育と地域学習をミックスしたもので、地域資源を楽しく学びながら、鉄道からの避難方法も学ぶプログラムです。電車の中で楽しく景色を見たり、普段止まらない所でドアを開けて景色を楽しんでもらったり、地域の食べ物を楽しんでもらったりするプログラムがあるのですが、その中に避難訓練の要素を取り入れています。例えば、地域資源のスポットに列車からはしごで降りて見に行ったり、避難体験をした地点の地域資源の解説を聞いたりする観光的要素があります。

このプログラムでは避難訓練が突如始まったりするのですが、このプロセスの中で列車から飛び降りるときなどの姿勢を学ぶことができます。遊びや観光の目的の人でもそうしたことを学べることによって率先避難者を拡大することが大事ではないかと考え、この鉄學列車をJRと一緒に開発しました。

鉄學列車は、これまでに7回実施しています。最初はJRもどういふふうになるか分からないということで関係者のみで行ったのが1回、観光商品として実際に日本旅行を通じて販売したのが2回、販売はしないけれども学校教育の一環として行ったのが4回あります。先ほど村田先生が報告された串本古座高校の生徒たちも学習の一環で鉄學に参加しましたし、3年前に和歌山で行われた「世界津波の日」高校生サミットのエクスカージョンツアーとして、世界24カ国200人の高校生と一緒に鉄學列車を楽しんだりもしました。

実は幻の8回目が去年（2020年）2月29日で、実施が本当に目前まで来ていたのですが、新型コロナウイルスの感染が拡大し、特に和歌山は経路不明の感染拡大が早かったので、残念ながら1週間前に中止になってしまいました。

和歌山では「紀の国トレイナート」といって、駅舎をアートで活性化するイベントがあり、

駅自体がアート作品的なところもあるので、それとコラボしてアート作品を巡る鉄學も実施しました（図2）。鉄道防災教育という観点では、きのくに線には津波対策として駅間に津波誘導降車台が設置されていたり、誘導看板が電化柱に必ず貼ってあったりするのでそれらを一緒に見たりして、取り組みの最前線を学びます。3月11日に実施したときには、避難訓練が始まる時に東日本大震災の犠牲者に対して黙祷をささげたこともありました。



図2 「紀の国トレイナート」とコラボした鉄學

鉄學のミッションは、これは防災とかなり共通しているのですが、一つ目に「防災と言わない防災」ということで、楽しみながら防災を学ぶ仕掛けづくりが大事だと思います。二つ目に、訓練機会の拡張だけを目指すのではなく、少し違ったアプローチを取ること。三つ目に、鉄道の防災対策と地域振興の融合を図る観点も大事だと考えています。ローカル線は乗車率がかなり厳しい状況です。防災対策はある程度コストがかかるので、路線の活性化を図ったり、先ほどのように津波対策をすればするほどここは危ない地域だという逆メッセージを発信してしまう懸念をクリアしたりするためには、地域振興とも融合する必要があります。これらを実現することが鉄學列車のミッションだと思っています。

#### 4. 今後の課題

事業単体の収益性はかなり厳しいのですが、お客さんに来てもらう波及効果も含めたり、私自身の研究的な調査も踏まえると、別のところで黒字を取ればいいかなと思います。とはいえ、もっとたくさんのお客さんに来てほしいと思っているので、そういう意味では収益性は課題です。

そして、コロナ禍でJR西日本の経営状態は非常に厳しい状態に追い込まれ、鉄學も今後なかなか厳しい状況になっています。個人的にはJRの人的協力が厳しい中でも、オンライン型で実施しようなどといういろいろ考えています。やはり安全な対応は適正な収益があつてこそということを感じてきた時代になってきました。

ちなみに、鉄道防災教育は伊豆急の担当の方がいつも和歌山の訓練を見に来られていて、私も今回対面であれば本当は伊豆急に行きたかったのですが、半島を走る鉄道とそこでの防災対策という点では共通的な取り組みができると思っています。

## パネルディスカッション

阿部(コーディネーター)——ここで、地域の代表の方々にもご参加いただき、自己紹介を兼ねて、それぞれの報告について質問や感想などをいただければと思います。

深澤——伊豆半島の駿河湾側、西南海岸に位置する松崎町の企画観光課の深澤と申します。静岡大学との連携については、丹沢先生や小山先生からいろいろありがたい言葉を頂きながら、これから地域をどうしていこうかというところを大学と一緒に取り組めるのは非常に心強いことです。先ほども和歌山大学の皆さんからいろいろな話があったと思いますが、同じ半島同士といえども、和歌山は紀伊半島がものすごく大きいなと感じました。伊豆半島はまだまだ小さいということを目の当たりにした感じです。

自分たちとしても学生の力もそうですが、大学としての英知を投入していただき、人ともとの知恵が足りていない地方にいろいろ関わってもらうことによって、化学変化を起こしていただければと思っていました。最初は課題がたくさんあるので、それを大学に投げれば何とかなるのではないかと考えていたのですが、それだけではなく相互支援でやっていく方向性がなければ進んでいけないということを感じました。大学生を受け入れるにしても、地域から大学生に何か提供できるものがなければいけませんし、地域の人たちもそうした自覚を持たなければいけません。先ほどもあったように、大学と自治体だけのつながりではいい結果は出ないので、地域で実際に生活している人たちとつなぐことが必要だと感じ、そのためのハブになるためにいろいろ取り組んでいます。

今回もテストケースとして静岡大学と連携しながら、お互いに試行錯誤のところはあろうかと思いますが、で一つのモデルとして伊豆半島の地域、もしくは紀伊半島にも参考になるような実験結果を提供できたら、一層連携できるのではないかと考えています。

山口——南伊豆町企画課地方創生室の山口です。今日は和歌山大学、静岡大学の共同開催ということで、和歌山大学の大変貴重な事例を伺うことができ、本当にありがたく思っています。私ども南伊豆町は、松崎町からさらに南下して伊豆半島の最南端に位置します。次に出てくる荒武さんはさらには東に上った東伊豆町ですので、伊豆半島の西、南、東側の3地域から参加しています。

私も和歌山大学の皆さんのお話を伺いながら紀伊半島はやはり広いなと実感しています。複数県が存在しており、半島といっても大きな違いがある部分と、半島という同じ特性を持っている部分の両方を兼ね備えていると思いました。半島というところでも、特に私が住む南伊豆町などはそうなのですが、人口の流動が少ないと感じています。伊豆半島も紀伊半島も、それから能登半島などもそうだと思いますが、どうしても半島の先端では、高等教育機関もないので、学びの機会が乏しくなっているように感じています。ですので、先ほど高校の魅力化の話もありましたが、中高生が地域の大人から学ぶ機会が非常に少ない状況は否めないと思っています、その点では機関として大学が地域に入っているのは非常に有意義なことではないかと感じています。

伊東先生が三島市出身と伺って、やはり伊豆半島でいう三島の位置と天城山を越えた南側の位置は大きな違いがあると感じており、この辺も半島特有の課題ではないかと思っています。人口減少が半島の南に行けば行くほど進んでいる中でも、人の営みは継続させていかなければなりません。この辺は知識や知恵などで乗り越えていく必要があると思っていますので、今後とも

勉強しながら取り組ませていただければありがたいと思っています。

**荒武**——東伊豆町のNPO法人ローカルデザインネットワークで、静岡大学のフィールドワークの受け入れを担当している荒武と申します。私自身も東伊豆町に受け入れていただいていた学生だった身で、卒業後に東伊豆町に移住し、地域おこし協力隊という制度を使って3年間仕事をさせていただきました。大学の専攻が建築だったこともあって、東伊豆町で空き家を改修するプロジェクトに携わり、町に予算を組んでいただいて、学生が空き家改修に毎月来るような取り組みを行いました。そのときは行政の担当の方が非常に愛を持ってわれわれ学生を受け入れてくれて、そうした地域の方たちの温かさに触れながらも、空き家など地域の複合的な問題にも触れ、実際に移住しながら空き家問題を含めた地域課題の解決にもっと取り組みたいと考え、地域おこし協力隊に手を挙げました。

私自身も学生として受け入れてもらった立場だったこともあって、東伊豆町に協力する中で、後輩たちも7年ほど空き家改修の活動を続けてくれているので、そうした学生たちを受け入れたり、先ほどお話しした静岡大学のフィールドワークの学生たちを受け入れたりしています。

まだまだ学生たちと一緒に学びながら地域で活動して、喜びも苦しみも分かち合いながらやっている身ですので、本日の和歌山大学さんの半島内での取り組みや、中でも西川先生にお話しいただいた鉄道防災の話は、東伊豆町にも伊豆急が通っているので大変興味深いものがありました。これまであまりそういうことは考えてこなかったのですが、共通の課題として海沿いを走っているので、今日いただいたお知恵を基に地域の人たちや学生たちと考えていけたらと思いました。

**阿部**——私も静岡大学の取り組みやジオパークのことは割と知っているのですが、和歌山大学さんの取り組みは、こういうものがコンテンツになるのかというふう非常に興味深く感じました。そのようにお互いに発見があったり、ここが聞きたいということがあったと思いますので、パネリスト相互で質問をお願いしたいと思います。

**深澤**——村田先生のお話の中で、学生、先生と地域の人々が共に学ぶというキーワードがあったと思いますが、得てして教育といえどどちらかが教える側になってしまっていて、立ち位置がうまくいかないところがあります。われわれも静岡大学と連携する中で一番のキーワードは対話になっていますが、共に学ぶことをどういう形でやっているのか、こうしたらいいのではないかというアドバイスがもしあればお教えいただきたいと思います。

**村田**——私はそれほど懸念がないというか、大人たちも心得ていて、経験談を人に語ってしまうような方もいないことはないのですが、一人一人が対等な関係であるということは、講師も担当の社会教育主事も言葉の端々に出して伝えていきますし、皆さんでそういう場を意識的につくっていると思います。

その中で、高校生たちの思いを引き出そうとする大人たちが、こうした学習の場にむしろ積極的に出てきているという気もするのです。高校の先生方に言わせれば、1年目は比較的意識高い系の生徒たちだったとお聞きしていて、2年目は先生方が少し外に連れ出したい生徒たちを引っ張り出した傾向があるので、1年目と2年目では大人との交わり方に少し変化が見られたという気もしています。ですから、まずは案ずるより産むが易しかなと思います。



**深澤**——まずは失敗を恐れずやっていきたいと思いますので、またぜひご指導よろしくお願ひします。

**山口**——伊東先生に伺いたいのですが、別の会議で「教育は非常にコスパが高い」という話を聞きました。確かにそう感じる一方で、地域との連携・協働の取り組みは非常に時間がかかる作業であり、結果が出るまでには相当な期間を要すると思います。われわれ行政の立場としては非常に課題意識を持つ部分なのですが、行政と作業をしている中で、やはり行政としては割と短いスパンで動くものですから、結果も割と短い期間で求められます。その辺の教育と行政との関わりに対する時間軸をどのように捉えておられるのか、伺えればと思います。

**伊東**——大変難しいご質問をいただきました。教育をする立場としては、学生が何を学んでくるかということを考えなければいけません。それは自治体側から出てくる課題とは必ずしもタイムスパンが同じではないので、そこを調整しなければならいでしょう。学生が地域に入って活動することによって得られるものを、教員側あるいは研究者側がある程度見極めないと、なかなか教育効果になりません。

学生の教育効果にならないということは、学生が活動して満足を得られないことになりかねないので、そこについては自治体とよく協議しなければいけません。実のところ今までは、われわれも教員と自治体との間で個別に築き上げてきた信頼関係の下、それをきちんと担保する仕組みをつくっていたのですが、教員数もどんどん減っています。自治体側でも役所内の人間が減っていると聞くので、そういう中で必ずしも良好な人間関係、信頼関係を築けない可能性が出てきます。

ですので、われわれは和歌山市の元局長級の方を Kii-Plus のプログラムオフィサーとして迎え入れ、本学の理事には和歌山県の局長級の方を知事に直接お願いして迎えていて、その理事の方には副基幹長にも就いていただいています。こうした方々を通じて自治体のトップや担当課などと調整しながら信頼関係を築いていくことで、自治体のタイムスパンと学生のタイムスパンをできるだけ合わせる努力をしています。そのぐらいしか、なかなか今のところ申し上げられないところです。

**阿部**——大学間でもよろしいので、質問や感想はありませんか。

**伊東**——静岡大学の場合は地域に関わる組織がかなり個別に存在しているような形でした。その連携はどういうふうになっているのでしょうか。われわれの大学は結構小さいものですから、今まで組織がかぶることはほとんどなく、個人ベースでの活動ばかりでした。ですから、まとめるのは比較的容易だったのですが、静岡大学のように大きな組織になると、それぞれの組織がそれぞれのポリシーやミッションを掲げて活動していると思いますので、お互いの活動の調整や他組織との連携によって行う活動はどのようにされているのでしょうか。

**丹沢**——非常に難しいご質問をいただきました。伊東先生がご指摘のように、今回まとめた地域創造教育センターや防災センターなど、確かに地域貢献に関係するさまざまな組織があつて、それがむしろ独立してばらばらに活動していたものですから、今回新たにもう一つセンターを加えて、未来社会デザイン機構にまとめ上げました。同時に、個別の教員が地域と結び付いている現状は、和歌山大学さんと全く同じで、それをまとめ上げることが趣旨だったのですが、

私の報告でも最後に課題として取り上げましたけれども、やはりそれぞれに性格がいま一つはつきりしていないところがあります。

例えば、地域が個別の課題解決を一緒にやろうと言って大学に問い掛けようとするときに、地域創造教育センターに言えばいいのか、私どもの機構に言えばいいのか、あるいは機構とかなりだぶっていますが、サステナビリティセンターに言えばいいのか、機能の切り分けがまだなかなかうまくいっていません。このプログラムは第3期中期目標計画の中で2年間進めてきたものですから、第4期を迎えるに当たって組織再編は必然的にもう一度行わなければならないと考えています。そこはまさに本学の大きな課題であり、そこを克服すべく、あと1年頑張っていきたいと考えています。

実は、伊東先生のお話を聞いていてうらやましかったのは、和歌山大学の組織というのは学長がトップに立っていることです。私どもが一度訪れた岡山大学も同じような形で事業を展開していたのですが、そうした形を取ると、トップダウンではないですけれども、大学として運営がぐっとしやすくなるだろうと思うのです。本日は石井学長がいらっしゃいますけれども、静岡大学も組織のトップは学長直轄が望ましいと考えているところでありまして、和歌山大学としては今回のような体制を取るに当たって何か苦勞された点や留意すべき点があれば、お聞きしたいと思いました。

**伊東**——実のところ、苦勞はあまりしていないのです。というのは、われわれのところはあまり大きな大学ではありません。むしろ地域貢献のミッションが結構大事だと考えていたので、そこに個別の教員がかなり負担を持っていました。特定の教員だけがやってしまうと、大学として組織的に地域貢献ができないことは前々から分かっていたので、今回 Kii-Plus を整備するに当たって、まずはそういうところを整理しようと考えました。

学長の仕事は結構多岐にわたるので、その整理もしています。従前はいろいろな会議の議長を全て学長がやっていたのですが、権限委譲をかなり行って、理事の下でそれぞれの会議を行う形にして、学長の業務を少し減らしたのです。その分、学長は外に出てトップセールスをしてくる形にまとめていて、西川さんなどは「ここの自治体の首長に会ってこい」とすぐに言うのです。それを全部優先的にスケジュールに入れているので、かなり機動的に学長を動かす組織になっています。

それから、学長が地域貢献のトップになっていると、各部局から出てくる地域貢献関係の話が全部把握できるわけです。そうすると、私の方から「こことここが連携したら面白いのではないか」という提案も逆にできるのです。それは結構面白い結果を生みつつあって、例えば和歌山は関西国際空港が近いので、外国人が来ます。この外国人を地域に入れる短期研修プログラムを作ろうということで、国際連携の部門が動いています。今までであれば和歌山大学のキャンパスだけという話になるのですが、これを紀南地域で、例えばジオパークになっているところや熊野古道などに入れていく取り組みもスタートしつつあります。

**丹沢**——うらやましい限りです。

**伊東**——松崎町、南伊豆町、東伊豆町の皆さんにも参加していただいているのですが、実のところ和歌山県でも人口減少がかなり大きな問題になっています。先ほど紀伊半島は大きいですねという話があったのですが、人口はそれほど多くなくて、むしろ過疎化のスピードは南伊豆よりもかなり進んでいるのではないかと考えています。

先ほど村田から高校統合の話も出ていましたが、和歌山県教委の方でもかなり進めています。しかし、村田の今日の報告にもあったように、高校や中学が地域のセンターになるという考え方は絶対に必要なだろうと思っています。その点で、南伊豆では学校をセンター化することや地域における学校の役割についてどのようにお考えなのか、お聞きしたいと思います。

**深澤**——賀茂地域という伊豆南部の1市5町には高校が計3校あって、その中心となっているのは下田高校です。東伊豆町に稲取高校、松崎町に松崎高校があって、南伊豆町にも下田高校の分校がありますが生徒数は少ないです。ただ、松崎高校も稲取高校も分校に近づいていて、今後の出生数などいろいろ見ていくと、10年後は多分そのまま下田高校の分校になることが推測されるような状況ではあります。

伊東先生がおっしゃったように、高校の存在意義を見つけていかなければならないことと、先ほどチャットの質問に、島根県の隠岐島前高校が国内留学などを受け入れて地域の課題解決をすることでにぎわっているという話があったのですが、人口や教育というのは数ではなく、やはり質を上げていくことに尽力すべきだということを最近のテーマとして考えています。

実は私どもも棚田サミットに行ったことがありまして、棚田保全などは特に共通した課題ですし、人口を考えると減っていくのは仕方ないと思うのですが、人間の数ではなくて人間の質をいかに上げていくかという意味では、高校の在り方や大学との連携は非常に必要だし大事なことだと感じています。

**山口**——深澤さんがおっしゃったように、伊豆半島の南部地域には三つの高校があり、確かに人口減少とともに高校の統合も数年前から検討されていますし、現に元々四つあった学校が三つに統合されているわけです。南伊豆町には下田高校の分校があり、園芸科ということで特別高校という形に位置付けられていると思います。

やはり行政職員としては、国内留学なども検討することで学生数を増やせるのではないかとすることも検討材料にはなりますけれども、半島の先端にある各高校の地域における位置付けからすれば、専門性を生かした高校として学生を外から呼び寄せることが、果たして地域にとって、地域の子どもたちにとって良い選択肢になるかどうかも含めて考えなければならぬと思っています。

静岡県内では川根高校が域外からの高校生を受け入れていて、ゆくゆくはそういうことも含めた選択肢を進めていかなければならない可能性が出てくるとは思いますが、現状では地域の中でもう少し議論が必要になってくると思っています。地域に落とし込んでみると当事者である保護者や生徒は、割と多くの人の中で学ぶことが必要になってくると思うので、統合も一つの選択肢というか、統合に向けた考え方もあると思います。

一方、地域として見ると、学びの拠点や文化の拠点となっているわけです。そうすると、統合することで地域がさらに衰退してしまう可能性を秘めていて、地域としてはなかなか学校統合は受け入れ難く、統合してほしくない形で動いていくのではないかと思います。

南伊豆分校では町の方も関わって、一般の社会人にも高校の活動に参画していただけるようにしたいと考えています。ただ、県立高校ですので、市町が関わるためには県との調整も必要となります。市町村立の小中学校であっても、教員は県の職員ですので、こういったところでも若干の考え方の相違が出てきます。学問と行政の関わりはなかなか難しい部分もありますけれども、そこも含めて今後はしっかりと地域の中で議論していく必要があると思っています。

**石井**——今日は大変面白く聴かせていただきました。お互いにいろいろ違ったところで連携していますので、お互いが教え合うような関係になっていけばいいのではないかと思います。私は学長退任後5年以内に三重県に移住する予定にしていますので、紀伊半島の東と西で協働していければと思います。紀伊半島の最南端は行ったことがないので、それも楽しみにしています。

**阿部**——伊豆と紀伊で学長相互が入れ替わるような感じになりますね。ありがとうございます。他にいかがでしょうか。

**西川**——荒武さんのキャリアに非常に興味があって、一つだけ質問します。受け入れてもらっていた側から受け入れる側にキャリア転換されたわけですよね。その最大の後押しになった理由は何だったと思いますか。

**荒武**——実は、静岡大学の阿部先生がそこに気付かせてくれた方の一人だと思っています。僕が学生時代に、静大が東伊豆町で大学と地域の連携フォーラムを開いてくださって、そこに急ぎょ登壇する機会があったのですが、地域として学生の活動を受け入れていきたい、大学としても地域と連携していきたいという中に学生たちがいて、やはり自分が地域でどういう貢献ができるのかを模索していた時期でもあったので、そういう立ち回りができるのではないかと考えたことがきっかけでした。

**西川**——荒武さんは静岡の人でもないのですよね。

**荒武**——僕は横浜出身です。

**西川**——分かりました。ありがとうございます。

**村田**——話は変わるのですが、ご質問にあるように、隠岐島前高校の取り組みは私が長々とご説明するまでもなく、人口減などを背景にして、高校をいかに魅力的に展開しながら、交流人口の促進、ひいては人口増につなげていくかという背景があると思うのです。さらに言えば、日本各地の離島や中山間地で特に高校魅力化の予算を確保して進める傾向が見られると思います。今日事例を紹介した串本古座高校もその一つです。

つまり、そこでもある種の競争が生まれていて、田舎の魅力ある選ばれる高校が選別されていく側面があると思うのです。その際に、串本古座高校の場合、土地に対する魅力がその高校を選ぶ理由になっていることと、選ばれた先には高校の先生による受け皿づくりと地域住民の人たちの理解と協力がやはり不可欠なようです。例えば、台風などの天災が非常に多い地域だと、都会に暮らす子どもが留学先で非常に恐怖におびえているのではないかという保護者の対応に学校が苦慮しているという話もあります。そういったことに地域の方のサポートが何かあると、保護者の心配も払拭されていくような気もするのです。

やはり学校が全て自前で問題を解決するわけにはいかないのです。大学と地域の連携も確かにさまざまな問題がありますが、調整したり、橋渡しをしたり、コーディネートしたりするような人と機能が、大学だけでなく地域側にもあることが今後ますます重要になっていると思います。その際に、私の結論は高校の先生もコーディネーターになりえると思います。やはりそ



これを克服していくような道筋が展望されていないと、大学も含めた学校と地域の連携という問題を根本的に次の段階に進める話にはなかなかかなりにくいという気もしています。

**山口**——今の村田先生のお話にもあったように、地域の協力体制が不可欠だということは私も感じていて、併せて地域側に行政とは一線を画した中間支援組織のようなものがあるとさらに効果が高くなるのではないかと考えています。今回の取り組みに関しても、そうした機関が入っているのかということも含めて、中間支援組織の在り方や必要性をどうお考えになっているか、村田先生と伊東先生にお伺いできればと思います。

**村田**——今日お話しした「まなびの郷」KOKÔ塾も串本古座高校も、地域側に商工会やNPOなどさまざまなアクターはいても、組織的な中間支援組織があるわけではありません。

串本古座高校は、まだ関わりを持って薄いですが、先ほどの事例で述べたように高校に設置された地域コーディネーター職という方がいます。具体的には自治体OBの方で、地域を非常に熟知しておられて、自治体の都合にも非常に長けておられるのです。しかも、地域住民としても非常に人望があるような方が選ばれていて、この方が職業生活で培ったさまざまな力を生かして、地域のさまざまな問題をさばき、われわれとの結節点の役割を果たしています。特定のNPO法人でなくてもこうした人と、それから属人的であってはまずいと思うので、仕組みにつながるようなものが少しあると、大学にとっても地域にとっても持続性につながると思いました。

**伊東**——村田が申し上げたとおり、われわれの活動には中間支援組織なるものは存在していません。むしろ地域とダイレクトに連携しているのが実情で、これまでも教員が地域に直接入って、例えば自治体やNPO組織と取り組んでいるのが現状です。これが大きな活動になると、どうしても中間支援組織なるものが存在する可能性は出てくるとは思います。例えば、和歌山県は人口が100万人を切っており、東牟婁郡、西牟婁郡などでは人口密度がかなり小さくなっています。そうした地域では一つの自治体だけでなかなか動けないこともあります。そうなるとうる行政を考えなければなりません。そうした場合、各自治体というよりは各自治体の連合体あるいは協議会と連携することも出てくるだろうと思っています。

実のところ、伊豆半島よりも紀伊半島の方が強烈に過疎化、人口減少が進んでいるので、われわれもよく大学内で和歌山県は課題先進県であると言っています。日本で起こる課題のほとんどは和歌山県、紀伊半島で起こるわけです。われわれKii-Plusの活動は、そこを必ずしも解決できないかもしれませんが、どのように取り組んでいくかが問われていると思っています。

**阿部**——賀茂地域の三つの自治体で取り組みをしている3人の方々にパネリストとして参加いただいています。実は当初、新型コロナ感染の心配がなければ下田市の賀茂キャンパスで実施する予定でした。私も非常に楽しみにしていましたし、和歌山大学の方々にも来ていただきたかったと切実に思いますが、賀茂キャンパスでの実施を計画していたときに賀茂地域局の皆さんに非常に協力をいただきました。今回参加いただいていますので、賀茂地域局様から質問や意見、感想などを頂ければと思いますが、いかがでしょうか。

**静岡県賀茂地域局 西ヶ谷**——先生方、ありがとうございます。賀茂キャンパスを少しご紹介しますと、学長、副学長には何度も足をお運びいただいて昨年1月、下田市にある県総合庁

舎内に、賀茂地域1市5町の大学連携を促進する場所ということで賀茂キャンパスを開設しました。昨年4月以降、一気に一気にさまざまな対面を通じた交流を図りたかったところでしたが、コロナ禍のため足踏み状態の中、オンラインでいろいろ活動しています。

私ども賀茂地域局には、地域振興を担う地域課と地震防災対策を行う危機管理課があり、危機管理と地域振興を両輪で回しています。静岡県は東部、中部、西部、賀茂の4区域に分けて活動しており、伊豆半島の南半分の1市5町エリアを私ども賀茂地域局が所管しています。静岡大学をはじめ県立大学、文化芸術大学の3大学との連携協定に基づいた大学交流と、各市町がそれぞれ交流を持っていた大学の方々にも活用していただくために、賀茂キャンパスをご用意しました。

先ほど来お話が出ている中で、私どもも危機管理を標榜していますので、西川先生にご紹介いただいたような鉄學の話は興味深いものがありました。私どもも賀茂防災会議というものを県防災会議の下に位置付けており、そこに防災関係機関として伊豆急も参画していますので、例えば西川先生に来年（2022年）の賀茂防災会議にご参画いただいてご紹介いただくのもいいなと思いました。同時に、賀茂キャンパス自体も活用推進委員会ということで、3大学や各高校、1市5町の教育委員会、県教育委員会が参画したテーブルを4月か5月に開きたいと思っていますので、ぜひ伊東先生もご招待できるような企画を練られないかと思っています。

南紀白浜と同様、下田市も白浜を要していて、それぞれの交流が盛んになっています。先ほど来出ている隠岐島前高校についても、4年ぐらい前に先生をお招きして管内の教育長の皆さんに講演を聴いていただいたというつながりもあるので、それぞれの取り組みを共有した上で進めていければと思っています。

最後にデータだけなのですが、和歌山県が現在約90万人の人口であるのに対し、伊豆半島の7市6町で現在約66万人、そのうち賀茂地域1市5町は6万人を切っている状態です。今の高校1～3年生が400～450人程度、去年生まれた新生児は250人ほどであり、国立社会保障・人口問題研究所によると、20年後には117人になると推計されます。やはり他の半島地域と同等に人口減少の速度が速まっている傾向がありますので、ぜひ大学の皆さまのお力添えを賜りながら地域活性化を図っていききたいと思います。

それで今日決意したのは、何としてもこの縁を逃さずに和歌山大学の皆さんを賀茂キャンパスにお招きできたらということです。ありがとうございました。

**阿部**——私からも質問してよろしいでしょうか。和歌山大学の紀伊半島価値共創基幹にはKii-Plusという愛称が付いています。紀伊半島と掛けてあって、とてもいい名前だと思います。伊豆半島でも拠点の東部サテライトに「三余塾」という名前がありますが、大学は組織改編などいろいろな事情で、センターの名前が頻繁に変わります。私がいる地域創造教育センターも4～5回目ぐらいで、そのたびに覚えてもらわなければならないので何とかしたいと思っていますのですが、もし組織の名前が変わったとしても、三余塾という名称があれば伊豆半島の方々になじみ深いと思います。その点で、Kii-Plusという名前はどんな意図があって付けられたのでしょうか。

**西川**——紀伊半島のKiiに、価値や共創をプラス（Plus）ということで付けたのですが、阿部先生がおっしゃるように、大学は本当にいろいろなところで組織改編がかかります。ひょっとしたらわれわれ基幹もかかる可能性はありますが、地域の皆さんにとっては大学という目線は何も変わらないわけです。大学側と文科省、その裏の財務省の事情で変わっていくわけで、そう

なったときに名前がばんばん変わるのはいくつか私も思っています。ですので、仮にもっと大きな地域で取り組みなさいということで正式名称が南海道価値共創基幹に変わったとしても、愛称のKii-Plusだけは変えないでおこうと決めています。地域連携する組織はこの組織であるということで、Kii-Plusという名前は常に残るようにするため、あえて本籍地の名前と愛称を付けました。

**阿部**——未来社会デザイン機構も地域との関係がサステナブルであることを目指していますが、名前がサステナブルでないのは望ましいことではありませんので、とても参考になりました。

本日は大変ありがとうございました。フロアからもチャットでたくさんの質問が来ていますが、そちらにはチャットで回答があったりして、別ラインでうまく進んでいると思いました。

私たち未来社会デザイン機構も、今回はプラットフォームというテーマになっていますけれども、村田先生からご紹介いただいた高大連携の取り組みが、通常イメージされるような大学教授が高校に公開講座をしに行くレベルではなく、学ぶ場、プラットフォームをつくるものであってほしいと願っています。印象的だったのは、そこで教わった高校生が今度は教える側の先生になって、またそこに参加しているという話でした。プラットフォームという横に広がる連携のような感じがしますが、縦の循環も既に生まれてきていることは本当に参考になりました。

われわれのプラットフォームも、例えば中高生が今度は担い手として、ファシリテーターとして戻ってくるような形を考えなければ継続的ではないなと思いました。そういう意味で、また個別に村田先生や他の先生方に話を伺いに行きたいと思っています。

それから、今までパネリストの先生方からも何人かお話しいただいたように、1回限りのイベントで終わればすぐに忘れられてしまいます。今回が第1回だと思いたいのですが、実際には集まっていないのでプレ開催のようなものであり、伊豆半島か紀伊半島に集まることができた時点で正式な第1回としたいと思います。ぜひ来年度以降も継続して、この場も一つのプラットフォームになるかと思っていますので、継続していきたいと思っています。

## 閉会の挨拶

竹之内裕文（静岡大学未来社会デザイン機構教授）

今日は貴重な学びの機会をいただき、ありがとうございました。私は「鉄學」ではなくてフィロソフィの哲学が専門です。未来社会デザイン機構では、デザインや企画などを担当していません。静岡大学に来たのは15年前で、それまでは東北大学にいました。仙台で結婚したのですが、新婚旅行は南伊豆に行きました。静岡大学に来てからはずっと農学部で仕事をしてきましたが、2020年4月に機構ができてからは機構を主に担当しています。

私は2011年にスウェーデンで暮らしていたときに対話というものと出合って以来、対話をライフワークにしています。市民と一緒に死について考える死生学カフェを開いたり、哲学対話塾を開いたりしてきました。今日お話を伺って思ったことは、大学の使命というのは、村田先生が「本物」とおっしゃったように、何か表面的なことで適当に時流に乗って泳ぎ回るのはなく、そういう術も必要なのでしょうけど、やはり本物を追い、本物を若者に見せてあげて、本物を地域の中で発掘していくことなのではないかということです。

今日とてもいいなと思ったのは、発表者の方がみんな正直だったことです。それは本質を共に追うために大切なことです。きれいに取り繕わないで、「できていない」ということをお互いに言い合えるからこそ学び合えるのではないのでしょうか。学び合うことや人を育てることは、時間がかかります。でも、大学は元々、人が育つ場所ですから、時間がかかることをしているわけです。人が育ったかどうかは測りがたいところもありますが、人が変わっていく姿は各シーンで見ることができますよね。

私たちの機構ではこの2月（2021年2月）、松崎高校生とワークショップを2回行いました。1回目のワークショップの始まりと終わりでも変化はありますし、1回目と2回目の間でも変化があります。人が変わっていくのを見るのはとても楽しいことであり、本当に高校生はかわいいなと思いながら、喜んで静岡から車で3時間かけて参加していました。

和歌山大学のことは阿部先生から伺っていて、内輪でのミーティングも一度したのですが、今日は和歌山大学と価値共創と一緒にできるという手応えを得ることができました。今日拳がっていた言葉を拾うと、パートナー、ネットワーク、一人一人に目を向けていくこと、学び合う、対話する、主体形成などがありました。主体形成というのは、対話を通して学び合うことで、他の人の主体形成にもなっていくと思います。それが人生の軸になったり、町の誇りをつくっていったりするのではないかと。阿部先生がふれられていたように、循環をつくっていくことは、空間の中の循環でもあるし、時間の中での循環もあって、それが世代継承なのではないかと思いました。

とにかく今日はとてもありがたい機会で、本当に多くのことを学びました。私のメモは山のように散乱している状態です。最後にこれで締めようと思っていた言葉は阿部先生に先に言われてしまったのですが、ぜひ半島サミットをやりたいと思っています。次回はその土地のにおいをかきながら、オープンな場にして地域住民の方も参加して、できれば1泊して、夜は夜のバージョンでまた語り合っ、ダイナミックなプラットフォームができればと思っています。

こうした場ができたのは、やはり阿部先生のこれまでのライフワークなのだろうと思って、本当に個人的ですけれども感動しながらお話を伺っていました。私は、阿部先生とはバックグラウンドが全く違いますが、阿部先生のやってこられたライフワークを自分なりに受け継ぐ思いが自分にあると気づかされました。

本日は長時間にわたって、他の参加者の方々とともに、非常に関心を持って話を聞かせてい



ただきました。その方々の思いを代弁して、お話くださった皆さんに感謝を申し上げたいと思います。ありがとうございました。

# 相互的な学びを伴った課題解決支援

静岡大学地域創造教育センター長  
阿部 耕也

地域創造教育センターの前身は、平成9年に静岡大学における大学開放・地域連携の拠点として開設された生涯学習教育研究センターです。ふりかえると何度かの組織改編をへながら、地域人材育成と学生教育との連結、地域社会と大学の相互的な活性化の窓口としての役割を担って四半世紀活動してきたと感じます。

地域社会の創造に貢献できる人材育成を目指し開設された全学教育プログラム・地域創造学環と合流し、平成29年10月に開設された地域創造教育センターも5年目を迎え、地域と大学の学び合いの中で人材育成と地域課題解決に取り組んでいます。

令和2年4月には、新たに設置された未来社会デザイン機構の一員となりました。これまでの方向性を引き継ぎつつ、地域と大学との対話を通し、バックキャスティングで地域社会と大学のあり方を構想しながら様々な実践を重ねることにより、地域と大学との関係も新たなステージに入ったと実感しています。

フィールドワークやプロジェクトで課題提案地（例えば伊豆半島賀茂地域）におもむくだけでなく、たとえば稲取高校生が探究の時間の一環として大学を訪問・交流したり、フィールドワーク地に関わる複数の大学のサミットを開催したりと様々な方向性をもつ取り組みも始まっています。

また、地域に根付きつつ、同じような課題や資源をもつ他地域での取り組みにも目を向け、情報・意見交換を行うことも重要だと考え、昨年度に引き続き、和歌山大学紀伊半島価値共創基幹との連携を図りながら課題に立ち向かうという方向性も深めたいと考えます。

平成25年度に始まった地域課題解決支援プロジェクトも9年目を迎えました。各地で取組が行われ、7冊の成果報告書にみるように、地域の様々な方々との交流を通して、学生も教職員もたくさんのことを学んでいます。様々な試行とその蓄積のなかで、具体的な地域課題を中心におきながら、相互の学び合いのなかで課題解決を考える実践が蓄積されつつあります。課題解決の取り組みが持続可能な営みとなるためには、この相互的な学びが背景にあることが重要だと思います。

これまでの報告書の中でも述べたように、地域課題解決支援プロジェクトは大学が地域づくりの担い手・パートナーになろうとする取組ですが、地域からの様々な働きかけ、協力、支援がなければそもそも成立しない試みです。これまで同様、地域の皆様のご支援をよろしくお願い申し上げます。

静岡大学  
地域課題解決支援プロジェクト成果報告書 第7号

発行日— 2022年3月25日

発行— 静岡大学地域創造教育センター

編集— 大谷悦子

連絡先— 静岡大学地域創造教育センター 地域人材育成・プロジェクト部門

〒422-8529 静岡県静岡市駿河区大谷836

☎054-238-4817 E-mail : kaiho@suml.cii.shizuoka.ac.jp

ウェブサイト— <https://www.lc.shizuoka.ac.jp/>

印刷— 株式会社三創